



2020.8
VOL.3

グローバル マネジメント

The Global Management of Nagano

【論文】

吉田流の鷹書と鷹術流派—紀州藩の事例を手掛かりにして—
..... 二本松泰子 1

CEFR-J Can Do Self-Assessment and TOEIC Listening and
Reading Scores Jean-Pierre Joseph Richard 21

自治体電力事業における公私協働
—ドイツ再エネ分野における市民参加の動きを踏まえて—
..... 宮森 征司 33

全員参加の短期海外研修の教育的効果～修正版グラウンデッド・
セオリー・アプローチ (M-GTA) を活用して～..... 真野 毅 45

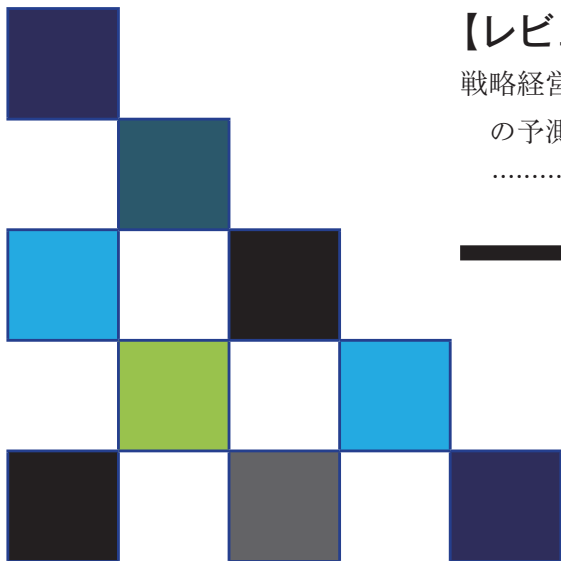
エマソンとヤコブ・バーメーコールリッジを媒介として—
..... 高梨 良夫 64

英国における財務報告の法執行制度の設計
—キングマン報告書と FRC の改組の提言— 金 賢仙 81

The life and remarkable achievements of Anita Roddick,
a dreamer, a doer and a female entrepreneur 富田 裕子 100

【レビュー】

戦略経営の父、イゴール・アンゾフ—乱気流の体験が、環境の変化
の予測にもとづくシステム思考の企業戦略論を生み出した—
..... 森本 博行 124



吉田流の鷹書と鷹術流派

—紀州藩の事例を手掛かりにして—

二本松泰子

はじめに

中世末期以降、我が国において鷹狩りを行ったのは武家の鷹匠であった。すなわち、將軍家や大名家に仕えた鷹匠たちが主君のために鷹を飼い、鷹狩りの実技に従事したのである。彼らの実技にまつわる鷹術は一種の礼法とみなされ、それぞれの流儀に応じてさまざまな流派が成立した。それらは鷹書と称する鷹狩りの伝書を伴って伝授された。鷹書には鷹狩りの実技に関する知識以外にも、鷹に関する説話や縁起といった文芸的な叙述が多く記載されている。このような鷹書と鷹術流派が伝播してゆく過程を通して、中世末期以降の鷹狩りは武家の教養的な技芸として成熟することとなった。当時の放鷹文化は、鷹匠たちが携えた鷹書と鷹術流派の伝播とともに発展していったと推測される。

さて、このような中世末期以降に隆盛した鷹術流派の中に、“將軍所縁”というブランドを以て武士に支持された二つの流派がある。その一つは、徳川幕府初代將軍・家康所縁の“祢津流”で、もう一つは八代將軍吉宗所縁の“吉田流”である。前者は家康に抜擢された信州小縣郡（現・長野県東御市）出身の戦国武将である祢津松鶴軒が伝授した流派で、後者は吉宗が將軍に就任する際に紀州藩から連れてきて公儀鷹匠に登用した人々に流布した流派である（注1）。こういった祢津流や吉田流の鷹術は、テキストを伴いながら広く伝播し、格式の高い流派として武家の間でもはやされた（注2）。

本稿では、武家の鷹術流派に関する文化史上の意義を重視する立場から、吉宗所縁の鷹術流派の吉田流に注目する。具体的には、紀州藩の鷹匠である高城家に伝来した吉田流の鷹書を取り上げる。当家伝来の鷹書は、これまでその存在のみが知られていたが（注3）、詳しい内容については明らかにされてこなかった。また、先学の研究で紹介されてきた吉田流の鷹書群は、その伝授の系統（＝伝系）に吉宗と関わる公儀鷹匠の名前を介在させるものがほとんどである（注4）。その一方で、高城家伝来の吉田流の鷹書群には、伝系にそういった名前が見られないものが多く含まれている。このことから、高城家伝来の吉田流のテキストは、当該流派の実相を検証するための新たな手掛かりとなる情報源と言えよう。

そこで、本稿では、まず高城家の系譜と当家に伝来した鷹書群について紹介し、次いでそれらに含まれる吉田流のテキストの叙述を分析してその特性を検討する。それによって、近世期における吉田流の鷹術伝播の一端を明らかにし、こういった鷹術流派が形成する武家流放鷹文化の実像にアプローチする一助としたい。

一 紀州藩の鷹匠・高城家

先述のように、吉田流の鷹術が武家の間で爆発的に広まったのは、吉宗に重用された公儀鷹匠たちが吉田流の鷹術をたしなんでいたからである。高城家は吉宗に従って公儀鷹匠に登用されたわけではなく、初代藩主の時代から幕末まで一貫して紀州藩に仕え、鷹書と鷹匠文書を多数伝えた。紀州藩士としての彼らの存在は、同藩の公式記録において確認できる。たとえば、初代藩主の徳川頼宣時代の同藩の分限帳である『国初御家中知行高』（注5）において、「御鷹匠衆」の一人に三十石三人扶持として「高木甚之助」という名前が見え、さらには延宝五・六年（一六七七・一六七八）頃の同藩分限帳とされる『和歌山分限帳』（注6）に、禄高二十石の藩士として「御鷹匠 高城庄蔵」「高城甚之助」と見える。なお、高城家に伝来する鷹書や鷹匠文書は、現在、和歌山県立博物館に「紀伊藩士高城家資料」として所蔵されている。

このような高城家について、まずはその系譜を確認するため、高城家資料に含まれる系図類の中から、奥書に最も古い年紀（寛政十年（一七九八）十二月）が見える『系譜』（資料番号369）（注7）の全文を以下に掲出する（割注は〔 〕で示し、句読点は私意に付した。以下同じ）。

系譜

源姓 高城氏〔家之紋丸ニ笹龍膽替紋 丸ニ鷹羽〕

旧記既絶仕始祖是外書儀不相知

嫡祖〔本國相模 生国相模〕高城崑之助重宗

相州小田原北條家ニ被召、伊豆国韮山之城二ノ曲輪ニ相詰被召。小田原落城之砌、浪人仕其後〔年月日不知〕権現様江被召出現米五拾石被下置、御鷹匠相勤申候〔病死年月日年齢不詳〕

重宗実子惣領。高城崑之助〔実名不知〕。重宗ニ子無御座候付、安藤三郎兵衛倅庄蔵を養子仕候。爰其後出生仕重宗家督相續仕。右子孫、公儀ニ相勤被召候由、承傳申候。

- 一 二代目 生国相模〔崑之助重宗養子、実安藤三郎兵衛〔実名不知〕男〔始甚之助〕〕高城庄蔵〔実名不知〕権現様江新規被召出〔年月日不知〕御切米百俵被下置。御鷹匠相勤。其後〔年月日不知〕、於駿府南龍院殿江御附被遊。元和五年〔八月十八日〕、国替之節、供仕紀州江被越、同八年六月十九日病死仕候〔年齢不詳〕。

- 一 三代目 生国駿河〔庄蔵養子惣領。実飯田惣左衛門〔実名不明〕男〕高城庄蔵時重。元和八年〔月日不知〕養父庄蔵家督無相違被下鷹匠被仰付。其後、加増現米四拾石被下。寛文十三年七月廿三日病死仕候〔于時六十五歳〕。

- 一 生国紀伊〔庄蔵時重実子惣領〕高城甚之助〔実名不知〕寛文十三年〔月日不知〕、父庄蔵為家督現米三拾石被下。鷹方相勤、其後勢州三領鷹場支配。同所罫飼被仰申付於彼地〔年月日不知〕病死仕。嗣子無候。家即断絶。

- 一 〔分家〕初代 生国紀伊〔庄蔵時重実二男〕高城庄蔵重張。父庄蔵死後、寛文十三年〔月日不知〕惣領甚之助被家督被仰付御砌、父被承候現米之内拾五石分禄被下、鷹匠被仰付、其後段々□□加増現米三拾石被下。留守居番相勤。享保八年九月十一日病死仕〔年齢不詳〕候。爰惣領平右衛門、部屋住ゝ被付出現米貳拾石被下、相勤被召候付家督□□被仰付候。
- 一 二代目 生国紀伊〔庄蔵養子惣領。実深美由太夫〔実名不知〕二男。始平右衛門〕高城平右衛門政重。享保三年閏十月朔日部屋住ゝ被付出現米貳拾石三人扶持被下。小十人被申付。其後段々□□加増現米五拾石被下。□事奉行相勤被召候。爰追而小普請入被仰付、延享二年八月五日病死仕候〔于時六十三才〕。
- 一 三代目 生国紀伊〔平右衛門政重養子惣領。実弟〕高城彦市政吉。延享二年十二月十九日、養父平右衛門為家督現米拾五石被下、小普請ニ而被仰。寛政元年三月六日病死仕候〔于時七十七才〕。
- 一 四代目 生国紀伊〔彦市実子。政吉惣領。〕高城九郎左衛門義著。寛政元年四月廿八日、父彦市為家督現米拾貳石被下。当時小普請ニ而被召候。

高現米拾貳石 〔紀伊殿 小十人小普請〕高城九郎左衛門（花押）
寛政十年 十二月

右によると、高城家に関する旧記は散逸して始祖については不明であるという。そのため、当家の「嫡祖」である「高城崑之助重宗」から系譜が始まっている。すなわち、当家初代の重宗は相州小田原の北条家に仕えて「伊豆国葦山城二ノ曲輪」に詰めていたとし、小田原城が落城したときには浪人となったが、後に徳川家康に仕えて現米五十石で「御鷹匠」を勤めたという。この重宗には子供がいなかったため、安藤三郎兵衛の息子である庄蔵を養子として家督を継がせた。すると、その後には重宗の実子が生まれた。その実子は公儀に仕えたという。次に、二代目の庄蔵（実名不明）は家康に切米百俵を下され、「御鷹匠」を勤めたという。その後、徳川頼宣に従うようになり、頼宣の国替えに伴って紀州に越してきて、元和八年（一六二二）六月十九日に病死したとされる。さらに三代目の「高城庄蔵時重」は、二代目庄蔵の養子で実は飯田惣左衛門（実名不明）の息子であった。元和八

年、養父庄蔵から家督を相続して「鷹匠」を仰せつけられた後、現米四十石に加増されたという。寛文十三年（一六七三）七月二十三日に六十五才で病没。その次の四代目の「高城甚之助（実名不明）」は時重の実子で寛文十三年に父から家督を継いで現米三十石を下されて「鷹方」を勤めたという。その後、「勢州三領」の鷹場の支配をして同所の峙飼を仰せつけられたが、病死。嗣子がなかったため、本家は断絶した。

しかしその一方で、時重の次男である「高城庄蔵重張」は、寛文十三年に上記の甚之助が惣領として家督を継いだ時、父の現米のうちから十五石の禄高を分与され、「鷹匠」を仰せつけられていたという。当該系図によると、この重張が分家の高城家の初代とされている。重張は、その後段々禄高を加増されて現米三十石を下され、留守居番を勤めた後、享保八年（一七二三）に病没したとされる（年齢不詳）。さらに、惣領として平右衛門（政重）を部屋住みから出して現米二十石を下され、家督を継がせたという。重張の次の当家二代目に当たる「高城平右衛門政重」は、重張の養子で実は「深美由太夫」（実名未詳）の次男である。はじめ平右衛門と称した。この政重は、享保三年（一七一八）十月一日に部屋住みより出されて現米二十石三人扶持を下されたという。また、十人組を命じられ、その後は段々と加増されて現米五十石を下されるようになった。その後は小普請などを仰せつけられ、延享二年（一七四五）八月五日に六十三歳で病没。政重の次の当家三代目に当たる「高城彦市政吉」は、実は政重の弟であるが彼の養子となり、延享二年十二月十九日に家督を継いで現米十五石を下され、小普請を仰せつけられたという。寛政元年（一七八九）三月六日に七十七才で病死。最後に、当家四代目の「高城九郎左衛門義著」は政吉の実子で寛政元年四月二十八日に父から家督を継いで現米十二石を下され、当時は小普請を命じられていたという。そして、奥書には寛政十年（一七九八）十二月の年紀とともに、この四代目に挙げられている九郎左衛門義著の名前および花押が見える。

以上のように紀州藩士の高城家は、家康に仕えた嫡祖・重宗以来、代々鷹匠を受け継いできた一族であった。すでに述べたように、このような高城家に伝来した鷹狩り関係の古文書群は、現在、和歌山県立博物館に「紀伊藩士高城家資料」として所蔵されている。次に、これらの文書群の中から鷹書と判断されるテキスト二十七点について、簡単な書誌を掲出する。

【1】『鷹之書物一 鷹の病』（外題）

資料番号295-1。本文共紙表紙。紙縫綴。縦19.9㍍×横20.5㍍。表紙中央より左にウチツケ書きで「鷹之書物一／鷹の病」。一丁表冒頭に「鷹療治病所之事」（巻首題）。半葉十二行。漢字ひらがな交じり文。全十六丁。裏表紙左下に「高城氏」の記載有。十六丁表裏に鷹の解剖図。資料番号311と本文が類似する。

【2】『鷹之書物二 鷹の書物』（外題）

資料番号295-2。本文共紙表紙。紙縫綴。縦20.8㍍×横17.0㍍。表紙中央より左にウチツケ書きで「鷹之書物二／鷹の書物」。一丁表冒頭に「当流鷹秘事條々宗益相伝」（巻首題）。半葉十行～十一行。漢字ひらがな交じり文。全二十七丁。二十五丁裏および二十七丁裏白

紙。裏表紙左下に「高城氏」の記載有。二十二丁表に継ぎ足しの紙片（縦20.8ㇿ×横22.5ㇿ）有。

【3】『鷹の書物三 鷹の書物』（外題）

資料番号295-3。本文共紙表紙。紙縫綴。縦21.0ㇿ×横17.1ㇿ。表紙中央より左にウチツケ書きで「鷹之書物三／鷹の書物」。半葉十行～十二行。漢字ひらがな交じり文。全十四丁。裏表紙左下に「高城氏」の記載有。目録有（一丁表～一丁裏）。資料番号310および316と本文が類似する。

【4】『鷹之書物四 鷹の書物』（外題）

資料番号295-4。本文共紙表紙。紙縫綴。縦21.1ㇿ×横17.1ㇿ。表紙中央より左にウチツケ書きで「鷹之書物四／鷹の書物」。半葉十一行～十二行。漢字ひらがな交じり文。全十二丁。裏表紙左下に「高城氏」の記載有。目録有（一丁表～一丁裏、八丁表～八丁裏）。裏表紙見返しにも「覚」として本文五行有。資料番号312および313と本文が類似する。裏表紙左下に「高城氏」の記載有。

【5】『鷹之書物五 鷹の書物』（外題）

資料番号295-5。本文共紙表紙。紙縫綴。縦20.9ㇿ×横17.0ㇿ。表紙中央より左にウチツケ書きで「鷹之書物五／鷹の書物」。半葉四行～八行。漢字カタカナ交じり文。全十三丁。二丁～十二丁の間の裏はすべて白紙。裏表紙見返しに本文六行有。資料番号314と本文が類似する。

【6】『薬』（外題）

資料番号296。本文共紙表紙。紙縫綴。縦24.2ㇿ×横17.3ㇿ。表紙中央にウチツケ書きで「薬」。半葉九行（上下二段）。漢字・カタカナ・ひらがな交じり文。三丁と四丁の間に三枚の紙片（①「まかた しゆんわう…」（縦14.5ㇿ×横23.5ㇿ）、②「網懸…」（縦16.0ㇿ×横13.4ㇿ）、③「一口薬 阿仙薬…」（縦24.3ㇿ×横33.3ㇿ））有。全十四丁。表紙および裏表紙見返しに本文有。

【7】『根津流 たかの書』（外題）

資料番号297。本文共紙表紙。紙縫綴。縦24.5ㇿ×横17.3ㇿ。表紙中央にウチツケ書きで「根津流／たかの書」。半葉九行。漢字ひらがな交じり文。全三十七丁。裏表紙見返しに「高城甚之助」の記載有。

【8】『根津流鷹法巻 全』（外題）

資料番号298。本文共紙表紙。紙縫綴。縦24.3ㇿ×横17.1ㇿ。表紙左側にウチツケ書きで「根津流鷹法巻 全」。一丁表冒頭に「鷹書之事」（巻首題）。半葉九行。漢字ひらがな交じり文。全三十八丁。裏表紙見返しに「天文廿四年九月廿八日也」の記載有。一丁表と二丁表に朱筆の書入れ有。裏表紙にも本文六行有。

【9】『療治覚 全』（外題）

資料番号299。紺地金泥表紙。列帖装。縦24.3ㇿ×横18.2ㇿ。表紙中央上に「療治覚 全」の題簽（縦9.1ㇿ×横2.9ㇿ）。一丁表冒頭に「療治覚」（巻首題）。半葉八行。漢字ひらがな

交じり文。全十四丁。裏表紙見返しに「享保貳年六月／吉田甚大夫重矩（花押）」。資料番号308および資料番号309と本文が類似する。

【10】『鷹秘書』（外題）

資料番号300。本文共紙表紙。紙縫綴。縦24.3ㇼ×横17.3ㇼ。表紙中央上にウチツケ書きで「鷹秘書」。半葉八行。漢字ひらがな交じり文。裏表紙見返しに「高城甚之助」の記載有。全十七丁。資料番号308と本文が類似するが、資料番号300の方がより詳しい内容となっている。

【11】外題・内題無し

資料番号301。仮綴。縦25.1ㇼ×横17.3ㇼ。半葉七行～九行。漢字ひらがな交じり文。全十一丁。一丁と二丁の間に紙片（縦22.2ㇼ×横27.5ㇼ）が挟まっている。

【12】『鷹法書』（外題）

資料番号302。表紙縹色。四ツ目綴。袋綴。縦24.0ㇼ×横16.5ㇼ。表紙左方に「鷹法書」の題簽（縦11.0ㇼ×横5.3ㇼ）有。半葉二行～十二行。漢字ひらがな交じり文。裏表紙見返しに「不入御覧／川井氏」の記載有。全六十九丁（三丁裏白紙）。三十五丁表冒頭に「下之巻」の記載有。一丁裏～三丁表に朱筆で返り点と送り仮名有。一丁の袋綴に二枚の紙片が入っている（①「搜ハ…」（縦16.2ㇼ×横9.8ㇼ）、②「杭ハ…」（縦23.5ㇼ×横4.5ㇼ）。十三丁の袋綴に一枚の紙片が入っている（「ヒコノ皮…」（縦15.1ㇼ×横8.6ㇼ）。十五丁の袋綴に一枚の紙片が入っている（「蒼鷹…」（縦15.1ㇼ×横10.6ㇼ）。二十二丁の袋綴に一枚の紙片が入っている（「一ヲ長先…」（縦10.8ㇼ×横11.0ㇼ）。五十丁の袋綴に二枚の紙片が入っている（①「則…」（縦17.3ㇼ×横6.1ㇼ）、②「鹿ノ骨…」（縦15.0ㇼ×横4.8ㇼ）。六十二丁の袋綴に一枚の紙片が入っている（「シククロ」（縦15.8ㇼ×横5.8ㇼ）。六十八丁の袋綴に二枚の紙片が入っている（①「白綿毛…」（縦23.7ㇼ×横16.0ㇼ）、②「浮世穴…」（縦24.0ㇼ×横16.0ㇼ）。

【13】『蒼鷹ノ書 十二顔 尾形 鷹毛所 鷹灸所』（外題）

資料番号303。本文共紙表紙。紙縫綴。縦24.0ㇼ×横16.5ㇼ。表紙にウチツケ書きで「蒼鷹ノ書／十二顔／尾形／鷹毛所／鷹灸所」。半葉三行～八行。漢字ひらがな交じり文。全二十二丁（うち遊紙前後各一丁）。八丁裏白紙。二丁表に「蒼鷹之事」、五丁表に「紫鷹之事」、七丁表に「青鷹兄鷹之事」、九丁表に「十二顔之事」、十三丁表に「尾形」、十五丁表に「鷹毛所之覚」、二十丁表に「鷹灸所之覚」と記載され、それぞれの項目の見出しがある。

【14】『たかのし』（外題）

資料番号304。本文共紙表紙。紙縫綴。縦28.0ㇼ×横19.8ㇼ。表紙中央にウチツケ書きで「たかのし □」。一丁表冒頭に「鷹薬之書」（巻首題）。半葉八行。漢字ひらがな交じり文。全十七丁。裏表紙および表表紙の見返しにそれぞれ本文有。虫損有。

【15】『鷹薬法 全』（外題）

資料番号305。表紙香色。縦23.6ㇼ×横17.0ㇼ。大和綴。表紙中央にウチツケ書きで「鷹薬法 全」。一丁表冒頭に「鷹薬方」（巻首題）。半葉四行～九行。漢字ひらがな交じり文。

全十七丁。十七丁裏白紙。

【16】『鷹の書 全』（外題）

資料番号306。本文共紙表紙。紙縫綴。縦25.0ㇼ×横17.5ㇼ。表紙中央にウチツケ書きで「鷹の書 全」。半葉八行。漢字ひらがな交じり文。全五丁。裏表紙見返しに和歌が二首掲出されている。

【17】外題・内題無し

資料番号307。縦18.0ㇼ×横108.0ㇼ。卷子本。奥に「寛永拾年 三吉彦兵衛尉／高重（花押）／十月七日／竹田崑郎右衛門尉殿」。

【18】『療治覚 全』（外題）

資料番号308。紺地金泥表紙。列帖装。縦24.0ㇼ×横18.2ㇼ。表紙中央上に「療治覚 全」の題簽（縦9.0ㇼ×横2.8ㇼ）。一丁表冒頭に「療治覚」（巻首題）。半葉六行～八行。漢字ひらがな交じり文。全十四丁。裏表紙見返しに「享保貳年六月／吉田甚太夫／重矩（花押）」の奥書有。資料番号309と本文が類似する。資料番号300とも本文が類似するが、資料番号300の方がより詳しい内容となっている。

【19】『吉田流 鷹療治覚薬方』（外題）

資料番号309。本文共紙表紙。紙縫綴。縦24.0ㇼ×横17.2ㇼ。表紙中央にウチツケ書きで「吉田流／鷹療治覚薬方」。半葉三行～九行。漢字ひらがな交じり文。全四十二丁。二十六丁裏白紙。一丁表「療治覚」、十二丁裏「上巻終」、十三丁表「療治覚」、二十五丁裏「中之巻終」、二十七丁表「鷹薬方」の記載有。裏表紙見返し～裏表紙に「吉田甚太夫／重矩（花押）／元文四卯月 写之／川井儀右衛門殿」の奥書有。二丁表に二か所、裏表紙に一か所、3.5ㇼ×3.5ㇼの正方印有。資料番号299および308と本文が類似する。

【20】『鷹医万病巻全』（外題）

資料番号310。紺地金泥表紙。列帖装。縦23.9ㇼ×横18.0ㇼ。表紙中央上に「鷹医万病巻全」の題簽（縦11.6ㇼ×横3.1ㇼ）。半葉四行～八行。漢字ひらがな交じり文。全二十丁（遊紙後一丁）。目録有（一丁表～二丁表）。十九丁表に「正徳六年六月 吉田多右衛門尉／真野三右衛門／伊藤清六忠厚（花押）／吉田甚太夫殿」の奥書有。資料番号259-3および316と本文が類似する。

【21】『養性巻 下』（外題）

資料番号311。縹色雷文繋ぎ地に蓮華唐草文様の表紙。列帖装。縦18.1ㇼ×横16.2ㇼ。表紙左肩に「養性巻 下」題簽（縦7.4ㇼ×横2.2ㇼ）。半葉二行～八行。漢字ひらがな交じり文。全十一丁。目録有（一丁表～二丁表）。十一丁裏に「吉田太右衛門尉宗達／（花押）／寛永十一年／四月吉日／川井権太郎殿参」の奥書有。資料番号295-1と本文が類似する。

【22】『養性巻 中』（外題）

資料番号312。縹色雷文繋ぎ地に蓮華唐草文様の表紙。列帖装。縦18.1ㇼ×横16.1ㇼ。表紙左肩に「養性巻 中」の題簽（縦7.5ㇼ×横2.1ㇼ）。半葉三行～七行。漢字ひらがな交じり文。全十四丁。二丁裏・四丁裏・十二丁表裏・十三丁表がいずれも白紙。目録有（一丁表

～二丁表)。十四丁裏に「吉田太右衛門宗達(花押・丸印)／寛永拾壹年／四月吉日／川井権太郎殿」の奥書有。資料番号295-4および資料番号313と本文が類似する。

【23】『養性巻 上』(外題)

資料番号313。縹色雷文繋ぎ地に蓮華唐草文様の表紙。列帖装。縦18.1ㇼ×横16.2ㇼ。表紙左肩に「養性巻 上」の題簽(縦7.3ㇼ×横2.1ㇼ)。半葉五行～八行。漢字ひらがな交じり文。全二十二丁。二十丁裏および二十一丁表白紙。目録有(七丁表～八丁表一行目)。一丁表「鷹療治病取之事」、三丁裏「當流鷹秘傳」の記載有。二十二丁裏に「吉田太右衛門宗達(花押・丸印)／寛永拾一年戌四月吉日／川合権太郎殿参」。九丁と十丁の間に紙片(「うちみぐすりの…」(縦10.9ㇼ×横6.8ㇼ))が挟まっている。資料番号295-4および資料番号312と本文が類似する。

【24】『十二顔』(外題)

資料番号314。縹色雷文繋ぎ地の表紙。列帖装。縦18.0ㇼ×横16.4ㇼ。表紙左肩に題簽が剥離した跡有。剥離した題簽(縦7.3ㇼ×横2.2ㇼ)に「十二顔」。半葉三行～九行。漢字カタカナ交じり文。全十二丁(遊紙後一丁)。一丁裏および二丁表白紙。三丁表～五丁裏および八丁表・八丁裏にそれぞれ鷹絵有。十一丁裏に「寛永拾一年吉田太右衛門尉／戌四月吉日 宗達(花押・丸印)／川合権太郎殿参」の奥書有。資料番号295-5と本文が類似する。

【25】外題・内題無し

資料番号315。縹色雷文繋ぎ地に蓮華唐草文様の表紙。列帖装。縦23.0ㇼ×横18.3ㇼ。表紙左肩に題簽が剥離した跡有。半葉九行。漢字ひらがな交じり文。全二十五丁。目録有(一丁表～一丁裏)。十九丁表および二十一丁裏白紙。十九丁裏～二十一丁表に鷹の獲物を扱う作法に関するカラー図解が掲載されている。二十五丁裏に「吉田太右衛門尉(花押・丸印)／寛永十一年四月吉日／川合権太郎殿参」の奥書有。

【26】外題・内題無し

資料番号316。縹色雷文繋ぎ地の表紙。列帖装。縦18.0ㇼ×横16.5ㇼ。半葉六行～八行。漢字ひらがな交じり文。全十六丁。目録有(一丁表～二丁表二行目)。裏表紙見返しにも本文六行有。資料番号295-3および資料番号310と本文が類似する。

【27】外題・内題無し

資料番号321。縦9.5ㇼ×横20.5ㇼの断簡が二十二枚。十二枚目と十三枚目の間に挟まっている紙片には「噉^{タン}…」(縦15.5ㇼ×横9.5ㇼ)。

以上のうち、書名や奥書に見える文言から吉田流所縁のテキストとおぼしきものは、【9】『療治覚 全』(資料番号299)【18】『療治覚 全』(資料番号308)【19】『吉田流 鷹療治覚薬方』(資料番号309)【20】『鷹医万病巻全』(資料番号310)【21】『養性巻 下』(資料番号311)【22】『養性巻 中』(資料番号312)【23】『養性巻 上』(資料番号313)【24】『十二顔』(資料番号314)【25】外題・内題無し(資料番号315)の合計九点である。すなわち、【9】はその奥書によると「吉田甚太夫」から「川井儀右衛門」に宛てたものとされ、【18】【19】はそれぞれの奥書に「吉田甚太夫重矩」の名前が見える。また、【20】の奥書

には「吉田多右衛門尉」→「真野三右衛門」→「伊藤清六忠厚」→「吉田甚太夫」という伝系が示されている。さらに、【21】【22】【23】【24】【25】は、いずれも奥書から、「吉田多右衛門尉」から「川合権太郎」に宛てたものである。

これらのテキストの奥書に見える「吉田甚太夫」という人物は、たとえば、高城家資料の『未歳江戸御鷹方諸事控』（資料番号284）にその名前が散見する。同書は、公儀鷹匠に関する諸事の記録書であることから、当該人物は公儀鷹匠であったと推測される。さらに、同じく高城家資料の『宝暦年中口事 御鷹方諸調附込扣帳』（資料番号286）もまた、宝暦八年（一七五八）から安永九年（一七八〇）までの公儀鷹匠に関する記録書である。同書にも吉田甚太夫の名前が多数確認できる。なお、同書の作成者は「川井藤右衛門」とされることから、川井儀右衛門や川井権太郎を含む川井（川合）氏もまた公儀鷹匠と関わり深い一族であったことが推測されよう。一方の「吉田多右衛門尉」は、高城家に伝来したテキスト以外の吉田流の鷹書においても、奥書にその名前が多数確認できる人物である。というのも、幕末の故実家である栗原信充が著した『柳庵雑筆』第二によると、吉田流の流祖は「吉田多右衛門家元」とされる。「吉田多右衛門尉」は、この「吉田多右衛門家元」と同一視される鷹匠である（注8）。

以上のように、高城家ではまとまった分量の吉田流所縁の鷹書を蒐集していることから、当家は吉田流の鷹術と関わり深い鷹匠であったことが窺われよう。本稿では、このような高城家伝来の吉田流の鷹書群の中から、「【24】『十二顔』」を取り上げる。同書の奥書には寛永十一年（一六三四）の年紀が見え、これを信じるならば吉宗が紀州藩出身の吉田流の鷹匠を公儀鷹匠に抜擢する以前のテキストということになる。そうでなくとも、その伝系に見える「吉田太右衛門尉」にしる「川合権太郎」にしる、いずれも奥書の年代から勘案して、吉宗と直接交渉を持たなかった人物であることは断定できる。一方、先述したように、従来知られてきた吉田流の鷹書群は、吉宗に仕えた公儀鷹匠に伝来したものばかりであった。同書は、それらとは異なる位相を持つテキストとして注目されよう。

また、同書は鷹の顔の種類について十二項目を挙げ、それぞれの具体的な様相を説明するものである。こうしたモチーフは、流派を問わずにさまざまな鷹書において散見するが、具体的な叙述についてはテキストによって異同がある。そこで次節では、高城家伝来の『十二顔』の本文について、吉宗に仕えた公儀鷹匠に伝来した吉田流のテキストや吉田流以外の流派に属するテキストとの類似モチーフの比較を通して、その相対的な特徴を考察する。

二 高城家伝来の吉田流の鷹書

高城家資料の『十二顔』の比較対象として取り上げるテキストのひとつめは、奥書に原田三野右衛門（豊八・幸太夫・督利）の名前が見える宮内庁書陵部蔵『古谷茂太夫之方吉田流鷹書 七冊之内』（函号一六三一―一二二三）の第三冊目である。この原田三野右衛門というのは、吉宗が紀州藩から連れてきて公儀鷹匠に登用した人物である（注9）。彼が吉宗に重用されたことは、たとえば、公儀御鷹部屋雑司ヶ谷組の鷹匠同心として近世後

期に活動した森覚之丞正幸の編著である東京国立博物館蔵『鷹術四季書 第六冊』（和1265-9-6）巻末に「宗尹公学了院殿御鷹を被為好御据初之頃乃当組同心原田三之右衛門与申候者紀伊国乃被召連候御鷹方之内吉田流熟練之者ニ付御附人被仰付御教育奉申上」と見えることから明らかである。すなわち、一橋宗尹殿は御鷹を好んだため、御据初めの頃より当組（雑司ヶ谷組）の同心である「原田三之右衛門」という、吉宗が紀伊国より召し連れてきた鷹匠で吉田流の熟練者を重用したという。すなわち、彼に宗尹の「御附人」を仰せつけ、ご教育申し上げさせたというのである。また、この原田三野右衛門は蔵書家でもあったらしく、奥書に彼の名前が見える鷹書は他にもかなりの数が現存する（注10）。その中で、宮内庁書陵部蔵『古谷茂太夫之方 吉田流鷹書 七冊之内』は、原田三野右衛門に伝来した吉田流の鷹書として相対的まとまった体裁を持つ。さらに、同書の奥書によると「真野三右衛門尉」「伊藤清六」「宮井杵大夫」という三人の人物を介して原田三野右衛門に伝来したとされる。これらは三人とも吉田流の鷹書の伝系によく登場することで知られる鷹匠たちである（注11）。これらの条件を踏まえると、同書は吉宗所縁の公儀鷹匠に伝来した当該流派のテキストとして典型的な要素を備えたものと言えよう。以上が同書を高城家資料の『十二顔』の比較対象として取り上げる理由である。

さらに別の比較対象として、祢津松鶴軒から伝来したとされる依田盛敬氏蔵『十二顔 外物』を取り上げる。祢津松鶴軒とは先に触れたように、家康に重用された戦国武将で、彼から伝授された鷹術および鷹書は「祢津家（流）」と称された。松鶴軒によって、この祢津流の鷹術は、中世末期以降の武士の間で非常にもてはやされるようになった（注12）。このように、当該流派は家康所縁の鷹術として、吉宗所縁の吉田流とは明確に区別されていたものである。このことから、松鶴軒伝来の同書については“他流派の鷹書”という位置づけで、高城家資料の『十二顔』の比較対象として取り上げる。

以上を踏まえて、高城家資料の『十二顔』（以下、高城家本とする）と宮内庁書陵部蔵『古谷茂太夫之方 吉田流鷹書 七冊之内』の三冊目（以下、宮内庁書陵部本とする）および依田盛敬氏蔵『十二顔 外物』（以下、依田本とする）との本文の対照表を以下に示す。

和歌山県立博物館蔵「紀伊藩士高城家資料」『十二顔』（資料番号三一四）	宮内庁書陵部蔵『古谷茂太夫之方 吉田流鷹書 七冊之内』（函号一六三一一二二三）の三冊目	依田盛敬氏蔵『十二顔 外物』
夫鷹使始事、神代也。後白國ツタハル。日本ニ鷹使コト、仁徳天王之御時、八十六年ノ代ヲ持セタマウ。四十六年ニ當シ以來、鷹専也。政和天王之御時、岸ト云者、唐ニ渡シ、先、角鷹ヲ越テ後、兄ヲ越ナリ。云々。	夫鷹使始濫觴者、人王十七代仁徳天皇之御宇、在位八十七年持セ玉フ。四十六年ニ當シ時、百濟国ヨリ酒ノ君ト云人來テ、鷹ヲスヘテ天皇ノ御狩ニ供奉シ、雉ヲトル。是日本ニテ鷹狩ノ始也。其後、清和天皇ノ御時、岸ト云者入唐シ、先母鷹ヲ越テノチ、兄ヲ越ナリ云云。	なし。

<p>一 真顔之事 青箸之根ツヨクナク、弱クナク。箸大キニ鼻之穴廣ク目ノ前遠ク、請貝深クククリ小頸長ク、頭平ニ後頭遠ク、タヲミ生相せハク深クヲシテ、マヒサシ深クカヽリ、目ノ輪前顔ニ眼ツヨク、黒目スクナク、眼中、三面懸相相應是ハ鷹ノ本トスル。ケ様之顔口ノ鷹ハ女ラントリヲスル也。 【図】</p>	<p>一 真顔之事 青箸ノ根ツヨクナク、ヨハクナク。箸大キニ鼻之穴廣ク目ノ前遠ク請貝深ク、ククリ小頸長ク、頭平ニ後頭遠ク、タヲミ生相せバク深クヲシテ、マヒサシ深クカヽリ、目ノ輪前顔ニ眼ツヨク、黒目スクナノ眼中、三面懸相相應是ハ鷹ノ本トスル。カヤウノ顔ノ鷹ハ女ラントリヲスル也。</p>	<p>一 真顔 アヲハシノ根ツヨクナク、ヨワクナク、黒箸フトク、ハナノスヒロク、目ノ前トヲク、ウケカイフカククヽリ、コクヒナカク、イタヽキタイラニ、ウシロカシラトヲク、タヲミ、ヲエアイセマク、フカク、マヒサシフカク、カヽリ、目ノリン、前クホク、マナコノウチニマサメ、三面カケアイ、アツサ、ウスサ、ヨクサウワウスヘシ。カヤウノ鷹ワ、ラントリヲスルナリ。ヨキ鷹ナリ。口傳。①</p>
<p>一 顔之事 箸之根ツヨク、鼻ノ穴廣ク、目ノ前近ク請貝少クリ三面アツク、マサ目廣頭丸ク生相ヲサス。目ノ上横ニ高ク後頭ツマリ、眼カクシカヽラス。目ノ輪丸ク中ノ目也。小頸ヨリ頭マテ相應スル也。此顔ハ大ハサスルト云トモ、心コワクシテ、ツカヒニクキ也。 【図】</p>	<p>一 雉顔ノ事 箸ノ根ツヨク、鼻ノ穴廣ク、目ノ前近ク請貝少クリ三面アツク、マサメ廣頭丸ク生相ヲサス。目ノ上横ニ高ク後頭ツマリ、眼カクシカヽラス。目ノ輪丸ク中ノ目也。小頸ヨリ頭マテ相應スル也。此顔ハ大ワザスルト云トモ、心コワクシテ、ツカヒニクキ也。</p>	<p>一 顔 ハシネツヨク、ハナノスヒロク、目ノ前チカク、ウケカイスコシクヽリ、三メンアツク、マサメヒロク、イタヽキ丸ク、ヲエアイヲサス。メノウエヨコニタカク、ウシロカシラツマリ、マカクシカカラス、メノリン丸ク、中目ナリ。コクヒヨリ、カシラマテサウワウスルナリ。コノサウノ鷹ワ大キニ、サウイスルトイエトモ、心コワクシ、ツカイニクキモノナリ。口傳。⑥</p>
<p>一 蛇顔之事 箸之根ヨハク、鼻ノ穴セハク、青箸ツマリ、目ノ前近ク、請貝直ニ小頭長ク、頭平ニセハク、生相ヲサス。後頭ツマリ、眼カクシ、目トヒトシク毛ウスク、目輪丸ツヨク、大目也。此鷹心よく逸物也。 【図】</p>	<p>一 蛇顔之事 箸ノ根ヨハク、鼻ノ穴セハク、青箸ツマリ、目ノ前近ク、請貝直ニ小頭長ク、頭平ニセハク、生相ヲサス。後頭ツマリ、眼カクシ、目ト等ク毛ウスク、目ノ輪丸ツヨク、大目也。此鷹ハ心能逸物也。</p>	<p>一 顔 ハシ根ヨワク、ハナノスセマク、アヲハシツマリ、目ノ前チカク、ウケカイスクニ、コクヒナカク、イタヽキヒラク、セマク、ヲエアイヲサス。ウシロカシラツマリ、マカクシ、メトヒトシクシ、毛ウスク、目ノリン丸ク、鷹ヨワクシテ、ツカイニクシ。サレトモ、逸物スヘシ。口傳。⑧</p>
<p>一 鷹顔之事 箸之根ツヨクナク、ヨハクナク、鼻ノ穴モ同ツレテ青箸ツマリ、黒箸長ク、直ニメ細ク、請貝少タヲミ、小顔ツマリ、頭丸ク生相ヲシテ、後頭長ク、眼カクシ深ク、カヽリ毛多ク、目ノ輪丸ク、眼強ク、此顔ハ逸物ナリ。 【図】</p>	<p>一 鷹顔之事 箸ノ根ツヨクナク、ヨハクナク、鼻ノ穴モ同ツレテ青箸ツマリ、黒箸長ク、直ニシテ細ク、請貝少タヲミ、小顔ツマリ、頭丸ク生相ヲシテ、後頭長ク、眼カクシ深ク、カヽリ毛ヲメク、目ノ輪丸ノ眼ツヨク、此顔ハ逸物ナリ。</p>	<p>一 鷹顔 ハシネツヨクナク、ヨワクナク、ハナノスモヲナシクツレテ、アヲハシツマリ、クロ箸ナカク、スクニシテホソク、ウケカイスコシタヲミ、コクヒツマリ、イタヽキ丸ク、ヲエアイヲシテ、ウシロカシラナカク、マカクシフカクカヽリテ、毛ヲエ目ノリン丸ク、マナコツヨク、中メナリ。コノコトクノ鷹ワ逸物ナリ。口傳。④</p>
<p>一 鷺顔之事 箸之根ヨハク、鼻ノ穴セハク、青箸黒箸トモニ長ク、直ニ目ノ前遠ク、請</p>	<p>一 鷺顔之事 箸ノ根ヨハク、鼻ノ穴セハク、青箸黒箸トモニ長ク、直ニ目ノ前遠ク、請</p>	<p>一 小鷺顔 ハシ根ヨワク、ハナノスセマク、アヲハシ、クロハシトモニ、ナカクスク</p>

<p>貝直ニツマリ、頭平ニ生相淺ク、後頭ツマリ、小頸長ク、眼カクシ目トヒトシクカヽリ、眼カクシノ毛ウスク、目ノ輪丸ク、此顔之鷹ハ逸物ヲスル也。 【図】</p>	<p>貝直ニツマリ、頭平生相淺ク、後頭ツマリ、小頸長ク、眼カクシ目トヒトシクカヽリ、眼カクシノ毛ウスク、目ノ輪丸ク、此顔ノ鷹ハ逸物ヲスル也。</p>	<p>ニシ、目ノ前トヲク、ウケカイスクニツマリ、イタヽキタイラニ、ヲエアアイアサク、ウシロカシラツマリ、コクヒナカク、マカクシ目ニヒトシクカヽリ、マカクシノ毛ウスク、目ノリン丸ク、中目ナリ。コノ顔ノ鷹ワ大逸物ヲスルナリ。口傳。③</p>
<p>一 雀鶴顔之事 青箸ヨハク、黒箸ツマリ、鼻ノ穴セハク、目ノ前遠ク、請貝直ニ小頸ミシカク、頭平ニ後頸ツマリ、生相ヲサス。眼カクシ淺クカヽリ、目ノ輪丸ク、眼ヨハシ。此顔ノ鷹ハ能也。 【図】</p>	<p>一 雀鶴顔之事 青箸ヨハク、黒箸ツマリ、鼻ノ穴セハク、目ノ前遠ク、請貝直ニ小頸ミシカク、平ニ後頸ツマリ、生相ヲサス。眼カクシ淺クカヽリ、目ノ輪丸ヲ、眼ヨハシ。此顔ノ鷹ハ能也。</p>	<p>一 顔 アヲ箸ノ根ヨワク、目ノ前チカク、ウケカイスクニ、コクヒミチカク、イタヽキタイラニ、ウシロカシラツマリ、ヲエアイヲサス。マカクシアサクカヽリ、目ノリン丸ク、小目ニシテ、マナコヨワシ、大鷹ワアシ。兄鷹ワヨシ。口傳。⑤</p>
<p>一 大鷲顔之事 箸ノ根強ク、常ヨリ長ク、直ニ鼻ノ穴廣ク、目ノ前遠ク、請貝直小頸長ク、頭丸ク、生相淺クヲシテノ毛薄ク、後頭ツマリ、眼カクシ深クカヽリ、目尻ノ毛ヲシテ眼ノ輪丸、眼ツヨク、箸ノサキヲ誰ナク此顔之鷹ハ、心弱クテツカイニクキ也。 【図】</p>	<p>一 大鷲顔之事 箸ノ根ツヨク、常ヨリ長ク、直ニ鼻ノ穴廣ク、目ノ前遠ク、請貝直ニ小頸長ク、頭丸ク、生相淺クヲシテノ毛薄ク、後頭ツマリ、眼カクシ深クカヽリ、目尻ノ毛ヲシテ眼ノ輪丸、眼ツヨク、箸ノサキヲ誰ナク此顔ノ鷹ハ、心コハクテツカヒニクキ也。</p>	<p>一 大鷲顔 ハシネツヨク、常ノカヨリナカク、スクニヲエ、ハナノスヒロク、目ノ前トヲク、ウケカイスクニ、コクヒナカク、イタヽキ丸ク、ヲエアアイアサク、スクニ、ウシロカシラツマリ、マカクシフカクカヽリ、メシリノ毛ヲシテ、マナコリン丸ク、小目ニシテツヨク、箸根サキヲマホリ、カヤウノ鷹ワ心コワクシテ、ツカイニクキナリ。但、兄鷹ワヨシ。口傳。②</p>
<p>一 マシコ顔之事 箸ノ根ツヨク、箸丸ク、ミシカク、鼻ノ穴ヒロク、目ノ前近ク、請貝少ク小頸ミシカク、頭丸ク、生相ヲサス。目尻ヒネリ、後頭ツマリ、眼カクシカヽラス。毛生三面アツク、生相之上ノ毛アツク毛ヲ立ヘシ。目ノ内ヨハシ。此顔ハアシヽ。</p>	<p>一 マシコ顔之事 箸ノ根ツヨク、箸丸ク、ミシカク、鼻ノ穴廣ク、目ノ前近ク、請貝少ク小頸ミシカク、頭丸生相ヲサス。目尻ヒネリ、後頭ツマリ、眼カクシカヽラス。毛生三面アツク、生相ノ上ノ毛アツク立ヘシ。目ノ内ヨハシ。此顔ハアシヽ。</p>	<p>一 マシコ顔 目ノ前チカク、ウケカイスコシクヽリ、コクヒミチカク、イタヽキ丸ク、ヲエアイヲサス。目シリヒネリ、ウシロカシラツマリ、マカクシカヽラス。毛ヲエ三メンアツク、マシコノヒタイノコトクニ毛ヲタテヘシ。目ノウチヨワク、大目ナリ。コノサウノ鷹、乙鷹ワホメス。兄鷹ワ逸物ナリ。⑦</p>
<p>一 鴨顔之事 箸ノ根ツヨク、鼻ノ穴廣ク、目ノ前遠ク、請貝深ク、ククリ小頸ミシカク、頭丸ク、生相セハク、直ニ後頭長ク、眼カクシ淺ク、眼ツヨク、目尻ノ毛強ク、ミシカク生ヘシ。此顔ハ心能ツカハルヽトイヘトモ物コリヲスル。</p>	<p>一 鴨顔之事 箸ノ根ツヨク、鼻ノ穴廣ク、目ノ前遠ク、請貝深ク、ククリ小頸ミシカク、頭丸ク、生相セハク、直後頭長ク、眼カクシ淺ク、眼ツヨク、目尻ノ毛アツク、ミシカク生ヘシ。此顔ハ心能ツカハルヽトイヘトモ物コリヲスル。</p>	<p>一 顔 ハシ根ツヨク、ハナノスヒロク、目ノ前トヲク、ウケカイフカクヽリ、コクヒミチカクイタタキ丸ク、ヲエアイセマク、フカクヲシテ、ウシロカシラナカク、マカクシアサク、マナコツヨク、大目ナリ。マシリノ毛アツク、ミチカクヲエ、コノカヲノ鷹ワ心ウラヤカニシ、ツカワルヽトイエトモ、モノコリヲスルナリ。大鷹ワコノマス。</p>

<p>一 カケス顔之事 箸之根ヨハク、目之前近ク、請貝直ニ小頸ミシカク、頭丸ク、生相廣ク、後頭ツマリ、眼カクシ浅ク、掛リ目之輪平ニ眼ヨハク、項上之毛薄ク、長ク生ヘシ。此顔悪逸物スル事ナシ。</p>	<p>一 カケス顔之事 箸ノ根ヨハク、目ノ前近ク、請貝直ニ小頸ミシカク、頭丸ク、生相廣ク、後頭ツマリ、眼カクシ浅ク、カトリ目ノ輪平ニ眼ヨハク、項上ノ毛ウスク、長生ヘシ。此顔アシキ逸物スル事ナシ。</p>	<p>兄鷹ハ吉。⑨ 一 カケス顔 ハシネヨハク、目ノ前チカク、ウケカイスクニ、コクヒミチカク、ウケカイスクニコクヒミチカク、イタトキ丸ク、ヲエアイヒロク、ヲシテウシロカシラツマリ、マカクシアサクカトリ、目ノリンヒラニ、マナコヨワク、カシラ上ノ毛ウスク、ナカク、ヲエコノカヲノ鷹ヲ逸物スルコトナシ。兄鷹ヲヨシ。口傳。 ⑩</p>
<p>一 鳶顔之事 箸之根弱ク、鼻之穴セハク、目チイサク、眼カクシカトラス。請貝直ニ頭丸、後頭詰リ、生相ヲサス。小頸短ク、目之内ヨハシ。此顔ハ悪逸物スル事ナシ。</p>	<p>一 鳶顔之事 箸ノ根ヨハク、鼻ノ穴セハク、目チイサク、眼カクシカトラス。請貝直ニ頭丸、後頭ツマリ、生相ヲサス。小頸ミシカク、目ノ内ヨハシ。此顔ハアシキ逸物スル事ナシ。</p>	<p>一 顔 ハシネヨワク、ハナノスセマク、目チイサク、マカクシカトラス。ウケカイスクニ、イタトキ丸ク、ウシロカシラツマリ、ヲエアイヲサス。コクヒミチカク、メノウチヨワク、大目ナリ。カクノコトクノ鷹ヲ、アシキ相ナリ。逸物スルコトナシ。兄鷹ヲ大逸物スルナリ。外ノ物ヲトルヘシ。⑪</p>
<p>一 モス顔之事 青箸深ク、短ク、鼻之穴廣ク、頭大キニ開ク、後頭如何モツマリ、生相之毛長ク、請貝深、ククリ眼ヨハク、眼カクシ浅ク、小頸短ク、此顔、山ハヨシ、鷹ニハ悪キ也。十二顔是也。此内、六逸物ヲスヘシ。六之顔ハ悪キ也。但何も眼ニ寄ヘキ也。 【図】</p>	<p>一 モス顔之事 青箸深ク、ミシカク、鼻ノ穴廣ク、頭大キ開ク、後頭イカニモツマリ、生相ノ毛長ク、請貝深、ククリ眼ヨハク、眼カクシ浅ク、小頸ミシカシ。此顔、山ハヨシ、鷹ニハアシキ也。十二顔是也。此内、六逸物ヲスヘシ。六ノ顔ハアシキ也。但何も眼ニヨルヘシ。</p>	
		<p>一 鷓顔 アヲハシ根フトク、ミチカク、ハナノスヒロク、イタトキ大ニヒラク、ウシロカシラ、イカニモツマリ、ヲエアイノ毛ナカク、ウケカイフカクトリ、マナコヨワク、マカクシアサク、コクヒミチカク、ランシノケウスク、コノコトクノ鷹ヲ鳥ヲ逸物、鷹ヲ二物ナリ。⑫</p>
		<p>以上十二顔、コレナリ。此内六ノ相ワ、ヨシ、逸物スルナリ。六ノ相ワ、スコシヲトレリ。但是モ目ノ内ニヨルヘシ。鷹ヲ第一ニ目ノ内ニ善悪アリ。目ヲ肝ノ臟ヨリ、ツウスルナリ。肝ト云字ヲ、キモトヨムユエ、キモノツヨキ鷹目ノウチ、ヨキ物ナリ。鷹ヲヨノコトヲハ、大方ユルストモ、メ</p>

		ノ口傳ヲハ、ユルスヘカラス。口傳。⑬
一 マナリノ鷹、前より見てハ、アヲノケリ。後ヨリ見テハウツフケリ。四方ヨリ見テ、スクナルヲマナリト云。能鷹也。但、下手ノマホフシニハワロキ。	一 マナリ鷹、前ヨリ見テハ、アヲノケリ。後ヨリ見テハウツフケリ。四方ヨリ見テ、スクナルヲマナリト云。能鷹也。但、下手ノホフシニワロキ。	
一 鴨居之鷹、カクタイヒロシ。股タカク付テ、ハキミチカシ。トツテ大ニセナミ肉ナシ。カタサキヨリテ、ムネサシテ、尾ツツマリ能、サウナリ。 【図】 【図】 生合 浮世穴 駮虎 婦子 打爪 懸爪 取居 尾連穴 風調 【図】 乱飛 母被 禰 木葉 眠宿 山廻 【図】 白綿毛 斑縵毛 雪踏 肩轄羽 溪仙毛 山陰毛 鼻塞毛 【図】 皆動 重鮒毛 祝摺 股ノ開 長光羽 知命毛 眼遠毛	一 鴨居ノ鷹、カクタイヒロシ。股タカク付テ、ハキミチカシ。トツテ大ニセナミニクナシ。 カタサキヨリテ、ムネサシテ、尾ツツマリ能、サウナリ。 【図】 生相 浮世穴 駮虎 婦子 打爪 懸爪 取居 尾連穴 風調 【図】 乱飛 母被 禰 木葉 眠宿 山廻 【図】 白綿毛 斑縵毛 雪踏 肩轄羽 溪仙毛 山陰毛 鼻塞毛 【図】 皆動 重鮒毛 祝摺 股ノ開 長光羽 知命毛 眼遠毛	
		一 傳先ノ鷹ト云アリ。大逸物ヲシ外ノ物ヲトル鷹ナリ。ミ様、第一、目ノウチニアリ。第二、毛ヲイ、第三、スチホネ、第四、ツメクモテノツキ様、第五、鷹地ノフリ、是ヲヨク相傳スヘシ。極意ヲ鏡ヲミルト云コト条々。口傳ナリ。⑭
		一 獅子肝ノ鷹ト云アリ。ミ様、第一、ノキノカケヤウ、第二、ホウシヤウノ毛ノウチノミ様、第三、クモテツメノ付様、第四、鷹ノ肝付キ、第五、キツタテヨリ、コクヒメンシユクマテ、毛ノヲイ様、第六、ケナシ、ハキ、カンキ、ヒキアワセノ、ミ様、条々。口傳。大逸物ヲスル鷹ナリ。ヒスヘシ／＼。⑮
		一 虎肝ノ鷹ト云アリ。ミ様、第一、目ノ内ニ、ミトコロアリ。第二、毛ヲイ、第三、ノキノカケ様、第四、コカシラ、第五、三面ノミ様、第六、ケチシ、ハキ、ヒキアワセ、ミ様、第七、クモテ、ツメノ付様、条々。口傳アリ。大逸物

		ヲスル鷹ナリ。外ノ物ヲトルナリ。⑩
一 利益諸衆生現世安穩後生修菩薩説妙法華經慈現大菩薩	一 利益諸衆生現世安穩後生修菩薩説妙法華經慈現大菩薩	
一 每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身	一 每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身	
一 迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何処有南北	一 迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何処有南北	
	<p>一 母鷹之目見様之事 【図】雲目。おくひやうにてきつし。【図】木目。わるしおくひやうなり。【図】むら目。おくひやう也。【図】車目。おくひやう也。【図】わく目。おくひやう。【図】水目。小物は吉鷹などハとらす。【図】目くろと云也。逸物心よし。【図】目赤けなけよてきつし。【図】あかあさ黒生に有をハきくろふ也。赤生=有をほむる。【図】地目。心能逸物也。【図】くろあさ逸物也。あさなけれハ赤心助と云。【図】あかしほ。おなしく赤生に有をほむる也。黒生にあるをきらふ也。【図】あをしほ。黒生に有をほむる。赤生に有を嫌ふ。【図】贅氣の目如此也。白き筋のはりたらは、毒をくひたると知るへし。餌ちかひの薬を可飼。【図】大目の小目と云。これ逸物也。【図】寒たる目の内と知るへし。灸をする也。百余せんたんを焼へし。【図】是をさく目と云也。鸛もとるへし。黄鷹にてとらす共、鳥屋を重而ハかならすとるへし。鷹わろしとも、くるしからず。逸物也。【図】目わけめ。是灸すへからず。【図】目わくきうをすへし。</p>	
	<p>一△隼目之事 【図】是ハ上鷹に吉くみ、鷹=わろし。【図】是ハ吉目とす。上鷹にハわろし。くみ鷹に能也。</p>	
<p>寛永拾一年 吉田太右衛門尉 戌四月吉日 家元（花押） 川合権太郎殿参</p>	<p>享保二年 吉田多右衛門尉 真野三右衛門尉 伊藤清六 宮井奎大夫 原田三之右衛門殿</p>	<p>天正十六年戌子 祢津松鷄軒（長方印）常安（花押） 二月朔日 依田十郎左衛門殿 ⑪</p>

上掲の依田盛敬氏蔵『十二顔 外物』の記事に見える①～⑯は掲載順を示す。なお、この対照表を踏まえて、テキスト間における各項目内容の近似性を示すと以下のようになる。

和歌山県立博物館蔵「紀伊藩士高城家資料」『十二顔』	宮内庁書陵部蔵『古谷茂太夫之方 吉田流鷹書 七冊之内』の三冊目	依田盛敬氏蔵『十二顔 外物』
本朝における鷹狩りの由来について	○	×
真顔について	◎	○①
^(雉力) 雄顔について	◎※（「雉顔」について）	◎⑥（※（「雉 ^{キス} 子顔」について）
蛇顔について	◎	◎⑧
鷹顔について	◎	◎④
鷺顔について	◎	◎③（※「小鷺顔」について）
雀鶴顔について	◎	○⑤
大鷺顔について	◎	○②
マシコ顔について	◎	○⑦
鴟顔について	◎	○⑨
カケス顔について	◎	○⑩
鳶顔について	◎	○⑪
モス顔について	◎	×
×	×	鷓顔について⑫
×	×	十二顔の総括⑬
マナリの鷹について	◎	×
鴨居の鷹について	◎	×
×	×	傳先の鷹について⑭
×	×	獅子肝の鷹について⑮
×	×	虎肝の鷹について⑯
利益諸衆生…	◎	×
每自作是念…	◎	×
迷故三界城…	◎	×
×	母鷹の目の見様について	×
×	隼の目について	×

①～⑯は記事の掲載順を表す。◎…きわめて近似する記事がある。○…近似する記事がある。
×…該当記事なし。

以上の三つのテキストについて、高城家本『十二顔』の叙述を中心にその内容を具体的に確認してみる。

冒頭の項目では、鷹を遣い始めた由来について述べる。すなわち、その始まりは神代であること、後に「白面國」に伝わったことを挙げ、さらに日本で鷹を遣い始めたのは仁徳天皇の時代の四十六年以降であったと説明する。その後、「政和天皇」の時代に「岸」と

いう人物が唐に行き、角鷹（クマタカ）を伝えた後に兄鷹（雄のオオタカ）を伝えたとする。この角鷹・兄鷹伝来のモチーフは珍しいもので、吉田流の鷹書以外には類似の叙述を確認できない。宮内庁書陵部本の当該項目にはやや類似する記述があるが、前半部分に「酒ノ君」という名前が見えるなどの若干の異同は見られる。なお、依田本には当該項目に関連する叙述はない。

次の「真顔」の鷹の様相について叙述している項目については、高城家本と宮内庁書陵部本の叙述は非常に近い内容で、ほぼ一致している。両書の近似性に比べると、依田本における当該項目の叙述はやや詳しい。

続く「雄^(雄力)顔」「蛇顔」「鷹顔」「鷲顔」の項目については、高城家本と宮内庁書陵部本と依田本の叙述はいずれも非常に近く、ほぼ重なる文言となっている。ただし、依田本のみ、項目の掲載順が異なっている。なお、高城家本では「雄顔」となっている項目名が、宮内庁書陵部本では「雉顔」、依田本では「雉子顔」とされる。さらに同じく高城家本と、宮内庁書陵部本では「鷲顔」となっている項目名が、依田本では「小鷲顔」とされる。

続く「雀鷓顔」「大鷲顔」「マシコ顔」「鴟顔」「カケス顔」「鳶顔」の項目については、高城家と宮内庁書陵部本の叙述は非常に近い内容で、ほぼ一致する。このような両書の近似性に比べると、依田本における当該項目の叙述は他の二書よりもやや詳しい上、各項目の掲載順も異なっている。

また、「モス顔」の項目については、高城家本と宮内庁書陵部本にはほぼ一致する叙述が見えるが、依田本には当該項目に関連する叙述はなく、十二番目に該当する項目として独自に「鵝顔」を挙げ、続く項目において「十二顔の総括」を述べている。ちなみに、「鵝顔」の項目および「総括」の項目については、高城家本と宮内庁書陵部本には見られない。

高城家本と宮内庁書陵部本は、十二顔に続く叙述として、「マナリの鷹」と「鴨居の鷹」という二つの項目を挙げている。両書における当該項目の本文はほぼ一致する。一方の依田本にはこの二つの項目に関連する叙述はない。代わりに、依田本では「傳先の鷹」「獅子肝の鷹」「虎肝の鷹」についての項目を挙げる。それらの叙述は、高城家本と宮内庁書陵部本には見られない。

最後に、高城家本と宮内庁書陵部本では「利益諸衆生…」「每自作是念…」「迷故三界城…」の三項目において法語を記載する。この三項目における両書の文言はすべて一致している。が、依田本にはこのような法語に関わる叙述は確認できない。また、宮内庁書陵部本は法語の後に「母鷹の目」「隼の目」についての項目を挙げている。当該項目に関連する叙述は、高城家本と依田本には確認できない。

以上において、高城家本の言説は、祢津流のテキストである依田本とは内容上の異同が相応に見られるのに対して、吉宗所縁の公儀鷹匠に伝来した宮内庁書陵部本には一致する叙述部分が多いことを確認できた。すなわち、高城家は吉宗に登用されて公儀鷹匠となったわけでもないにも関わらず、当家に伝来した吉田流の鷹書と吉宗に仕えた公儀鷹匠のそれとはほぼ重なるのである。このことから、紀州藩と幕府の鷹匠の間において、吉田流の鷹

術が忠実に伝授されていた可能性が窺えよう。なお、このような伝授の実態は、当時の吉田流伝播のすべての事例に当てはまるわけではない。たとえば、近世中期以降の仙台藩では、吉宗の放鷹制度に関する施策の影響を受けていた（注13）ことから、同藩の鷹匠たちの間にも吉田流の鷹術が流行した。彼らが所持した鷹書の多くは、吉宗に仕えた公儀鷹匠から当該流派を伝授されたと主張する。ところが、それらはいずれも、吉宗所縁の公儀鷹匠に伝来したテキストとは全く内容が異なる（注14）。そもそも吉田流に限らず、当時はその他の鷹術流派においても、流派所縁の鷹書が各地に伝播してゆく過程で、その内容を様々に変容させるケースは多々見られるものであった（注15）。そのような状況を鑑みると、紀州藩の鷹匠と公儀鷹匠の鷹書の内容が一致するという現象は、吉田流伝播の範疇にとどまらず、当時の鷹術流派拡散の諸相において特筆すべき事例と言えよう。

おわりに

以上において、中世末期以降に隆盛した鷹術の諸流派の中から“将軍吉宗所縁”のブランドを持つ吉田流の鷹術について、その伝播の実態に関する考察を行った。具体的には、吉宗の出身である紀州藩に代々仕えた鷹匠の高城家に注目し、当家に伝来した吉田流の鷹書の内容を検討した。当家の鷹書群は、これまでその存在のみが知られていただけであったが、今回、各テキストに関する具体的な情報を明らかにすることで、吉宗とは無縁の伝系を示す吉田流の鷹書がまとまって存在することが確認できた。従来知られてきた吉田流の鷹書のほとんどは、その伝系に吉宗に仕えた公儀鷹匠の名前があったことから、このように位相の異なる伝系を持つ高城家伝来の吉田流の鷹書を調査することで、当該流派の伝播に関する新たな知見を得ることができた。すなわち、高城家は吉宗に登用されて公儀鷹匠になったわけでないものの、当家伝来の吉田流の鷹書と吉宗所縁の公儀鷹匠に伝来したそれとはほぼ一致する文言を持つ。このことから、両者において鷹書の伝授が忠実に行われていたことが推測される。しかしながら、吉田流の伝授においてこのような経緯は必ずしも一般的な事例ではない。たとえば仙台藩では吉宗所縁の公儀鷹匠から伝来した当該流派のテキストが流布していたが、その内容はそういった鷹匠たちに伝来した他のテキストとはまったく内容の異なるものであった。

現時点の知見として、吉田流の鷹書の伝播の経緯には二つのパターンがあるといえる。すなわち、本文を忠実に伝授する場合と、奥書などに記される伝系だけを引用して、本文については無作為な内容を伝来する場合である。この違いが生じた要因には、吉宗の放鷹政策との関係が大きく影響していると予想する。このことから、今後、当該流派にまつわる文化事象を解明するには、吉宗の施策および学芸との関連性を視座に入れることを重視してゆきたい。

【注】

- (1) 『放鷹』第一篇「放鷹」「三十、将軍家鷹匠と鷹部屋」（宮内省式部職編、一九三一

年十二月初版、二〇一〇年五月復刻)、三保忠夫『鷹書の研究—宮内庁書陵部蔵本を中心に(上冊)』第二部第三章第十三節「原田三野右衛門(豊八・幸太夫・督利)」、和泉書院、二〇一六年二月など。

- (2) 二本松泰子『鷹書と鷹術流派の系譜』第二編「鷹術流派の系譜」(三弥井書店、二〇一八年二月) 参照。
- (3) 前田正明「紀伊藩士高城家資料目録」(「和歌山県立博物館研究紀要」第十五号、二〇〇九年三月) による。
- (4) 三保忠夫『鷹書の研究—宮内庁書陵部蔵本を中心に(上冊)』第二部第三章第三節「吉田多右衛門尉家元、吉田次郎三郎」など参照。三保著書で紹介されているデータによると、吉宗と関わる公儀鷹匠の名前が見えない吉田流の鷹書のほとんどは奥書そのものが無い。
- (5) 『和歌山県史』「近世史料一」(和歌山県史編纂委員会編、和歌山県、一九七七年三月) 所収。
- (6) 注(5)に同じ。
- (7) 高城家資料の『系譜』(資料番号370)も同じ年紀が見える。内容もほぼ同じ系譜であるが、後世の補入とおぼしき朱筆が多く見えるので今回は資料番号369の当該系譜をピックアップした。
- (8) 注(4)に同じ。
- (9) 注(1)の三保著書に同じ。
- (10) 注(1)の三保著書に同じ。
- (11) 注(1)の三保著書に同じ。
- (12) 注(2)に同じ。
- (13) 堀田幸義「仙台藩の鷹匠に関する基礎的研究」(「鷹・鷹場・環境研究」VOL.2、二〇一八年三月)による。
- (14) 二本松泰子「吉田流の鷹術伝承—仙台藩の事例を手掛かりにして—」(「立命館文学」第669号、二〇二〇年九月刊行予定)。
- (15) 二本松泰子『鷹書と鷹術流派の系譜』第三編「鷹術流派の展開」参照。

【付記】

本稿をなすにあたり、貴重な資料の閲覧・引用をお許しくださった依田盛敬氏・和歌山県立博物館・宮内庁書陵部に心より感謝申し上げます。また、「高城家資料」については、和歌山県立博物館主任学芸員の前田正明氏からご教示賜りました。併せて感謝申し上げます。

なお、本研究は、JSPS科研費JP19K00325の助成を受けたものである。

【Abstract】

The Yoshida style was a prosperous school of hawking in the early modern period. The school was closely associated with the 8th Shogun Tokugawa Yoshimune, and therefore became very popular at the time among samurai who admired the shogun. The Yoshida style had originated among falconers who served the Kishu clan. When Yoshimune became shogun, he chose many Yoshida-style falconers from the Kishu clan to become falconers for the shogunate. This is why the Yoshida style became famous.

This paper examines hawking-related texts on the subject of Yoshida-style hawking. Specifically, it considers the hawking-related texts that were in the possession of the Takagi family, a family of falconers who served the Kishu clan. It begins by providing an overview of the various hawking-related texts of the Takagi family. It then focuses on one of the texts and compares its content with documents relating to Yoshida-style hawking and other styles of hawking that were known to the shogunate. In this way, it verifies the characteristics of the texts relating to Yoshida-style hawking that were known to the falconers of the Kishu clan, and clarifies part of the circumstances relating to the spread of the school.

Investigating CEFR-J Self-Assessment and TOEIC Listening and Reading Scores

Jean-Pierre Joseph Richard

Abstract (要約)

The Common European Framework of Reference (CEFR; Council of Europe, 2001) has influenced language education in Japan (Tono, 2017). Negishi, Takada, and Tono (2012) found that approximately 80% of Japanese learners of English are within a narrow basic-user range on the CEFR. Consequently, the CEFR-J was developed for language education in Japan. With English majors, Runnels (2016) observed that hierarchical ordering of the CEFR-J levels was generally as predicted; however, the A- and B-level CEFR-J ratings had weak to near-negligible correlations with TOEIC scores (listening $r = .23$; reading $r = -.14$). This current study attempted to replicate Runnels but with non-English majors. Participants ($N = 54$), first- and second-year students at one public, regional university, completed an online form with the CEFR-J self-assessment descriptors for listening and reading within one week of an end-of-year TOEIC listening and reading test. Compared with Runnels, the predicted hierarchical ordering was more consistent and correlations between A- and B-level CEFR-J ratings and TOEIC scores were stronger (listening $r = .29$; reading $r = .50$). Based on the inconclusive findings compared with Runnels, institutions should proceed with caution if using TOEIC scores and the CEFR-J ratings as language proficiency measures.

The Council of Europe described its language policy in the Common European Framework of Reference (CEFR; Council of Europe, 2001). The CEFR informs language learning and instruction across Europe (Council of Europe, 2001), and has become a standard for language teaching and learning globally (North, Ortega, &

Sheehan, 2010). In Japan, for example, the CEFR is used by Nihon Hoso Kyokai for language education and foreign language radio and TV programming (Tono & Negishi, 2012). In addition, owing to the influence of the CEFR, the Japanese Ministry of Education is reforming English language and teaching in Japan based on the CEFR for elementary and secondary school, as well as for entrance examinations (Tono, 2017).

The CEFR “describes in a comprehensive way what language learners have to learn to do in order to use a language for communication and what knowledge and skills they have to develop so as to be able to act effectively” (Council of Europe, 2001, p. 1). The CEFR uses descriptors, known as can do statements, of increasing difficulty to describe communicative language competencies. These descriptors divide five language skills, (i.e., listening, reading, spoken interaction, spoken production, writing) into three streams of six levels: A1-A2 (Basic User); B1-B2 (Independent User); and C1-C2 (Proficient User) (Council of Europe, 2001). The definitions of proficiency levels found in CEFR allow learners to measure progress across their lifelong learning (Council of Europe, 2001). An example of a CEFR can do statement for listening at the A2 level (Council of Europe, 2001) is: “Can understand phrases and the highest frequency vocabulary related to areas of most immediate personal relevance (e.g., very basic personal and family information...). Can catch the main point in short, clear, simple messages and announcements” (p. 26).

When measuring Japanese learners with the CEFR, Negishi, Takada, and Tono (2012) found that upwards of 80% would be within the CEFR A-level range (i.e., Basic User). Consequently, the CEFR descriptors were modified for English language teaching, learning, and assessment in Japan (Tono, 2014, 2017). To develop the CEFR-J, the first four levels of the CEFR (i.e., A1, A2, B1, and B2) were extended to 10 by adding one Pre-A1 level, and subdividing A into five sub-levels (i.e., A1.1-A1.3, A2.1-A2.2), and B into four (i.e., B1.1-B1.2, B2.1-B2.2) (Tono, 2017). An example of a CEFR-J can do statement for Listening at A1.3 (Tono & Negishi, 2012) is: “*Can ask and answer simple questions about very familiar topics (e.g., hobbies, sports, club activities), provided that people speak slowly and clearly with some repetition and rephrasing.*”

Runnels (2016) previously investigated the relationship between TOEIC Listening and Reading (TOEIC L&R) test scores and A- and B-level CEFR-J listening and reading self-assessment ratings. Participants in Runnels were English majors studying in a CEFR-informed curriculum. She found that the hierarchical ordering of the CEFR-J levels was generally as predicted; however, adjacent pairs were

frequently misordered. Runnels (2016) also found a weak correlation between TOEIC listening scores and the CEFR-J listening self-assessment ratings ($r = .23$) and a near negligible, albeit negative, correlation for reading ($r = -.14$).

With the exception of research by Runnels, there has been little research which has examined the CEFR-J alongside standardized language tests. Therefore, the focus of the current study is to investigate the relationship between TOEIC L&R test scores and the CEFR-J listening and reading self-assessment ratings. This is important because of the role that TOEIC L&R tests play in Japan. For example, approximately 2.45 million Japanese, including 1.25 million students, completed the TOEIC L&R (Educational Testing Services, 2019) in 2018, and TOEIC L&R scores are frequently used for placement, program evaluation, as well as employment recruitment. With regard to self-assessment ratings, it was noted that the Ministry of Education in Japan is overseeing a reform of English language teaching based on the CEFR. Furthermore, the CEFR-J is used widely in Japan to complement the CEFR (Tono, 2019); and commercial companies, such as *Z-Kai*, are establishing English-language learning programs based on the CEFR-J (Tono, 2017). This study addresses two research questions. What are the results of non-English majors' CEFR-J self-assessments for listening and reading? What is the relationship between the learners' TOEIC L&R scores and the CEFR-J self-assessment ratings for listening and reading?

Method

Instrument

The CEFR-J currently includes 22 items for each of the five skills of listening, reading, spoken interaction, spoken production, and writing. There are two items for each skill at Pre-A1, all five levels of A, and all four levels of B; and one item each at C1 and C2. For this current study, the 40 CEFR-J items representing A1.1 to C2 for listening and reading were chosen. Pre-A1 items were not chosen because these are intended for young learners or very beginner-students. Each item was scored on a four-point Likert-scale ranging from (1) *I absolutely cannot do this*; (2) *I likely cannot do this*; (3) *I likely can do this*; and (4) *I absolutely can do this*. All items and options were written in Japanese, the participants' first language.

Two multiple-choice background items, asking major and year at university, and one item for consent to use the data were included. These were the first three items in a Microsoft Form. Participants who did not grant permission to use their data were sent to a "thank you" page with an encouragement to continue to study

English. Those who granted permission were directed to the 40 CEFR-J items in a sequential order, from A1.1 to C2, with two A1.1 listening items followed by two A1.1 reading items, followed by two A1.2 listening items, and so forth.

Participants

Participants were non-English majors at one small, regional public university, *Chubu Public University* (a pseudonym), in central Japan. The participants have four-100-minute required English classes per week in Year 1 and two-to-four-100-minute required classes per week in Year 2, taught by Japanese and non-Japanese tenured and non-tenured faculty members. The CEFR and the CEFR-J frameworks have been part of informal discussions at Chubu Public University; however, neither the CEFR nor the CEFR-J have been formally introduced into the curriculum. Thus, it is likely that most participants were unfamiliar with CEFR-J.

In all, 60 students responded to the questionnaire, of which six opted out of sharing their data. Thus, 54 participants completed the questionnaire and TOEIC L&R. Of these 54, 33 (61.1%) were Year 1 students and 21 (38.9%) were members of the largest department at the university, Economics (a pseudonym). Chubu Public University has approximately equal numbers of first- and second-year students, and the Economics Department comprises approximately 70% of all students; thus, it appeared that Year 1 respondents were over-represented and Economics majors were under-represented in this sample. A chi-squared test of independence (group) of background categorical data that proportionally matches the population of Chubu Public University by year and major would be non-significant: $\chi^2(1, N = 54) = 0.03$, $p = .86$. However, the chi-squared test of independence (group) of the participants' background categorical data was highly significant: $\chi^2(1, N = 54) = 13.87$, $p < .001$, and the phi coefficient ($\phi = .51$) revealed a large effect size; thus, indicating that the participant sample was unevenly distributed across year and major.

TOEIC listening scores ranged from 110 to 465 ($M = 310.19$, $SD = 72.18$), reading scores ranged from 105 to 450 ($M = 253.24$, $SD = 71.90$), and combined scores ranged from 210 to 915 ($M = 563.44$, $SD = 137.88$). Educational Testing Service (*n.d.*) considers TOEIC listening and reading minimum scores of 110 and 115 to be comparable to CEFR-A2, listening and reading scores of 275 to be comparable to CEFR-B1, and listening and reading scores of 400 and 385 to be comparable to CEFR-B2. Thus, the average participant was B1 for listening and A2 for reading. The distribution of the participants on CEFR are displayed in Table 1.

Table 1. *Distribution of Participants' TOEIC L&R Scores across CEFR Bands*

TOEIC Test	A1	A2	B1	B2
Listening	0	19	29	6
Reading	1	34	15	4

Analyses

The first research question is interested in the CEFR-J self-assessment ratings. To address this first research question, mean ratings of raw scores for CEFR-J-levels were calculated. The second research question is interested in the relationships between TOEIC listening and reading test scores and the CEFR-J self-assessment ratings. To address this second research question, correlations between TOEIC test scores and CEFR-J self-assessment ratings were calculated.

Two of the 40 CEFR-J items, A1.1 listening, “*Can understand short, simple instructions... provided they are delivered face-to-face, slowly and clearly*” and A1.1 reading, “*Can read and understand very short, simple, directions used in everyday life...*” had skewness greater than -1.0 (-1.13, -1.02 respectively). A further five items, had moderate skew between -1.0 and -0.5, and between 0.5 and 1.0. The remaining 33 items had skewness values between -0.5 and 0.5, indicating that overall the items were generally fairly symmetrical; and thus, normally distributed. One A1.1-level reading item, “*Can understand a fast-food restaurant menu that has pictures...*”, had a kurtosis value of -2.02, slightly in excess of what would be expected in a normally distributed sample (>-2 or <2). A further five items, had moderate kurtosis values between -2.0 and -1.0, and between 1.0 and 2.0. The remaining 34 items had kurtosis values between -1.0 and 1.0, indicating that the items were appropriately peaked; and thus, normally distributed.

Results

Research Question 1

The mean difficulty ratings for A-, B-, and C-level CEFR-J statements are shown in Table 2. The mean difficulty of the 20 listening items using a four-point Likert scale (4 = “*I absolutely can do this*”) was 2.82 ($SD = 0.43$), and for Reading was 2.77 ($SD = 0.42$). Removing the C-level items (i.e., most difficult) resulted in mean difficulty scores for listening and reading of 2.94 ($SD = 0.44$) and 2.90 ($SD = 0.44$) respectively. As seen in Table 1, for the combined A-, B-, and C-levels, there is a trend from easier to endorse (i.e., A-level, listening: $M = 3.32$, $SD = .43$; reading: $M = 3.29$, $SD = .47$) to more difficult to endorse (i.e., C-level, listening: $M = 1.73$, $SD = .62$; reading: M

= 1.66, $SD = .58$), as predicted by the CEFR-J framework.

Table 2. *CEFR-J Mean Difficulty Ratings for Listening and Reading (N = 54).*

	All (A1.1-C2)	A+B (A1.1-B2.2)	A (A1.1-A2.2)	B (B1.1-B2.2)	C (C1-C2)
Listening					
<i>M</i>	2.82	2.94	3.32	2.46	1.73
<i>SE</i> of Mean	0.06	0.06	0.06	0.07	0.08
<i>SD</i>	0.43	0.44	0.43	0.54	0.62
Skewness	0.09	0.08	0.24	-0.32	0.21
<i>SE</i> of Skewness	0.33	0.33	0.33	0.33	0.33
Kurtosis	-0.79	-0.65	-1.12	-0.41	-0.96
<i>SE</i> of Kurtosis	0.64	0.64	0.64	0.64	0.64
Reading					
<i>M</i>	2.77	2.90	3.29	2.42	1.66
<i>SE</i> of Mean	0.06	0.06	0.06	0.07	0.08
<i>SD</i>	0.42	0.44	0.47	0.53	0.58
Skewness	-0.08	0.01	-0.15	0.03	0.40
<i>SE</i> of Skewness	0.33	0.33	0.33	0.33	0.33
Kurtosis	-0.40	-0.21	-0.58	-0.58	-0.47
<i>SE</i> of Kurtosis	0.64	0.64	0.64	0.64	0.64

The mean difficulty ratings of the pairs of CEFR listening and reading self-assessment statements for the sub-levels, A1.1-B2.2, and C1-C2, are shown in Table 3. For both listening and reading, there is a trend from easier, A1.1 (listening: $M = 3.66$, $SD = .45$; reading: $M = 3.52$, $SD = .46$) to more difficult, C2 (listening: $M = 1.63$, $SD = .62$; reading: $M = 1.66$, $SD = .63$). However, mean difficulty ratings for reading at A1.2 and A1.3 were the same ($M = 3.38$), and B1.2 mean difficulty reading ratings were 0.01 points higher than B1.1. With the exception of these pairs, all other 18 pairs descend from easiest to most difficult as predicted by the CEFR-J; and thus, the CEFR-J can do self-assessment descriptors performed as intended with these participants.

Table 3. *Sub-level CEFR-J Mean Difficulty Ratings for Listening and Reading (N = 54).*

	<i>M</i>	<i>SE</i> of Mean	<i>SD</i>	Skew	<i>SE</i> of Skew	Kurt	<i>SE</i> of Kurt
Listening							
A1.1	3.66	.06	.45	-.84	.33	-.85	.64
A1.2	3.32	.07	.53	.10	.33	-.87	.64
A1.3	3.29	.07	.51	.18	.33	-.69	.64
A2.1	3.22	.08	.58	-.43	.33	.41	.64
A2.2	3.12	.07	.52	.11	.33	-.01	.64
B1.1	2.95	.08	.58	.11	.33	.10	.64
B1.2	2.60	.09	.63	-.10	.33	.67	.64

B2.1	2.37	.10	.72	-.31	.33	-.51	.64
B2.2	1.92	.09	.65	.11	.33	-.78	.64
C1	1.83	.09	.69	.24	.33	-.86	.64
C2	1.63	.09	.62	.46	.33	-.61	.64
<hr/>							
Reading							
A1.1	3.52	.06	.46	-.23	.33	-1.43	.64
A1.2	3.38	.07	.54	-.43	.33	-.31	.64
A1.3	3.38	.07	.51	-.14	.33	-.75	.64
A2.1	3.15	.09	.66	-.37	.33	-.36	.64
A2.2	3.00	.08	.58	.07	.33	-.02	.64
B1.1	2.81	.08	.61	-.37	.33	.81	.64
B1.2	2.82	.09	.64	-.37	.33	.33	.64
B2.1	2.07	.10	.71	.22	.33	-.67	.64
B2.2	1.96	.08	.62	-.16	.33	-.70	.64
C1	1.70	.08	.60	.23	.33	-.55	.64
C2	1.66	.09	.63	.52	.33	-.59	.64

Note. Mean ratings for underlined items did not follow the expected order.

Research Question 2

The combined TOEIC L&R scores correlated with mean difficulty ratings of the CEFR-J listening ($r = .32, p = .017$) and reading ($r = .47, p < .001$). Removing the C-level items (i.e., most difficult) resulted in only marginally improved correlations for listening ($\Delta = .01$) and reading ($\Delta = .02$). Slightly smaller correlations were observed between TOEIC listening scores only and mean difficulty ratings of the CEFR-J listening ($r = .28, p = .042$), with a marginally improved correlation ($\Delta = .01$) after removing C-level statements. Conversely, slightly larger correlations were observed between TOEIC reading scores and mean difficult ratings of the CEFR-J reading, ($r = .49, p < .001$), with a marginally improved correlation ($\Delta = .01$) after removing C-level statements. Correlations for A-, B-, and C-level mean difficulty ratings and TOEIC scores are also found in Table 4. In addition to the paired-skilled correlations (e.g., TOEIC reading and CEFR-J reading), Table 4 also displays the correlations for non-paired skills (e.g., TOEIC reading and CEFR-J listening). As seen, the correlations for listening paired-skills in the second column are lower than the correlations for reading paired-skills and lower than the correlations for non-paired skills. Finally, the average correlations, ranging from .24 to .40, are shown in the last row of Table 4.

All correlations in Table 4 are significant at the .05-level, except for all C-levels, and B-level for listening paired-skills. Correlations were small to moderate based on guidelines from Plonsky and Oswald (2014), where .20 = small, .40 = moderate, and .60 = large for research in second language learning. In all, five correlational analyses

were attempted with each combined set of TOEIC scores and the CEFR-J ratings. Thus, after applying the Bonferroni correction, the p -value for significance was $p = .01$ ($.05/5 = .01$). Consequently, four of the correlations for paired-reading skills, three of the TOEIC listening and the CEFR-J reading correlations, and one of the TOEIC reading and the CEFR-J listening correlations were found to be significantly correlated. These are noted with an “*” in the Table 4.

Table 4. *Correlations Between TOEIC and CEFR-J Levels (N = 54)*

Test Skill CEFR-J Skill	Listening Listening	Reading Reading	Listening Reading	Reading Listening
All	.28 ($p = .042$)	.49 ($p < .001$)*	.42 ($p = .001$)*	.34 ($p = .012$)
A+B-level	.29 ($p = .037$)	.50 ($p < .001$)*	.43 ($p < .001$)*	.35 ($p = .010$)*
A-level	.28 ($p = .039$)	.49 ($p < .001$)*	.45 ($p < .001$)*	.34 ($p = .011$)
B-level	.23 ($p = .090$)	.39 ($p = .004$)*	.33 ($p = .016$)	.29 ($p = .036$)
C-level	.13 ($p = .334$)	.14 ($p = .321$)	.06 ($p = .672$)	.17 ($p = .216$)
<i>M (SD)</i>	.24 (0.07)	.40 (0.15)	.34 (0.16)	.30 (0.08)

Table 5 displays correlations between TOEIC L&R and individual CEFR-J sub-levels for paired and non-paired skills. As with Table 4, correlations between reading paired-skills were strongest and listening paired-skills were weakest. In all, 24 pairs of correlations were significant at the $p = .05$ -level. However, 11 correlational analyses were attempted with each combined set of scores and ratings. Thus, after applying the Bonferroni correction, the p -value for significance was $p = .005$ ($.05/11 = .0045$). These are noted with an “*” in the Table 5.

Table 5. *Correlations Between TOEIC and CEFR-J Sub-Levels (N = 54).*

Test Skill CEFR-J Skill	Listening Listening	Reading Reading	Listening Reading	Reading Listening
A1.1	.22 ($p = .118$)	.36 ($p = .008$)	.33 ($p = .016$)	.26 ($p = .055$)
A1.2	.27 ($p = .045$)	.43 ($p = .001$)*	.38 ($p = .005$)	.36 ($p = .007$)
A1.3	.43 ($p = .001$)*	.46 ($p < .001$)*	.42 ($p = .002$)	.41 ($p = .002$)*
A2.1	.15 ($p = .268$)	.35 ($p = .009$)	.32 ($p = .018$)	.24 ($p = .083$)
A2.2	.11 ($p = .425$)	.49 ($p < .001$)*	.47 ($p < .001$)*	.15 ($p = .270$)
B1.1	.27 ($p = .046$)	.38 ($p = .004$)*	.39 ($p = .004$)*	.34 ($p = .013$)
B1.2	.28 ($p = .043$)	.37 ($p = .006$)	.31 ($p = .023$)	.36 ($p = .008$)
B2.1	.15 ($p = .383$)	.34 ($p = .012$)	.25 ($p = .075$)	.19 ($p = .162$)
B2.2	.11 ($p = .441$)	.17 ($p = .223$)	.13 ($p = .350$)	.10 ($p = .455$)
C1	.13 ($p = .339$)	.27 ($p = .050$)	.18 ($p = .184$)	.16 ($p = .246$)
C2	.12 ($p = .391$)	.00 ($p = .983$)	-.07 ($p = .629$)	.16 ($p = .242$)
<i>M (SD)</i>	.20 (.10)	.33 (.14)	.28 (.15)	.25 (.11)

Discussion

Similar to Runnels (2016), CEFR-J level hierarchical ordering was as predicted, with A-levels being easier to endorse than B-levels, which were easier to endorse than C-levels. In all, two out of 20 adjacent pairs were misordered, fewer than were observed in Runnels despite there being fewer adjacent pairs in Runnels ($k = 16$). With regard to relationships between TOEIC scores and the CEFR-J ratings, Runnels found mostly negligible-to-small correlations for listening and none-to-negligible for reading, and the reading correlations in Runnels were negative. In this current study, however, TOEIC reading test scores and mean difficulty ratings for the CEFR-J reading statements were more strongly correlated than for listening, and more compared with either of the correlations for non-paired skills. In addition, all correlations were positive, and ranged from negligible to moderate. Ross (1998), as Runnels noted, in his meta-analysis of self-assessment research in second-language and foreign-language acquisition, observed that reading test scores and self-assessments are more likely to correlate with each other, and for these correlations to “appear robust” (Ross, 1998, p. 5), compared with other skills. This is likely because “reading tends to be the skill that is first taught in the foreign language context, ...[and university participants] were most likely very experienced in using their reading skills” (Ross, p. 6). The finding of stronger reading correlations was also observed in the current study, but not in Runnels.

It was also observed that the listening paired-skills’ correlations were smaller than the non-paired skills correlations. It is unclear why this might be so. However, one possibility is the mismatch between listening skills and test formats. The listening section of the TOEIC test requires reading skills to answer the paper-based formatted test; and the CEFR-J listening descriptors are also paper-based, although these descriptors are written in the participants’ first language. Thus, neither the listening test nor the listening self-assessment descriptors match the skill and test format. In contrast, both the reading section of the TOEIC test and the CEFR-J reading descriptors require reading skills to respond; and thus, match the skill and test formats. With regard to each non-paired skills, either the reading section of the TOEIC test or CEFR-J reading descriptors match the skill and test formats.

Runnels (2016) also noted “self-assessment is likely to be affected by task difficulty” (p.122) in that easier tasks are more accurately rated than difficult ones. In this current study, for each series of correlations, A-level correlations were strongest, followed by B-level, then C-level. This is, as Runnels highlighted, easier tasks are more accurately rated. It should be noted, however, that the participants in this

current study had higher TOEIC scores than those in Runnels, and correlations were generally higher. It might be that learners in the present study have had more experiences at attempting more difficult tasks as defined by the CEFR-J descriptors, especially for A- and B-levels, and for reading in particular than the participants in Runnels. In this way, previous experiences at more difficult tasks would likely be an important factor in the size of the correlation between the TOEIC test and the CEFR-J descriptors.

Conclusion

The current study reported on an investigation of Japanese learners' of English self-assessment ratings based on the CEFR-J can do descriptors for listening and reading and TOEIC L&R test scores. The results described here were also briefly compared with the results found in Runnels (2016). In this current study, as with Runnels, the CEFR-J levels performed as predicted, that is, easier items had higher mean difficulty ratings, and more difficult items had lower mean difficulty ratings. However, different from Runnels, the correlations in this current study were strongest for reading and weaker for listening; whereas she found the opposite.

Several limitations were observed regarding the results in this current study when compared with the results in Runnels (2016). First, N-sizes were relatively small in both the former ($N = 54$) and the latter ($N = 57$). These smaller sample sizes might contribute to different results observed in both studies. Second, participants in the current study were different from those in Runnels, with non-English majors in a curriculum not informed by the CEFR in the former, and English majors in a curriculum informed by the CEFR in the latter. Observed differences in the results between the two studies might be due to differences between samples, as English majors and non-English majors might perceive the CEFR-J self-assessment can do statements differently. In addition, students studying in a CEFR-informed curriculum might have a greater awareness and understanding of the nuances in the CEFR-J descriptors compared with students studying in a curriculum not informed by the CEFR. However, this does not explain why higher correlations were observed in the current study. Perhaps the participants in Runnels proceeded too cautiously with the CEFR-J descriptors. Third, participants in this current study had larger TOEIC L&R scores. These higher TOEIC test scores likely relate to more experiences with more difficult tasks. If less able students have had fewer experiences with more difficult tasks, then it is likely that they can imagine neither the complexity involved in task mastery nor successful completion of a difficult task. Based on the inconclusive

findings in this paper, especially when compared with Runnels, and based on the limitations noted, Japan-based educational institutions, language educators, and researchers likely need to proceed with caution if using the TOEIC test scores and the CEFR-J self-assessment data as measures of language proficiency.

References (参考文献)

- Council of Europe. (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Educational Testing Services (*n.d.*). *TOEIC® program 各テストスコアとCEFRとの対照* [tōikku® puroguramu kaku tesuto sukoa to CEFR to no taisho-hyo, TOEIC® Program test score and CEFR comparison table]. https://www.iibc-global.org/toEIC/official_data/toEIC_cefr.html
- Educational Testing Services (2019). 2018年度 TOEIC® Program 総受験者数は約266万人 [2018-Nendo tōikku® puroguramu sō jukenshasū wa yaku 266 man-nin, Number of TOEIC® Program examinees is approximately 2.66 million]. <https://www.iibc-global.org/iibc/press/2019/p113.html>
- Negishi, M., Takada, T., & Tono, Y. (2012). A progress report on the development of the CEFR-J. *Studies in Language Testing*, 36, 135–163.
- North, B., Ortega, A., & Sheehan, S. (2010). A core inventory for general English, British Council/EAQUALS. teachingenglish.org.uk/article/british-council-equals-core-inventory-general-english
- Plonsky, L. & Oswald, F. L. (2014). How big is “big”? Interpreting effect sizes in L2 research. *Language Learning*, 64(4), 878–912. <https://doi.org/10.1111/lang.12079>
- Ross, S. (1998). Self-assessment in second language testing: A meta-analysis and analysis of experiential factors. *Language Testing*, 15 (1), 1–20. <https://doi.org/10.1191/026553298666994244>
- Runnels, J. (2016). Self-assessment accuracy: Correlations between Japanese English learners’ self-assessment on the CEFR-Japan’s can do statements and scores on the TOEIC®. *Taiwan Journal of TESOL*, 13 (1) 105–137.
- Tono, Y. (2014). CEFR-J の取組について [CEFR-J no torikumi ni tsuite, About CEFR-J initiatives]. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/092/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343401_03.pdf
- Tono, Y. (2017). The CEFR-J and its impact on English language teaching in Japan. *JACET Selected Papers*, 4, pp. 31–52. https://jacet.org/SelectedPapers/JACET55_2016_SP_4.pdf#page=41
- Tono, Y. (2019). Coming full circle—From CEFR to CEFR-J and back. *CEFR Journal*,

1, 5-17.

Tono, Y. & Negishi, M. (2012). The CEFR-J: Adapting the CEFR for English language teaching in Japan. *Framework & Language Portfolio SIG Newsletter*, 8, 5-12.

自治体電力事業における公私協働

—ドイツ再エネ分野における市民参加の動きを踏まえて—

宮森 征司

はじめに

1 問題意識

本稿は、自治体レベルの電力供給事業における公私協働組織の形成について、ドイツを比較対象国として、公法学的な観点から検討を行うものである。

わが国においては、戦後、地域の大電力事業者とそのグループ企業が、電力供給事業全体にわたって市場影響力を保持してきた。しかしながら、電力自由化政策、そして、再エネ推進政策の流れを受けて、従来の大電力事業者中心の集権的な供給体制から、自治体や市民等が積極的に関与する分散的な供給体制へと刷新を図るべきであるとの議論が、環境経済学などの分野で高まりを見せている。これらの議論では、自治体(ゲマインデ)やシュタットベルケ(ゲマインデが経営に関与する事業体)が電力供給事業と密接な関わりをもち、かつ、国家レベルで再エネ政策が積極的に推進されているドイツの議論が参照されることが少なくない¹。しかしながら、これまで公法学の見地から、自治体が果たすべき役割や公私協働組織の形成のあり方に着目して検討をしたものは見当たらない。

筆者はこれまで、わが国の公法学における公私協働論を具体化・深化させていく方途として、公的主体と私的主体が出資等を通じて関与する組織を公私協働組織と捉え、公私協働組織のガバナンスについて組織法的な観点から検討を行ってきた。本稿においては、このようなアプローチを、近時のドイツにおいて、特徴的な公私協働組織の形成の展開を見せている電力供給分野、特に再エネ分野の展開に注目した検討を試みる。

1 代表的な取組みである日本版シュタットベルケについて、さしあたり、諸富徹『再生可能エネルギーとシュタットベルケ』特集にあたって—日本における自治体エネルギー公益事業体の創設とその意義— 経済論叢 190巻4号(2017) 1頁以下、同「日本版シュタットベルケの現状と課題」環境ビジネス(2018) 94頁以下。ドイツのシュタットベルケについては、ラウパッハ・スミヤヨーク「ドイツシュタットベルケの変化するヨーロッパエネルギー市場への対応戦略」経済論叢190巻4号(2017) 13頁以下が詳しい。

2 本稿の内容

上記の問題意識に基づき、本稿においては、自治体レベルにおける公私協働組織の形成について、電力供給分野における展開に着目して、ドイツにおける公私協働組織の形成のあり方と、これに関係するゲマインデ法上の問題について、検討を行う。

まず、現在における公私協働の展開を理解するための前提として、ゲマインデやシュタットベルケが電力供給事業に積極的な役割を果たすようになった歴史的経緯を振り返り、現在、ゲマインデやシュタットベルケがドイツの電力供給市場のなかで置かれている位置を明確にする（Ⅰ）。次に、近時における再エネ分野における公私協働の形成について、その背景となっている「市民参加」の政策動向に言及した上で、同分野において実務で用いられることが多い公私協働組織の典型的なモデル（有限合資会社、及び協同組合）について紹介し、各組織モデルについてゲマインデ法の規律との関係について検討を行う。最後に、本稿のむすびとして、ドイツの公私協働組織の形成実務や法制度のあり方から、わが国の議論に若干の示唆を導くこととする（Ⅲ）。

Ⅰ 前史—ドイツにおける電力供給市場の形成

現在のドイツの電力供給市場においては、発電（Erzeugung）を大電力事業者（Verbundunternehmen）、送電（Übertragung）を大電力事業者の資本の影響を受けた地域企業（Regionalunternehmen）、配電（Verteilung）を主にゲマインデが経営するシュタットベルケ等の企業体が担うという役割分担が歴史的展開のなかで形成されてきた。現在、ドイツの電力供給分野においては、多様な公私協働組織が形成されているが、これらの組織は、基本的にかような役割分担の延長線上に形成されているものである。

そこで、以下においては、現在におけるドイツの電力供給分野における公私協働組織の特徴の分析を行う前提として、その歴史を概観しておくこととしよう。

1 帝政期

ドイツにおける電力供給の歴史は、19世紀まで遡る。当初、ゲマインデは、技術上の不確実性や設備投資の必要性から、電力供給事業への参入に対して消極的であった。しかしながら、1890年代に入ると、電化（Elektrifizierung）が都市政策にとって重要な要素であるという考え方が普及し（街灯の整備とともに、交通手段として鉄道が普及したことが大きい）、また、技術上の問題も解消され、収益性も見込まれるようになったことから、大規模なゲマインデを中心に、電力供給事業への参入が見られるようになった。ゲマインデは、電力事業者との間で特許契約を締結し又は自ら発電所を設立することで発電事業を

行う場合もあった²。もっとも、当時の技術ではいまだ遠隔地間の送電を行うことは不可能であり、基本的には、地域ごとの小規模な事業として展開されていた。

2 ワイマール期

20世紀に入ると、技術の進歩により、それまで電化がなされてこなかった人口密度が低い都市周縁部まで送電することが可能となった。しかしながら、このような形での供給を可能とするためには、高電圧送電網（Überspannungsnetz）を整備するために多額の資本を投入する必要がある、かつ、このような送電事業は市場の失敗により採算をとることが困難な部門であった。そこで積極的な役割を果たしたのが、国家、すなわち、連邦や州であった。連邦や州は、自ら企業を設立し、あるいは、民間の電力企業との共同出資による混合経済企業に参加することを通じて、超地域発電所（Überlandzentralen）の建設や高電圧網の整備を行った³。

他方において、ゲマインデやシュタットベルケは、発送電部門における存在感を減じていったものの、上記の国家や大規模事業者に対する抵抗を示しながら、その権限が及ぶ各地域において、配電部門における自治を主張し、配電事業者としての地位を維持した⁴。このように国家（ないし大電力事業者）とゲマインデとの間で政治的利益が衝突し合う状況のなか、妥協策として、混合経済企業が形成される例も見られた。

3 ナチス期

ワイマール期に至るまで、ドイツにおいて、電力事業に関する統一的な法制度は整えられてこなかったが、ナチス期においては、電力供給体制、特に発電の効率性を国家経済全体で向上させようとする観点から、1935年、エネルギー経済法（Energiewirtschaftsgesetz: EnWG）が制定された。同法においては、電力事業に関する一時的な許認可の仕組みが設けられたが、電力事業を担う主体による規律の差異が設けられることはなく、国家、ゲマインデ、私企業、混合経済企業がそれぞれ経営する電力供給事業は全て等しく、同法の規律に服するものとされた⁵。もっとも、かような法的規律は、ワイマール期に形成された電力市場における役割分担に影響を与えるものではなかった。

2 Hans-Günter Henneke/Klaus Ritgen, *Kommunales Energierecht*, 2.Aufl. 2013, S.40f. 背後にあった当時の都市の自治や、国家との関係におけるゲマインデの地位について、西川洋一「科学技術の発展と西洋法の歴史的伝統」城山英明・西川洋一編『法の再構築Ⅲ 科学技術の発展と法』（東京大学出版社、2007）3頁以下（15・16頁）。あわせて、板垣勝彦『保障行政の法理論』（有斐閣、2013）36・37頁も参照。

3 Henneke/Ritgen (Fn.2), S.41f.

4 Henneke/Ritgen (Fn.2), S.42. ゲマインデが配電事業において影響力を発揮することが可能であった背景としては、ゲマインデが道路網の所有権を背景として、特許契約を締結する実務が行われていたことが挙げられる。

5 Henneke/Ritgen (Fn.2), S.42.

4 戦後

ドイツにおいては、上に述べたような歴史的経緯から、ゲマインデが電力供給事業、特に配電部門において大きな役割を果たしてきたが、戦後も、ゲマインデにおける地域独占的な供給体制は、基本的に維持されることとなった。

しかしながら、電力市場の自由化や私化を促進する政策動向を受けて⁶、単独で競争力を発揮することが困難な小規模なゲマインデやシュタットベルケは大手電力事業者との競争にさらされ、厳しい状況に置かれることとなった。そこで、シュタットベルケのなかには大手電力事業者と資本提携を進めることにより、事業遂行のための資金調達を行うとともに、大手電力事業者が保有するノウハウを取り入れようとする動きも見られるようになった（垂直的統合による公私協働の形成）⁷。

他方において、近年、再エネ分野においては、いわゆる「エネルギー転換（Energiewende）」、分散的な電力供給体制を指向する政策的動向の影響を受け、ゲマインデが発電事業において積極的な役割を果たすことも期待されるようになった⁸。ドイツにおいて、脱原発政策の方針が採用され、分散的な電力供給体制を指向する「エネルギー転換」が進められる中、従来あまり見られることのなかった新たなタイプの公私協働組織が形成され、近年、その数は急激な増加を見せている。この背景には、再エネ事業に対して積極的に市民を関与させようとする「市民参加（Bürgerbeteiligung）」の議論の動きがある⁹。

II 再エネ分野における公私協働組織

1 「市民参加」の動き

再エネ分野において、市民参加の必要性が訴えかけられているのには、以下に述べるような事情がある。

第一に、資金調達の必要性である。再エネ施設を建設・運営するためには、多額の資金が必要とされる。よく知られているように、ドイツでは再エネ政策が積極的に推進されており、わが国におけるよりも、自治体や市民が再エネ事業への参入を促進する法制度上の枠組みが整備されているものと考えられる。

6 Henneke/Ritgen (Fn.2), S.48ff. 競争政策の展開について、参照、加藤浩平「ドイツ電力産業における競争政策の展開—電力市場の自由化と規制—」専修大学社会科学年報42号（2008）151頁以下。Vgl. Günter Püttner, Daseinsvorsorge und Wettbewerb von Stadtwerken, DVBl 2010, 1189ff.

7 Ramon Sieven, Kommunale Energieerzeugung in der Energiewende, 2019, S.104ff. 他方で、再公営化の動きも見られることについて、ヤン・ツィーコー（人見剛訳）「再公営化—地方自治体サービスの民営化からの転換？—ドイツにおける議論状況について—」立教法務研究7号（2014）43頁以下。

8 Sieven (Fn.7), S.7f.

9 ドイツの再エネ分野における市民参加の展開については、高橋寿一『再生可能エネルギーと国土利用：事業者・自治体・土地所有者間の法制度と運用』（勁草書房、2016）、同「陸上風力発電設備の建設と市民参加—ドイツ法における近年の動向を中心として—」専修法学論集134号（2018）57頁以下、同「風は誰のものか？—再生可能エネルギー法制をめぐる近時の議論を中心として—」横浜法学28巻3号（2020）139頁以下を参照。

しかしながら、ドイツにおいても、資金調達的面において、小規模のゲマインデや市民が単独で再エネ事業を実施することのハードルはやはり高い。そこで、ドイツにおいては、ゲマインデと市民が再エネ事業を実施するための資金調達を共同で行おうとする動きが注目を集めているのである¹⁰。

第二に、受容性 (Akzeptanz) の向上である。再エネ政策に対する市民からの支持が一般に厚いと考えられるドイツにおいても、具体的な再エネ施設との関係においては、近隣住民による建設反対運動にまで発展するケースが見られる。一方で、再エネ政策の推進それ自体に関しては賛成の立場にある市民が、他方で、再エネ関連施設から発生する騒音、景観の阻害、生態系への影響、日照障害、音波障害などの環境問題の発生に懸念を抱くことは稀ではない。そこで、市民を再エネ事業に参加させることを通じて、具体的な再エネ事業の実施との関係において、市民の受容性を向上させる取組みに期待が寄せられているのである¹¹。

そこで、上記のような市民参加の議論の動きを受け、近年、特に注目を集めているのが、市民自らが組織を設立し、直接的に再エネ事業に参加する取組みである。この場合、市民は、事業主体の株主ないし構成員として積極的に参加することになる。

かような形態での市民参加を実現するために、ドイツにおいては、ゲマインデやシュタットベルケが果たす役割に期待が寄せられている。本稿 I でも述べたように、ドイツにおいては、電力供給事業、特に配電事業において、ゲマインデが積極的な役割を果たしてきた歴史があり、市民にとって身近な存在でもある。そこで、市民が再エネ事業に積極的に参加することを可能とする役割はゲマインデやシュタットベルケが果たすべきであるとの考え方が浸透している。そして、そのような発想の具体的な帰結の一つが、ゲマインデと市民が共同で再エネ事業を実施する公私協働組織を形成するという手法である。

2 有限合資会社と協同組合のガバナンス

一般に、ドイツにおいて、組織法的な観点から公私協働が論じられる際には、株式会社や有限責任会社が検討の素材とされることが多い。これに対して、再エネ分野においては、市民参加の動きが典型的な組織形式として公私協働組織の組織形成選択のあり方に現れている。すなわち、ドイツの再エネ事業の公私協働の形成においては、有限合資会社、並び

10 市民参加の文脈において、このような動きは「資金調達における市民参加 (finanzielle Bürgerbeteiligung)」とも呼ばれる (Vgl. Christian Maly/Moritz Meister/Thomas Schomerus, Finanzielle Bürgerbeteiligung—Rechtlicher Rahmen und Herausforderungen, in: Handbuch Energiewende und Partizipation, S.371ff.)。

11 Sieven (Fn.7), S.144ff.

に、協同組合といった組織形式が用いられることが多い点が特徴的である¹²。

ここでは、これらの組織形式のガバナンスの特徴について確認するとともに、これらの組織形式が市民参加を実現するために用いられる理由についても適宜触れることとしたい。

(1) 有限合資会社 (GmbH & Co.KG)

有限合資会社とは、合資会社の無限責任社員として有限責任会社が参加する混合的会社形態である¹³。合資会社においては、無限責任社員 (Komplementär) と有限責任社員 (Kommanditist) が並存しており、両者の法的地位は厳格に分離されている。すなわち、有限合資会社においては、基本的に、人的責任を負う無限責任社員が業務執行を行うのに対して、有限責任社員は主に資本を提供する出資者としての役割を果たすにとどまる¹⁴。

再エネ分野における典型的な組織形成としては、ゲマインデないしシュタットベルケが全額を出資する有限責任会社を設立し、これが合資会社に無限責任社員として参加するのに対し、市民が有限責任社員として参加するという方法が用いられることが多い。このような組織形成の方法を採ることにより、ゲマインデが事業経営において主導的な役割を果たし、市民には資金提供者としての役割を果たすことが想定されている。

(2) 協同組合 (eintragene Genossenschaft (e.G.))

わが国において分野別の協同組合法が存在しているのとは異なり、ドイツにおいては、協同組合に関する一般法として協同組合法が制定されており¹⁵、同法1条が定める要件に該当する限り¹⁶、協同組合を設立することが認められている。

協同組合の組織形式の特徴は、民主的な意思決定構造が採用されている点にある。資本会社 (株式会社、有限責任会社) の場合、その組織の意思決定への影響力を決する要素として、基本的には出資額が基準となる。これに対して、協同組合の場合には、「一人一票の原則」が採用されており (協同組合法43条3項1文)、出資額の多寡とは無関係に、協

12 Matthias v. Kaler/Friedrich Kneuper, Erneuerbare Energien und Bürgerbeteiligung, NVwZ 2012, 791ff. (792); Jochen Baas, Die finanzielle Bürgerbeteiligung an Windenergieanlagen: Eine Untersuchung der verschiedenen Modelle, ihrer Vor- und Nachteile, VR 2018, 164ff. (167); Ines Zenke/Christian Dessau, Bürgerbeteiligungen als Schlüssel einer kommunalen Energiewende, KommJur 2013, 288ff.(290); Jasmin Wagegg/Michael Frey, Bürgerbeteiligung bei der Entstehung und Weiterentwicklung kommunaler Energieleitbilder, VR 2017, 295ff. (297); Becker/Marnich, V.Bereich "Energie", in: Wurzel/Schraml/Becker, Rechtspraxis der kommunalen Unternehmen, 3.Aufl. 2015, Rn.47ff.

13 高橋英治『ドイツ会社法概説』(有斐閣、2012) 373頁以下によれば、ドイツ会社法上、資本会社である有限会社が人的会社である合資会社の無限責任社員となるという有限合資会社の組織形態は、学説において、長きにわたって批判が展開されてきたものの、1980年の商法典改正により、法律上の根拠を有する制度として定着した。

14 高橋・前掲注13) 68頁。

15 Gesetz betreffend die Erwerbs- und Wirtschaftsgenossenschaften vom 10. 10. 2006, BGBl. I, 2006, 2230ff. ドイツの協同組合法、及び、エネルギー協同組合の現状については、さしあたり、寺林暁良「ドイツにおけるエネルギー協同組合の新展開」ドイツ研究51号 (2017) 109頁以下、同「欧州におけるエネルギー協同組合の実態と意義」環境と公害48巻1号 (2018) 33頁以下を参照。

16 協同組合法1条:「構成員の営業、経済、又は事業経営による社会的・文化的な利益を促進することを目的とする閉鎖的でない構成員から構成される会社(協同組合)は、本法における登録済協同組合としての権利を得る。…」

同組合の構成員一人ひとりが、構成員全員により構成される総会において平等に一票を投ずる¹⁷。

加えて、協同組合の機関については、自己機関制 (Selbstorganschaft) が採用されている。すなわち、協同組合の機関には、総会 (Generalversammlung) のほか、理事 (Vorstand)、監査役会 (Aufsichtsrat) があるが、これらの機関の担い手は、協同組合の構成員のなかから総会により選出されなければならない¹⁸。

協同組合への加入・脱退の手続は簡便である (協同組合法15条)。また、協同組合の加入にあたっては、最低限一口の出資持分をもって参加しなければならないが (協同組合法7条)、協同組合法には、出資持分の最低金額に関する定めが置かれていない¹⁹。さらに、実務においても、幅広い市民から出資を募ろうとする観点から、金額は低額 (50ユーロから100ユーロといわれる) に設定されることが多い²⁰。

このような民主的な意思決定構造や参加にあたってのハードルの低さから、協同組合には、幅広い範囲の積極的な市民参加を図るための組織形式として、一般的に高い評価が与えられている²¹。

3 ゲマインデ法の規律との関係

各州のゲマインデ法においては、戦前のドイツ・ゲマインデ法の規定を受け継ぎ、ゲマインデが事業活動を実施する場合に従わなければならない一般的な規律が定められている。これらの規律は、主に、ゲマインデによる経済活動一般に対して適用される制約の三位一体、責任限定の規律、適切な影響力の確保の規律から成る²²。

以下においては、電力供給 (特に、再エネ分野) における公私協働組織の形成局面において、上記ゲマインデ法の規律との関係でどのような問題が生ずるのか、検討を行うこととする。

(1) 制約の三位一体の例外

各州のゲマインデ法においては、ゲマインデが経済活動を行う場合、制約の三位一体 (①公的目的に資すること、②ゲマインデの財政からみて出資額が適切であること、③補完性の原則) と呼ばれる一般的な規律がゲマインデが用いる組織形式とは無関係に適用され

17 Andreas Gaß, Zulässigkeitsvoraussetzungen und Kooperationsmodelle für den Betrieb von Anlagen erneuerbarer Energien auf gemeindlicher Ebene, KommBY 2012, 2ff. (9); Hubertus Kramer, Bürgerwindparks, 2018, S.308.

18 Gaß (Fn.17), 9.

19 Gaß (Fn.17), 8.

20 Kramer (Fn.17), S.308.

21 Kramer (Fn.17), S.308.

22 ゲマインデ法の一連の規律について、宮森征司「ゲマインデ法と会社法の衝突に関する一検討」一橋法学15巻3号279頁以下 (286頁以下)。

る²³。一般に、電気供給事業は民間企業も担うことが可能であることから、経済的企業に関する制約の三位一体の規律が適用される。また、上記①②の要件は、基本的には充足されることについて争いはない²⁴。

しかしながら、各州のゲマインデ法においては、上記③に関し、一定の領域について、適用除外規定が設けられている²⁵。エネルギー経済分野（特に再エネ分野）との関係において、各州のゲマインデ法の規律例は、以下の通り分類することができる。

まず、各州のゲマインデ法のなかには、ゲマインデや自治体企業が生存配慮に関して積極的な役割果たすべきであるとの観点から、制約の三位一体（特に、補完性条項）の適用除外について定めるものがある²⁶。次に、ノルトライン・ヴェストファーレン州ゲマインデ法107a条においては、エネルギー経済領域の特殊性に着目し、自由競争状況におけるゲマインデによるエネルギー経済活動を促進する趣旨で、補完性条項の適用除外について定めている²⁷。さらに、再エネ分野に特化するものとして、ヘッセン州ゲマインデ法121条1a項のように、再エネ施設の地域における受容性を向上させ、自治体間の協働や私的第三者との協働を促進する趣旨で、制約の三位一体の適用除外規定を置く例があることが注目される²⁸。

（2）責任限定の規律との関係

各州のゲマインデ法においては、ゲマインデ財政を保護する観点から、ゲマインデが設立又は出資する私法上の組織形式について、ゲマインデが負うこととなる責任（Haftung）が限定されていることを求める規律が設けられている²⁹。

① 有限合資会社の場合

有限合資会社の社員が負うべき責任は、無限責任社員の場合と有限責任社員の場合とで異なる³⁰。上記2（1）で紹介した典型的な組織形成による時、ゲマインデは合資会社

23 参照、斎藤誠「国法の規律と地域性—ドイツ市町村と電気通信事業の関係から」同『地方自治の法的基層』（有斐閣、2012）220頁以下（246頁以下）。

24 Boas Kümper/Alexander Milstein, “Vergesellschaftung des Windes”? -Ausgewählte Rechtsfragen sog. Bürgerwindparks in kommunaler Hand-, ZfBR 2013, 742ff.(743ff.); Foroud Shirvani, Rückenwind für kommunale Bürgerwindparks? -Kommunal- und bauplanungsrechtliche Fragen-, NVwZ 2014, 1185ff. (1186ff.); Andreas Dazert/Dirk Mahlberg, Betrieb eines kommunalen Windparks-Voraussetzungen und Grenzen nach dem Gemeindefinanzrecht, NVwZ 2004, 158ff. (159f.).

25 参照、人見剛「ドイツにおける市町村生活基盤配慮行政の〈再〉公営化」広渡清吾ほか編『日本社会と市民法学』（日本評論社、2013）309頁以下（412・413頁）。ゲマインデ法において経済的企業と非経済的企業の区別の構造が形成された歴史的経緯について、宮森征司「自治体事業の基礎的法枠組みの歴史的形—自治体事業の区別に着目して」行政法研究32号（2020）117頁以下。

26 このような規定として、バーデン・ヴュルテンベルク州ゲマインデ法102条4項、バイエルン州ゲマインデ法87条1項4号、ニーダーザクセン州自治体基本法136条3項2号。

27 参照、斎藤誠「地方公共団体の経済活動への関与—その許容性と限界」高木光ほか編『阿部泰隆先生古稀記念 行政法学の未来に向けて』（有斐閣、2012）175頁以下（180頁注14）。Vgl. Kümper/Milstein, (Fn.24), 745.

28 LT-Drs. 18/4816, S.2f. Vgl. Sieven (Fn.7), S.158; Shirvani (Fn.24),1187.

29 宮森征司「自治体の組織選択裁量」一橋法学18巻2号141頁以下（153・154頁）。

30 Gaß (Fn.17), 8.

の無限責任社員として参加していることに着目すると、責任は限定されていないようにも見える。しかしながら、ゲマインデが有限責任会社を通じて合資会社に参加している限り、ゲマインデの責任は有限責任会社に出資している範囲に限られる（有限責任会社法13条2項）。

したがって、ゲマインデが有限責任会社を通じて無限責任社員として合資会社に参加する場合、ゲマインデの責任は限定されているということができ、責任限定の規律との関係において問題が生じることはない³¹。ちなみに、有限責任社員としての出資にかかる責任が限定されていることは、市民にとって参加のインセンティブともなる。

② 協同組合の場合

協同組合の構成員が負うべき責任も限定されている（協同組合法2条）。したがって、協同組合の組織形式は、責任限定の規律との関係において問題を生じない³²。

ちなみに、構成員の負うべき責任が限定されていることは、市民が参加するインセンティブとして機能する点については、上記の有限合資会社における場合と同様である。

（3）適切な影響力行使

各州のゲマインデ法においては、ゲマインデが設立又は参加する独立した法人格をもつ私法上の組織形式に関して、民主的正統性を確保しようとする観点から、特に、その監査役会等のコントロール機関に対し、「適切な影響力」を確保することを求める規律が設けられている。筆者はこのゲマインデ法上の規律と会社法の規律との間に生じる衝突の問題について、株式会社と有限責任会社の場合を取り上げて検討を行ったことがあるが、以下においては、有限合資会社や協同組合の組織形式の場合に即して検討を加えることとした。

① 有限合資会社の場合

上記2（1）で紹介した典型的な組織形成によった場合、ゲマインデが有限責任会社を通じて無限責任社員として合資会社に参加する場合、無限責任社員が資本の過半以上を保有していなくとも、業務執行において十分な影響力を確保することができる。

したがって、ゲマインデが有限責任会社を通じて無限責任社員として有限合資会社に参加している限り、ゲマインデは有限責任会社に対して、ゲマインデ法が定める適切な影響力を行使することが可能であり、ゲマインデ法の規律との関係において問題が生じることはない³³。

もっとも、他方において、市民参加を重視する立場からは、有限責任社員としての市民が有限合資会社の組織運営に対して影響力を行使することは困難であることから、再エネ事業に積極的に関与することを望む市民がネガティブな印象を抱くおそれもあるとの指摘

31 Gaß (Fn.17), 8.

32 Gaß (Fn.17), 8.

33 Kramer (Fn.17), S.294ff.; Gaß (Fn.17), 8.

がなされている³⁴。

② 協同組合の場合

これに対して、協同組合の組織形式が用いられる場合には、困難な問題が生ずる。

先に述べたように、協同組合は、民主的な意思決定構造を基本としている。かようなガバナンスにおいて、ゲマインデが構成員として参加し、総会において投ずる一票の重みは、他の構成員のそれと平等なものである。そうすると、仮にゲマインデが過半数以上の出資持分（Geschäftsanteil）を保有している場合であっても、総会において、ゲマインデが十分な影響力を確保できるとは限らない。かつ、理事や監査役会は総会によって選出される。以上のような協同組合の組織構造からみて、協同組合に対する適切な影響力を確保することは困難であるとする見解も主張されている³⁵。

そこで注目されているのが、一人一票の原則に関する例外規定を利用する方法である。すなわち、協同組合法43条3項3文3号は、その構成員が専ら又は概ね協同組合から構成される協同組合について、定款で定めるところにより、一人一票の原則ではなく、事業資産（Geschäftsguthaben）やその他の基準に応じて、構成員の複数議決権（Mehrstimmrecht）を設定することを認めている。この仕組みを用いることにより、ゲマインデは、協同組合に参加するゲマインデ以外の構成員と比べて、より大きな影響力を及ぼすことが可能となる³⁶。

もっとも、この例外を用いることにより特定の構成員に認められる複数議決権は最大3票であり、数多くの市民を協同組合に組み入れようとする場合には、ゲマインデが適切な影響力を確保することはやはり困難である。

そこで実務においては、協同組合を二段階で設立するという組織形成の工夫が凝らされている。まず、市民、銀行、企業が、それぞれの持分をもって、一つ又は複数の協同組合を設立する（市民協同組合（Bürger-Genossenschaft）と呼ばれる）。次に、これらの市民協同組合が、ゲマインデの主導で設立された別の協同組合に参加する（事業協同組合（Betrieb-Genossenschaft）と呼ばれる）³⁷。この事業協同組合においてゲマインデに複数議決権が認められれば、当該組織に対するゲマインデは、適切な影響力を確保することが可能になる。

Ⅲ おわりに

以上、本稿では、ドイツにおける自治体レベルにおける電力供給事業の歴史を振り返るとともに、近時の再エネ事業における公私協働組織の形成、これに関連するゲマインデ法

34 Kramer (Fn.17), S.295.

35 ゲマインデが協同組合に参加することについて否定的な見解として、Kramer (Fn.17), S.304ff.

36 Andrea Althannns, Genossenschaftliche Modelle bei der Realisierung von Anlagen der erneubaren Energien, ZfBR-Beil 2012, 36ff. (36).

37 Gaß (Fn.17), S.9; Becker/Marnich (Fn.12), Rn.29f.

上の問題について検討を行ってきた。

以下においては、本稿のむすびとして、本稿の検討から得られた知見をまとめるとともに、日独両国の公私協働の実態及び法状況の差異を踏まえた上で、わが国の議論への若干の示唆を導くこととしたい。

1 自治体が果たすべき役割

ドイツには、ゲマインデが、電力供給、特にその中でも配電部門において積極的な役割を果たしてきたという歴史があり、現在においてもそのことに基本的に変化はない。ゲマインデやシュタットベルケによる再エネ事業の展開も、基本的には、かような歴史の延長線上において捉えることができる。これに対して、わが国の電力事業は、送電から配電まで一貫して、大手電力事業者とその子会社によって独占的に供給されてきた歴史がある。

近年、わが国においても地域で再エネ事業を推進しようとする動きが見られるが、わが国の自治体にはそもそもドイツに見られるような配電事業を担ってきた歴史や、そこで蓄積されたノウハウは存しない。自治体電力や再エネ事業において、わが国では先進的なドイツの事例が紹介されることが少なくないが、現実には政策を推進するにあたっては、上に述べたような両国の基本的な違いを踏まえた上で実施する必要があるといえよう。

2 市民参加論との関係

大規模施設の設置（本稿との関係では、風力発電所を想起されたい）の立地手続論や行政計画論との関係において、ドイツにおいて、市民参加の法制度が整えられ、政策的にも実践されてきたことは、既に多くの研究業績により紹介がなされているところである³⁸。

これに対して、本稿で検討を行った市民参加は、幅広い範囲の住民からの資金調達を図るとともに、再エネ事業に市民自らが直接的に参加するというものであった。このように、市民が事業に直接的に参加することにより受容性を創出しようという政策上の取組みについては、これを市民参加論全体のなかでどのように捉えるべきかについて、ドイツ公法学の枠組みにおいても議論が行われているさなかにあるように思われる。今後は、参加の要素を含む各種の手法を組み合わせることによりどのように受容性の向上が図られるのか等、機能的側面に着目して政策論的な観点から論ずる余地があるように思われる。かような検討は、公私協働論と参加論の間関係をより詳しく考察することにも通じよう。

3 公私協働組織の形成

① ドイツの議論の特徴

筆者はこれまで、公私協働組織の適切なガバナンスを確保するための法枠組みを考察するための素材として、ドイツでもこの問題を論ずる際に取り上げられることの多い資本会

38 再エネ分野の代表的業績として、前掲注9)の文献を参照。

社の場合を中心に検討を行ってきた³⁹。これに対して、本稿における検討からは、ドイツにおいては、資本金会社以外の組織形式の場合にあっても、ゲマインデ法に定められた適切な影響力行使の規律の趣旨を私法上の組織形式において実現するための解釈論が展開され、これが組織形成の実務においても実践されていることが明らかになった。特に、一人一票の原則、民主的な組織構成原理が採用されている協同組合のような組織形式のような場合においても、ゲマインデ法が定める適切な影響力行使の趣旨と私法上の組織形式のガバナンスの間に生ずる衝突を処理するためのきめ細やかな議論が展開されている点は注目に値しよう。このようなドイツの議論の方法は、基本的には行政主体（自治体）からの公的統制をいかに実現するかという観点に基づくものであるといえるが、きめ細やかに議論を展開するスタンスからは、行政組織からの公私協働組織の独立の契機のみならず、市民の側からの参加の契機をも踏まえて公私協働組織を捉えようとする意図を読み取ることもできるように思われる。

② わが国への示唆

これに対して、これまで筆者も指摘してきたように、わが国の法状況はドイツにおけるそれとは対照的に、第三セクターや外郭団体等、自治体事業における公私協働組織のガバナンスに関する一般的な法制度が存在しないのが現状である。今後、かような法理論・法制度を検討していくにあたっては、ドイツ法における議論を参考に、行政組織からの独立の契機に加え、市民の側からの参加の契機も踏まえて、私法上の各組織形式のガバナンスとの関係を総合的に把握するスタンスが求められているといえよう。

わが国においては、これまで、公私協働組織のガバナンスについて、典型的な組織形態である株式会社（第三セクター）に焦点が当てられることが多かった。しかしながら、実務ではその他の組織形式（具体的には、社団法人、財団法人、各種協同組合、特定非営利活動法人（NPO法人））も、さまざまな形態の公私協働を形成している。これらの組織形式のガバナンスの特徴をも踏まえ、自治体による関与のあり方や市民の参加のあり方について具体的に考察を深めることが、筆者に残された課題である。

※付記

本稿は、JSPS科研費（課題番号19K13492）の助成を受けた研究成果の一部である。

39 資本金会社の場合における出資額の多寡に応じた株主の影響力について、参照、板垣勝彦「保障国家における私法理論」行政法研究4号（2013）77頁以下（119頁）。

全員参加の短期海外研修の教育的効果 ～修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を活用して～

真野 毅

要旨

高等教育機関による海外短期研修の増加にともない、それらの教育的効果が報告されている。ただ、ほとんどの先行研究においてその教育的効果は一面的または部分的に捉えられており、どのような要因がどのような教育的効果に結び付いているのか見えにくい。本研究は、全員参加の短期海外研修を対象とし、その教育的効果を多面的に捉え、どのような要因が学生の意識の変容を引き起こしたのかを、質的研究法を採用し分析した。海外研修においては、クラスにおける授業だけでなく、海外という非日常の世界に出会い、様々な新しい体験をする。これらの体験を教育的効果の要因となる14の概念として生成し、それらの概念の相乗効果が確認できた。全員参加の短期海外研修において、アイデンティティ形成期にある学生にとって、学生間の強い横並び意識や同調意識が与える影響は大きく、留学と一緒に来た同胞の学生の存在が、学生の学びに大きな影響を与えることを明らかにできた。さらに、短期の海外研修であっても、語学力や異文化対応能力を向上できる機会を提供するだけでなく、それらの教育的効果の最終成果となる自己効力感の形成できる機会とできることを明らかにできた。

〈キーワード〉 海外短期留学、アクティブ・ラーニング、異文化コミュニケーション

1. はじめに

近年日本から海外へ留学する学生数の減少が伝えられていたが、日本学生支援機構の調査によれば、2009年度36,302人であった留學生の数が、2017年度には105,301人と報告されており、この8年間で2.9倍の増加を示している。留学期間別の内訳では、1年以上の長期留学者は1081人から2022人へ約2倍の増加に対して、1か月未満の短期留学者が16,873人から68,876人と、この8年間で短期海外研修が約4倍と急増している。日本の高等教育機関で、海外研修、海外実習、ボランティア、インターンシップ、スタディツアー等の様々な短期の海外研修プログラムが開発・実施され、多くの学生が短期留学を経験す

る時代に入ってきているのである。

大学は、短期留学をそれぞれの大学の差別化戦略の一貫として位置づけ、大学案内や大学のホームページで留学した学生のメッセージを加え、その研修のメリットを謳っている。先行研究においても、このような様々な海外短期研修プログラムの教育効果が確認されている。これらの研究においては、それぞれ高等教育機関が設定した目的に対して、成果の達成度を評価するものが多い。しかし、工藤（2011）が指摘するように、ほとんどの先行研究は教育効果を一面的または部分的に捉えており、その中身については包括的かつ具体的に問うものが少ない。また、先行研究の報告からは、一体どのような要因が学生の意識変容を引き起こしたのかが見えにくい（奥山：2017）。次年度のプログラムの改善を図っていくには、どのような要因がどのような教育効果に結びついているのかの分析が肝要となる。

筆者は、2018年に創立した長野県立大学グローバルビジネス学部の教員として、米国ミズーリ大学コロンビア校にあるAsian Affair Centerのグローバル・ビジネス・プログラムに参加した25名の学生を2019年6月に引率した。1年次に、米国でのビジネス視察研修先と同種の団体を長野県内で訪問させ、2年次の1学期に、事前研修プログラムの授業（海外経営経済演習Ⅰ）を実施した。2019年6月2日に渡米し、海外研修に入った1週間の終わりには、学生達の態度が大きく変化をしていた。日本での研修時とは違い、メモを見ながら不安そうに話をしていた学生が、自分の言葉で文法に拘らず英語を話し始めたのである。次第に自信を深めていく学生を見て、彼らの変化の要因を分析するために、彼らにインタビューを実施することに決定した。本稿は、この面接調査から得た質的データを、M-GTAを活用して分析した結果をまとめ、全員参加の短期海外研修の教育的効果を学生の意識の変容という視点から考察したものである。

2. 先行研究

2.1 短期の海外研修プログラムの教育的効果に関する研究

短期の海外研修プログラムは、語学研修を中心に構成されるプログラムが多く、その教育効果に関しては、学習用語の運用能力、異文化対応力、学習意欲の向上等の教育効果を対象とした数多くの研究がある。例えば、渡部（2009）は大阪大学における短期留学の前後アンケート調査の結果、学習の後に英語使用の不安の軽減が認められ、『多くの参加者は、公共の場で英語を使用することについては、実践を積むことによって度胸や自信をつけたようである』と指摘している。S. Kathleen Kitao（1993）も、同志社女子短期大学から、米国Mary Baldwin Collegeに短期留学した留学生の英語運用能力の改善について報告している。プログラムの1週間後と帰国後のアンケート調査をした結果、学生は3週間の短期留学により、ほとんどの学生が英語力の改善を認めていたのである。木村（2011）は、尚美学園大学における3週間の英語研修のデータをもとに、研修参加者と非参加者を比較した結果、研修後には5%水準の有意差で実験群（研修参加者）の英語得点が統制群

(非参加者)よりも高くなっていることを明らかにしている。また、特に学生のリスニングなどのスキルが高くなっており、留学生は英語学習に対してより積極的になっているという。佐々木(2017)は、電気通信大学からの短期留学を経験した学生に対するアンケート調査を実施し、語学面では特にリスニングの向上が認められるほか、語学留学への参加が英語学習の重要性を再認識する契機になっていると報告している。

「海外スタディツアー」などの名称で知られているフィールドスタディーに関する研究¹もある。海外スタディツアーには、語学研修は含まれておらず、アジアを中心とした国において、10日間前後のフィールドワークに参加する。このようなフィールドワーク体験は、語学能力の向上ではなく、「新しい課題に直面した時に、自分で問題を解決していく力」を養成すること目的としている。箕曲(2017)は、「深い関与²」に導くための3つの条件を考慮にいれ、海外スタディツアーの事前研修や体験学習のなかに仕掛けを盛り込み、効果的な学習成果に結びつけている。3つの条件とは、①課題が適度にチャレンジングなものであること、②コミュニティの感覚と③学生がホリスティックに学べるように教えることである。(パークレー2015:83-86)。このように課題解決力の習得というような教育的効果を狙う海外スタディツアーにおいては、学びの深さを向上させる仕掛けが工夫されているのである。

語学研修が中心のプログラムであっても、語学と異文化体験面での教育効果だけでなく、多面的な効果の可能性について触れている研究もある。小林(2013)は、一橋大学における4週間の語学研修後に提出された帰国報告書の自由記述欄の内容を考察し、語学における研修の有効性や異文化体験や交流を通じた学びを確認すると同時に、社会人基礎力の向上にも結び付く可能性があることを指摘している。報告書のなかで学生が自ら課題を発見し、主体性を持って、その課題解決に向け適切な相手と交渉し、実際に問題を解決していった様子が散見されたからだ。海外での生活を一定期間過ごす中で、予期できない様々な問題や困難に直面せざるを得ない。小林(2013)は、事前研修の中では、予期できない問題とその解決に学生の問題意識をむけさせることができれば、より高い教育効果が見込めると考えている。2009年に米国ホフストラ大学に留学した学生を調査研究した田中(2009)は、『海外という全く違った環境が自分を振り返るいい機会となり、今まで考えなかったこと、思いつかなかったこと、自分とは違う考えがあるということを総合的に経験することができたことが明らかにできた』と結論づけている。異国で語学と文化を学習するというだけでなく、多面的な教育効果も期待できるのである。

研修機関が短い海外短期研修においては、研修内容だけでなく、事前学習が教育効果の向上に重要な要素となる。川内(2006)は、青森県立保健大学の学生が短期留学をした際の心理的不安の変化について調査を実施し、『事前研修のあり方が学生の心理的不安内

1 海外体験学習のなかで、海外スタディツアーは海外研修(フィールドスタディー)に分類されている。

2 「深い関与」とは、「ある連続体上で経験され、動機付けとアクティブ・ラーニングの間の相補的な相互関係から生み出されるプロセスとプロダクト」(パークレー2015:65)ある。

容を変えろという結果から、それぞれの大学で事前研修の見方が十分に行われることを願うと同時に、研修の動機付けである第一歩が国内で始まっているということを再確認しなければならない』と結論付けている。事前研修を受けた学生は、研修以前に持っていた不安感を現地で即座に解消し、簡単に日常生活に溶け込んでいるのに対して、事前研修を受けなかった学生は、その解消に時間がかかっていたのである。事前研修は、学生がその不安内容を自覚し、いかに対応すべきかを考える時間を設ける役割を果たしているのである。

2.2 学生の意識の変化プロセスから分析した質的研究

海外研修の教育効果を、質的研究法を採用し、学生の意識の変化のプロセスから分析している研究もある。奥山（2017）は、先行研究の報告からは、どのような要因が学生の意識変容を引き起こしたかということが見えにくいため、M-GTAを採用して学生の留学生活の様相を詳細に考察している。M-GTAの研究方法については後述するが、長期³の海外留学を経験した4名の学生をデータ供給者として選び、彼らとの面接した結果得たデータを概念化し、その概念の因果関係を「留学による効用とその形成プロセス」としてまとめている。そのストーリーライン⁴は以下のようにまとめられている。「データ提供者は留学当初、語学能力不足などからホスト国の社会に用意には溶け込めなかった。こうした奮闘努力とその成功を経て、データ提供者は達成感と自信を得ていく。そして最終的に『やればできる。何とかなる』という前向きな革新を持つに至る」。奥山（2017）は、「このプロセスから、最後に獲得した強い自己革新や自己効力感⁵をもたらした要因が『コミュニティーへの参加とそこでの成功体験』にあることが認められる」と指摘している。バンデューラが提案した自己効力感を生み出す4つの要因⁶のうち、最も有効とされる「遂行行動の達成」（＝成功体験）が確認できたからである。

さらに、奥山（2017）はデータ提供者が留学中も日本の友人とのつながりを大切にしていた事実から、「日本の強い引力」というカテゴリーを抽出している。学生は、経済的負担や語学能力の不安に加えて、友人との同調感を失って異なる場所や状態に身をおく『不安感』を持っていると奥山は考えたのである。奥山はエリクソン⁷を引用して、アイデンティティを形成する青春期には、友人とのつながりが重要であり、個人行動が前提となる長期留学よりも、集団行動を基本とした短期プログラムの方が学生のニーズに沿っている可能性が高いと考えている。

3 3名の学生が約1年の留学期間で、残りの1名は半年の留学期間である。

4 生成された概念から、概念の関係性をプロセスとしてまとめ、全体像を記述化したもの。

5 自己効力感とは、ある状況において、ある結果を達成するために必要な行動を自分が上手くできるかどうかの予期である（Bandura 1977）。

6 4つの要因とは、「遂行行動の達成」（＝成功体験）、「代理的経験」（＝モデルを通じた代理的経験）、「言語的説得」と「情動的歓喜」である（Bandura 1977）。

7 アイデンティティは周りから見られる自分と主観的な自分が一致する感覚であり、青年期に発達する（Erikson 1959 小牝木編訳1973）。

工藤（2009）は、4週間の短期研修に参加した大学生の質的研究を通じて、短期海外研修の教育的効果について包括的かつ批判的に検討している。調査対象者は、オーストラリアで4週間研修した23名の学生である。最初の1週間は寮生活で、その後3週間はホームステイをして、英語の授業以外に乗馬体験、農場体験、小学校訪問、観光を体験している。工藤が、引率教員兼研究者として、留学中と留学後に個人面接もしくは集団面接をして、短期語学研修を通じて参加学生は何を得ているのかを質問し、グラウンディド・セオリー・アプローチに基づき、ストーリーラインを提示している。データ分析の結果、工藤は「箱入り研修生⁸の学習言語でのコミュニケーションの克服過程」という成長物語を構築している。データ提供者は「学習用語でのコミュニケーションの困難」に出会い、その困難を克服する過程において、「困難の緩衝行動」が生まれ、「研修成果」を実現していくというストーリーラインである。このプログラムに参加した学生は、大学の単位が取得でき、同じ大学からの参加者や引率者がいるので安心であると考えていた。工藤も、データ供給者が最初の1週間は寮で一緒に過ごしたことが、学生の不安軽減につながっていると指摘しており、特に箱入り研修生にとっては、集団で留学していることによる不安感の軽減効果が高いことを示している。

3. 短期海外研修の内容

3.1 調査対象となる長野県立大学の短期海外研修

長野県立大学は、グローバルな視野で地域を創生できるリーダーの輩出を目指し、2018年度に創設された。大学の特徴の1つが、1年次全寮制である。学生同士の学び合い、助け合い、切磋琢磨を通じて主体性や社会性、コミュニケーション能力を養うことをめざしている。さらに、1年次に週4回の「英語集中プログラム」を行い、英語運用能力と英語コミュニケーション能力をバランスよく養成し、実践的な力、相手の話すことを聞いて内容の主要な点を理解できる英語力を身にさせる。

2年次に全員参加の短期海外研修を行う。1年次に培った力を基礎として、単なる語学研修ではなく、2年次以降本格化する専門分野の学びの動機づけ、視野の広がりを獲得することが目的である。異文化体験や英語によるプレゼンテーション、現地の学生や専門家との交流を通じて、英語運用能力や異文化対応能力だけでなく、自ら課題に立ち向かうたくましさの獲得をめざしているのである。調査対象となる学生は、グローバルマネジメント学部在籍者で、6つの受入れ大学のうち、米国ミズーリ大学コロンビア校に留学した学生である。

1年次には、米国で視察予定の組織に対応する長野地域の組織の訪問が義務付けられており、長野市役所の議会の視察やフードバンク信州の代表の講義等を受ける。2年次の1

8 箱入り研修生とは、研修参加学生は大学主催であるという安心感を得たうえで海外に出かける反面、多くの物理的・行動的制約を受けていたことを示している。

学期には、ミズーリ大学に引率する教員が、事前研修プログラムの授業（海外経営経済演習Ⅰ）の授業を行う。英語での自己紹介に始まり、視察先の組織について日本との違いをグループで英語を使って発表する。筆者は、この引率教員の一人であり、1年次の4学期の視察並びに2年次の1学期の海外経営経済演習Ⅰも担当した。

3.2 米国ミズーリ大学Asian Affair Centerにおけるグローバル・ビジネス・プログラム

4週間の海外研修のスケジュールは表1のようになる。平日の午前中（9：00～12：00）が「語学研修」で、午後（13：30～16：30）が「ビジネス研修」という位置づけである。ビジネス研修では、水曜日に大学の外にある組織の視察を行う。火曜日に事前学習を行い、木曜日に振り返りをして、金曜日に一週間の振り返りとしてグループ発表を行う。第2週目と第3週目の月曜日は、視察と関連する主題に関して外部講師が入り、パネルディスカッションが開催される。第4週目は、ジョブ・シャドウイングと呼ばれる企業での就業体験を行う。週末の内の1日は、ピクニックや主要都市への視察観光を行う。

「語学研修」と「ビジネス研修」のクラスは、日本の授業のように英語能力によるクラ

表1 海外研修のスケジュール表

		Sun Jun.02	Mon Jun.03	Tue Jun.04	Wed Jun.05	Thu Jun.06	Fri Jun.07	Sat Jun.08
Week ①	AM	朝 長野発 夜 コロンビア着	Orientation	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	Local Picnic and Ambassador Hangout
	PM			Preparation for Professional Site Visit①	Professional Site Visit① (City Government)	Feedback & Reflection/ Preparation for group presentation①	Group presentation① Weekly Reflection	
		Jun.09	Jun.10	Jun.11	Jun.12	Jun.13	Jun.14	Jun.15
Week ②	AM	Free day	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	Kauffman Foundatgion Site Visit & Cultural Activities	Free day
	PM		Panel Discussion① (City Planning)	Preparation for Professional Site Visit②	Professional Site Visit② (Start-up Event)	Feedback & Reflection/ Preparation for group presentation②		
		Jun.16	Jun.17	Jun.18	Jun.19	Jun.20	Jun.21	Jun.22
Week ③	AM	Outlet Mall Shopping	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	English for Global & Professional Communication	St. Lous Field Trip
	PM		Panel Discussion② (Supporting Venture Business)	Preparation for Professional Site Visit③	Professional Site Visit③ (Food Bank)	Feedback & Reflection/ Preparation for group presentation③	Group presentation③	
		Jun.23	Jun.24	Jun.25	Jun.26	Jun.27	Jun.28	Jun.29
Week ④	AM	Free day (Option : Field Trip)	English for Global & Professional Communication	Job Shadowing (Food Bank, Chamber of commerce, City office, Nursing home, REDI...etc.)		Reflection and Journaling (Re-entry Preparation)	Graduation Ceremony	朝 コロンビア発 翌日 Jun.30 長野着
	PM		Preparation for Job Shadowing					

ス分けは行わず、1クラスに2名の現地教員が入り、25名全員が一緒に授業を受けた。教員は、写真付きの名簿を見ながら、学生の名前を覚え、学生に発表をさせていく。

午前の「語学研修」は、English for Global Professional Communicationであり、ビジネス英語の習得が目的である。クラスを疑似的な会社組織とし、学生が予算を持ち、教師の授業や視察に対価を支払うという設定がされ、学生は、自ら目標を設定し、グループとしてその目標達成を求められる。そして、当初決定した目標に対する成果の達成度合いを投資家にプレゼンし、資金を調達する場が設定されている。例えば、ボキャブラリービルディングの目標設定がされ、それぞれの学生が新しい単語を覚えたら、クラス全員で共有し、新しく覚えた単語をジェスチャーや他の単語を使ってあてるクイズを行う。クイズに答えるとお菓子の報酬が与えられる。そして、毎日のクラスの中で、目標達成度合いの報告を求められるのである。教師は学生に、「Have a Confidence!」と語りかけ、次から次へ発言することを求める。文法はまったく修正されない。教師は、学生が言いたいことを、英語で質問を繰り返すことにより、理解しようとする。このように、授業は、能動的に学生が参加できるアクティブ・ラーニング方式がふんだんに取り入れられている。そして、授業が進むに従い、学生自らがプロジェクトを動かしていくよう教師が導いていくのである。図1は、チームリーダーの学生が、ホワイトボードに向かいプロジェクトをまとめている様子である。二人の教師は、後ろで全体のプロジェクトの進行を見守っている。



図1 プレゼンに取り組む学生達



図2 アンバサダーとの交流

午後の「ビジネス研修」は、水曜日にコロンビア市の市役所の議場やREDI (Regional Economic Development Institute) を視察する。例えば、REDIではベンチャー支援についての講義を受け、One Million Cupsというピッチイベントに参加する。他の参加者と一緒の席に着き、講演の後Q&Aセッションに入り、質問を求められる。教員である筆者や後述するアンバサダーの質問が呼び水となり、学生も質問を始めることになる。視察後のリフレクションでは、講演者が何を話したか十分理解できていなくても、他の学生からの情報や現場の雰囲気を感じたことを共有しながら、全体像を把握していくのである。

学生は、大学のキャンパス内の学生寮に宿泊する。大学は夏休みに入っており、夏の授業を取る学生だけしか寮に残っていない。寮には、キッチン、卓球台やサッカーゲームが

できる談話室、コインランドリーが整っている。大学のキャンパスのなかには、図書館、トレーニングジム、プールなどの室内運動施設に加え、バレーボールのコートもあり、学生はすべての施設を使うことができる。食事は、キャンパス内にカフェテリアがあり、提供されたミールカードを活用して、昼食・夕食ができる。キャンパスは、コロンビア市街地に隣接しており、市役所やREDIにも歩いていけ、市街地でショッピングや食事を楽しめる。学生は、寮からクラス、そして大学のキャンパス内の施設、そして市街地へと行動範囲を広げていくことができる。

現地学生との交流は、ボランディアで参加してくれているアンバサダーと呼ばれる現地の学生が中心となる。彼らは、オリエンテーションの後の歓迎会から参加し、水曜日の視察や月曜日のパネルディスカッション、学生による主なプレゼンテーション、週末のピクニックやセントルイス視察訪問などにも参加してくれる。図2に示すように、彼らは、積極的に学生に話しかけ、交流関係を広げていく。

4. 研究方法

4.1 M-GTAの採用

GTAとは、質的データを用いて、データに密着した分析から、事象を概念化していく質的研究法である。この研究アプローチは、1960年代に米国の社会学者であるグレーザーとスト劳斯により提唱されたものであるが、本稿では、木下のM-GTAを活用して分析をした。データを分析することを「コーディング」と呼ぶが、グレーザーとストラウスの提唱するデータの切片化はコーディングに多くの時間が取られ、切片化したデータのコーディングに注力すると解釈が難しくなる。一方、コーディングを疎かにすると質的データの客観性がなくなってしまう。M-GTAは、質的データのコーディングと深い解釈を同時に行いながら、そこから説得力のある概念を生成することに適した分析方法である。奥村（2017）が指摘するように、どのような要因が学生の意識変容を引き起こしたかを分析するには、学生との面接を通じた会話内容からコーディングと深い解釈を行うM-GTAは、適切な分析方法であると考えた。

4.2 データ収集の手続き

調査協力者は、この長野県立大学から、米国ミズーリ大学短期海外研修に参加した25名の2年生である。2018年に入学した長野県立大学の1期生であり、1年次は寮での生活を共有している。分析データは、2019年6月の4週間の短期研修の間、面接調査により収集した。面接調査は、引率教員2名が半構造化面接により実施した。最初に調査の目的を伝え、「留学している学生が日本でいたときより積極的になり、大きな変化をしている」という引率教員の感想を伝え、彼らが同じ認識をしているかを確認した。自分の変化については感じていない学生もいたが、すべての調査協力者が、一緒に来た学生に新たな変化が起こっていると認識していた。続けて、どのような変化がおこっているのか、その変化の

内容と要因、更に変化のプロセスについて聞いていった。質問は簡単に行い、漠然とした発言があった場合は、具体例を示してもらったようにした。変化の要因について自分の感じていることを次から次へ話してくれる調査協力者もいたし、質問に対して、明確な返答をすぐにできない調査協力者もいた。そんな場合は、他の学生が示した変化について質問を行った。調査の途中で、留学経験について確認した。面接内容は録音して、逐語録を作成し、ノートには筆者の感じたことをメモする程度にした。

4.3 分析方法

M-GTAにおけるコーディングは、面接記録したデータから「概念」を生成していく「オープン・コーディング」で始まり、概念間の関係性から「カテゴリー」を生成し、分析結果全体の論理的体系化を進める「選択的コーディング」で収束させていく。概念生成において「深い解釈」を行うには、データの中に表現されている人間の認識、行為、感情、そして、それらが関係している要因や条件などをデータに即して検討していくことが重要となる（木下2003：138）。M-GTAのコーディング特性は、質的データの客観性を理解するのに重要である。コーディングの鉄則は、解釈によって生成された全ての概念が常にデータと直接対応関係が確認できるようになることである。図3で示したように、データとその解釈した概念とは一定の距離にあり、具体的な作業は、「研究する人間」がデータのある個所を解釈する。データに密着した（Grounded on Data）分析を行うが、ひとたび概念ができれば、データは捨て、視点をデータ側から概念側に切り替える。データを重要視しながらも、その後はデータから分離するのである。M-GTAは、後述する分析ワークシー

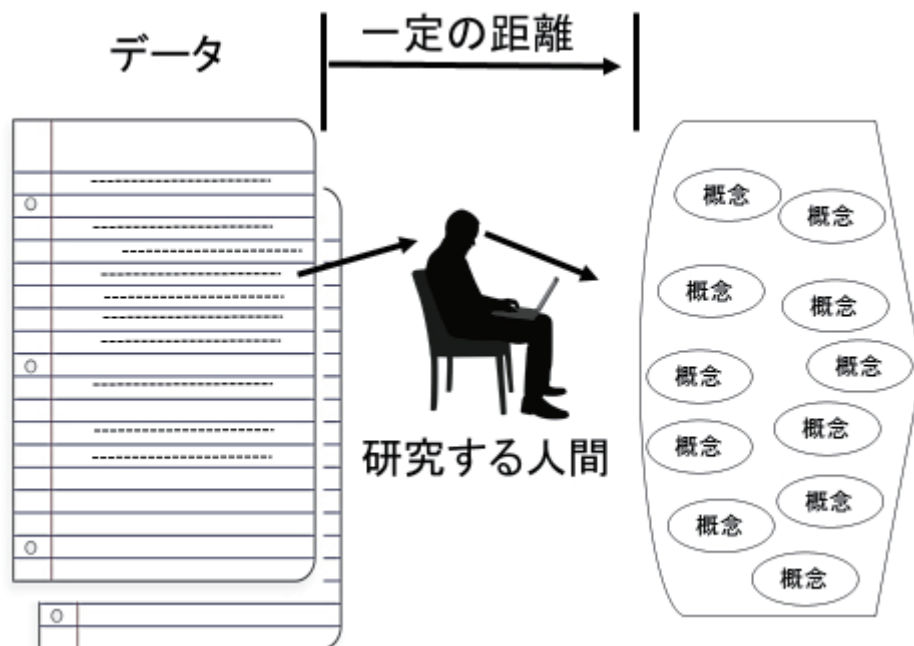


図3 M-GTAのコーディング特性

出所：(木下2003：151) から抜粋

トを活用し、データ本体からの分離を行う。また、「研究する人間」の分析上の視点となる「分析焦点者」の設定も重要となる。この研究においては、民間人との協働を進めている職員の視点を「分析焦点者」とし、分析焦点者にとってどういう意味になるだろうかという視点でデータを解釈した。ただ、分析焦点者を視点として経由するけれども、意味の解釈は分析者が責任を持つということになる（木下2007：158-159）。

4.4 分析方法（概念生成、概念のカテゴリー化）

25名のデータを概観し、一番データが豊富な協力者から分析を始めた。木下が提唱する「分析シート」を活用して、面接データの文章、段落や文の中で意味あるものを抽出し、その部分（「具体例」）を抜き出して、具体例から読み取れる「概念の定義」、「概念の名称」、分析の際の「理論的メモ」を1つの概念について1つの分析シートに書き込んでいった。

表2に【グループを通じた同世代からの学び】という概念の生成に使った分析ノート例を示した。この概念は、調査対象者⑨の「日本人同士で来ていて、その中にアメリカ人も交じって大勢での英語のコミュニケーションができるというのは大きなメリットと思う。1対1で話すときと大勢で話すときはアンテナの張り方が違う。話の流れも追っていか

表2 分析シート例：【グループを通じた同世代からの学び】という概念の生成

概念	⑦グループを通じた同世代からの学び
定義	教室で学ぶ英語学習ではなく、実際の現場でグループでの会話を通じて同世代の対話を聞いて、英語を学ぶこと
具体例	<p>⑩アンバサダーとかに話しかけられて、やっぱり聞き取らないと会話が続かないじゃないですか。授業と違って質問されて黙っていると会話は成り立たない。何か話していく必要がある。</p> <p>④向上したのは、他の人が会話することを聞いていて、こんなレスポンスもあるみたいな。他の人の会話を聞いていて、日本人とアンバサダーとか、アンバサダー同士とか、全部聞こえてくるので。</p> <p>⑥アマンダやピーターの授業よりも、バス（アンバサダーとの）での会話の方が伸びている。</p> <p>⑨日本人同士で来ていて、その中にアメリカ人も交じって大勢での英語のコミュニケーションができるというのは大きなメリットと思う。1対1で話すときと大勢で話すときはアンテナの張り方が違う。話の流れも追っていかないといけないし、話に割り込んでいくタイミングもはからないといけない。</p> <p>⑩やっぱり3名いると安心感はありますね。「やべえ、わかんなかった」となっても後から助けてくれる可能性がある。</p> <p>⑭グループの方が話しやすい。むこうも団体で来るので、結構話が終わらないで、話が続く</p> <p>③たぶん相手は相手、自分は自分ってそういう前提があるからこそ、違うからこそ言わないとわからない。伝えないとお互いに理解もできないからってということもあって。</p> <p style="text-align: center;">（その他は省略）</p>
理論的メモ	何度か海外へ行った経験のある学生でも、1対1の会話は経験していたが、集団のなかでの会話からの学びは初体験であった。同世代なので話したいという動機づけも高く、英語での対話法について学びが促進される。

ないといけないし、話に割り込んでいくタイミングをはからないといけない」という具体例からヒントを得た。「授業と違って質問されて黙っていると会話は成り立たない」や「むこうも団体で来るので、結構話が終わらないで、話が続く」という具体例が示すように、学生同士は対話を続けたいというモチベーションが高く、英語習得能力の向上につながっているのである。

概念の生成と並行して、生成された概念間の関係を分析しながら、カテゴリーを生成していくプロセスを図4に示した。図4の概念生成プロセスにおいて、分析ノートの内容を、その具体例と具体例の解釈が正しいのかを確認しながら、概念の廃棄、名称変更や統合を行い、何度もカテゴリーと変容プロセスのモデル化の見直しをしていった。

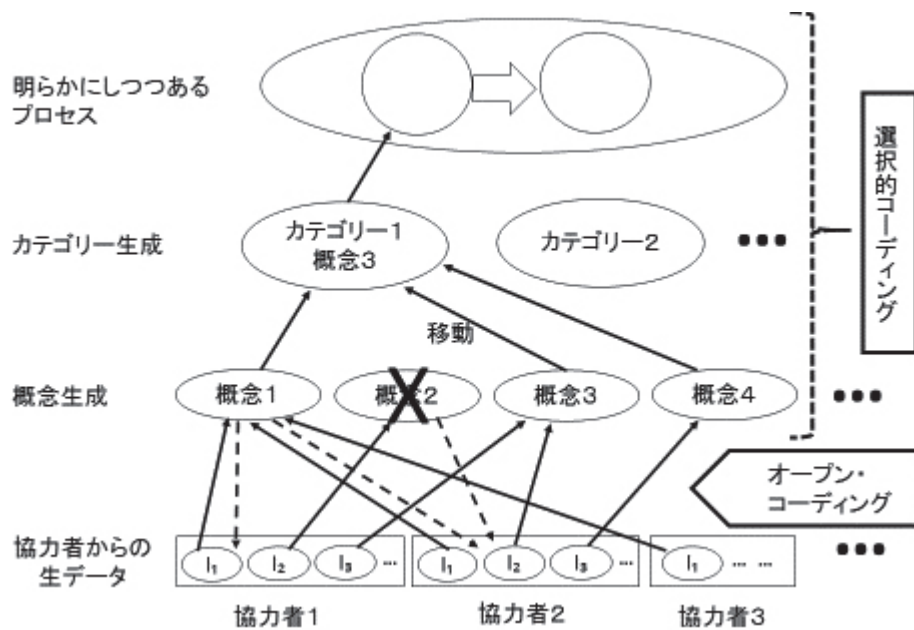


図4 概念生成プロセス

出所：(木下2003：184) から抜粋し、筆者が加筆

4.5 調査結果

最終的には、表3の14の概念に収斂され、14の概念は、7つのカテゴリーとして抽出され、またその関係性から3つのカテゴリーグループに収束した(表3)。

表3 生成された概念・カテゴリー・カテゴリーグループ

概念グループ	カテゴリー	概念
学生の意識の変容	異文化に対する不安と緊張感	異文化に対する不安と緊張感
	自己効力感の形成	異文化に順応していく楽しみ
		日本人としてのアイデンティティの認識
異文化からの学び	クラスにおける学び	更なる学習意識の芽生え
		楽しい場への仲間入り
		チャレンジ精神の芽生え
		アウトプットを通じた主体的学び
	実社会における学び	グループを通じた同世代からの学び
安全地帯で得る安心感		五感で感じる実社会の学び
	異国の地域コミュニティとの出会い	非日常にいるという実感
		フレンドリーな現地人との出会い
	同胞意識の形成	同胞意識の形成
	宇宙船隊員間の信頼感の形成	宇宙隊員間の切磋琢磨
	宇宙隊員間の支え合い	

カテゴリーグループは { } で表現し、概念グループ別に、概念名は []、カテゴリー名は 《 》 を示し、概念を得た具体例を 「 」 を加えながら、概念の内容と全員参加の短期海外研修における意識変容のプロセスを概要していく。

4.5.1 カテゴリーグループ {異文化からの学び}

《異国の地域コミュニティとの出会い》は、異文化での学びを促進する役割を担っているカテゴリーである。毎朝起きてから見る世界は、日本とは違う光景であり、「気持ちが変わったのはやっぱり環境ですね。朝起きて外見ても、日本と今まで生活していた環境とまったく違うわけです。ここは違うんだってなるんで、そこが一番気持ち的にも」という【非日常空間にいるという実感】がある。街に出ると【フレンドリーな現地人との出会い】がある。それは、「めっちゃ人が優しくて暖かい。すごくいい雰囲気。予想とだいぶ違う」、「街で店員に道を聞いたら、店長に話してOK貰って案内してくれた」、「こちらの方がみんな優しい気がする。あったかい気がするのである」というような具体例で示された。《異国の地域コミュニティとの出会い》は、学生が日本社会で培ってきた常識から距離をおき、新しい考え方を受け入れやすい環境を提供してくれるのである。

授業での学びを表すカテゴリーである《クラスでの学び》は、【楽しい場への仲間入り】、【アウトプットを通じた主体的な学び】、【チャレンジ精神の芽生え】という概念から構成される。授業は、「めちゃくちゃアクティブで、積極的で。ようこそみたいな感じで言ってくれたり」という具体例から【楽しい場への仲間入り】という概念を抽出した。「ピーター先生たちの授業は、発言している人のことを、どんなにしょうもないことを言っても絶対にきいているんですね。他人のコメントをどれだけしょうもないことでも、どれだけ小さいことでも、理解して大切にしているっていうのが違いの1つですね」という具体例からは、学生一人ひとりに参加を促す先生の様子が伺われる。「こちらでは、結構ほめてくれるので。自分がたいしたことをしていないなあと思っても、よくやったといってもら

えるので。ほめられることによって積極的になれる」という具体例から、参加したことを褒められ、発言する人が増え、クラスは活発な学び場に変わるのがわかる。

授業では頻繁に学生による発言やプレゼンが求められる。学生は、「不完全なスライドのプレゼン見せたら、それで十分やと言われて、それよりちゃんと話す練習しなさいと言われて。スライドの準備より、話す練習をするのが大切なんだと思って」という具体例が示すように、何を学んだかを限られた時間でまとめ、効果的なメッセージを伝えらえるかをいつも求められており、【アウトプットを通じた主体的な学び】が促進していく。

「ピーターさんからもアマンダさんからも、間違えは気にせずどんどん喋った方がいいといわれますね。やっちゃえばいけるみたい。もちろん緊張はするんですけど、前よりは全然平気になりました。人前に出るのが」という具体例が示すように、授業を受け、自信を持って積極的に発言するようになっていくことがわかる。「自分に自信がない方なんだけど、こちらに来たら、自分の意見を言ったり、自分で自信を持って行動してくださいと要求されることが多くて、自分に自信をつけることができるようになった」という具体例もあり、【チャレンジ精神の芽生え】という概念とした。この授業を通じて、アメリカ流のチャレンジ精神が生まれてきていると感じたからだ。

研修の視察や授業外の活動を通じた《実社会における学び》というカテゴリーは、【五感で感じる実社会の学び】と【グループを通じた同世代からの学び】という概念で構成される。【五感で感じる実社会の学び】は、実際の現場を訪問することにより、英語では聞き取れない部分があっても、学生が五感で現場を感じる具体例から得た概念である。例えば、「REDIとか見ている、すごくラフじゃないですか。あんな普段着で、椅子がパーツと並んでいて、コーヒー飲みながら『それ何?』みたいな感じで質問できる」や「日本の市議会も覚えていますよ。日本の議員さん寝てました。全員じゃないけどこの人寝てるなって。後半は文章を読んでいるだけ。なんかやる意味あるのかなあって。アメリカはすごい。7人で喋って、市民の方も参加できるっていうのが本当にすごい。市民の声を取り入れているなって感じました」という具体例である。

【グループを通じた同世代からの学び】という概念は、表2の分析ノートで説明した。「向上したのは、他の人が会話することを聞いていて、こんなレスポンスもあるみたい。他の人の会話を聞いていて、日本人とアンバサダーとか、アンバサダー同士とか、全部聞こえてくるので」の具体例にあるように、アンバサダーと一緒に視察や遊びをするなかで、学生は、他の日本人学生やアンバサダーからコミュニケーションの方法を学んでいく。「アンバサダーとかに話しかけられて、やっぱり聞き取らないと会話が續かないじゃないですか。授業と違って質問されて黙っていると会話は成り立たない。何か話していく必要がある」の具体例が示すように、授業の中で教えられる英語ではなく、【グループを通じた同世代からの学び】は生活のなかで必要なコミュニケーションの方法を学生自ら主体的に学ぶ機会を提供してくれるのである。

4.5.2 カテゴリーグループ {安全地帯にいる安心感}

{安全地帯にいる安心感} というカテゴリーグループは、《同胞意識の形成》と《宇宙船隊員間の信頼感の形成》のカテゴリーから構成される。1年間の大学寮生活と2年の海外経済経営演習Ⅰという授業を通じて、データ提供者たちのなかには《[同胞意識の形成]》がされていた。彼らは、「一年間寮で一緒に過ごしてきた友人がいると安心」という意識を持ち、「自己紹介だとか、プレゼンを通じて、大体どういう人がアメリカに行くというのがわかる」とか「海外経営経済演習で一緒に取り組んだりしてお互いのキャラクターや潜在的なものを含めた得意・不得意を知っているから、あの短い時間であのクオリティのプレゼンをつくりあげることができた。全く知らない同士だったら、あそこまではうまく協力できない」と感じていたのである。

《宇宙船隊員間の信頼感の形成》は、【宇宙船隊員間の支え合い】と【宇宙船隊員間の切磋琢磨】の概念で構成されている。ミズーリ大学に到着すると、データ提供者は大学寮に入る。この寮で共同生活をしながら、毎朝寮を出て探検を始める。寮に戻って来た彼らは、外部での経験を共有し始める。「わからないことも聞けるし、ずっと一緒にいれるし、心の支えになりますね。わからなかったら聞けるし、これなんていっているのって、それで教えてもらって」の具体例からわかるように、外に出ると不安や聞き取れないこともたくさんあるが、寮に帰って情報交換している様子わかる。「グループだから心理的な安心感もあって。安心感で授業にアクティブになるとか。例えば何かこうしてことをしてみようとか。その分のストレスがない。余裕があるので他のことができるのかな」というように、寮に同級生がいることが心の支えとなり、新たな挑戦を可能にするのである。

一方では、データ提供者は「みんなすごいなあと思う。おなじレベルになりたいな。こんなんじゃないだめだなあ」と考えている。友人が成長しているのを意識して、「他にめっちゃ喋っている人がいたら、じゃ自分も喋ろうと。同じ日本人でいきなりアメリカに来て、みんな怖いんだろうけど、あの人が頑張ってるから自分もやってみようって。一歩踏み出しやすい」というような具体例で示される【宇宙船隊員間の切磋琢磨】が起り、さらに学習が促進される。このような {安全地帯にいる安心感} は、海外へ初めて短期留学する学生にとっては、《異文化からの学び》の促進には欠かせないものになっているのである。

4.5.3 カテゴリーグループ {学生の意識の変化}

カテゴリーグループ {学生の意識の変化} は、《異文化に対する不安と緊張感》と《自己効力感の形成》というカテゴリーから構成される。「最初はいろいろ不安だったし緊張してましたからね。2日くらいまでは、帰りたかって思っていました」、「海外経験は一回もないので、そこは本当に不安だったんですけど」、「最初は本当に不安でしたよ。何しゃべろうとか。最初の3日間くらいぼろぼろでなにも喋れなかった」という具体例からも留学当初はかなりの【異文化に対する不安と緊張感】を抱いていた様子が伺われる。「休み時間なんか大事なんで、えんえんと英語聞いていたらちょっと頭狂っちゃうんじゃない

かなって。ほんと初日の方はそうでしたね。英語英語英語で、やばい。もう英語聞きたくないと言っていました」というように、かなりのストレスを受けているのがわかる。「最初めちゃくちゃ疲れて。もう帰って眠たすぎて、10時には連絡しなければならないのに、一回忘れて連絡できませんでした」や「後はやっぱり寝不足といますか。12時に寝て7時間くらい寝ても疲れが残っている」具体例からも、《異文化からの学び》が挑戦的で、学生が緊張感からくる疲れを経験している様子がわかる。

{学生の意識の変化} のなかで、【異文化に適応していく楽しみ】、【日本人としてのアイデンティティの認識】、【さらなる学習意識の芽生え】という3つの概念を抽出され、その3つの概念が導く結果として《自己効力感の形成》というカテゴリ導いた。《異文化からの学び》を通じて、【異文化に適応していく楽しみ】が生まれていく。「英語で話すことを楽しいと思えることができる。街の人たちとか、私たちの英語のレベルをまったく知らない状態で話が伝わったときに嬉しい」をいう具体例が示すように、「なにか伝わっているかな」という感じがいいな」と少しずつ自信を深めていくのである。

そして、「僕が思ったのは、全然日本人の方がやさしくないなって。優しさの表現が違うとか。日本人は心配りとか、サービスとかのやさしさはあるんですけど。人間の基本としての人に対する愛みたいなのは、日本人の方がいないんじゃないかなって」という具体例が示すように、【日本人としてのアイデンティティの認識】も生まれて来ている。そして研修も最後に近づいてくると、「ここで学んだことを日本で活かさないとここに来た意味が薄くなる。折角学んだことを活かして勉強したい」と考える学生や、「もう一回留学したいという気持ちになった。1か月は短かったなあ」と【さらなる学習意識の芽生え】につながっていくのである。

《自己効力感の形成》は、最初は【異文化に対する不安と緊張感】を持っていたデータ提供者が、《異文化からの学び》を得て、新たなことにも挑戦できるという自信を深めていく様子表現したのである。

5. 結論と考察

日本の高等教育機関で、海外研修、海外実習、ボランティア、インターンシップ、スタディツアー等の様々な短期の海外研修プログラムが開発・実施され、このような様々な海外短期研修プログラムの教育効果が明らかにされている。語学研修が中心に構成されるプログラムにおいては、学習用語の運用能力、異文化対応力、学習意欲の向上等の教育的効果を明らかにしているし、語学研修のないフィールドワーク体験は、課題解決力の向上という教育的効果を明らかにしている。本研究は、語学研修を中心に構成した海外研修を対象とし、その教育的効果を多面的に捉え、どのような要因が学生の意識の変容を引き起こしたのかを分析した。

表3でまとめた概念・カテゴリ・カテゴリグループの関係を、全員参加の短期海外研修における学生の意識の変容プロセスとして図式化したのが、図5の結果図である。短

期海外研修した学生は、図の下段にあるカテゴリーグループ {異文化からの学び} から影響を受けながらも、上段のカテゴリーグループ {安全地帯で得る安心感} を得て、学生の意識が変容していく様子を、中段にあるカテゴリーグループ {学生の意識の変容} に示した。それぞれのカテゴリーグループ別に考察を加えたい。

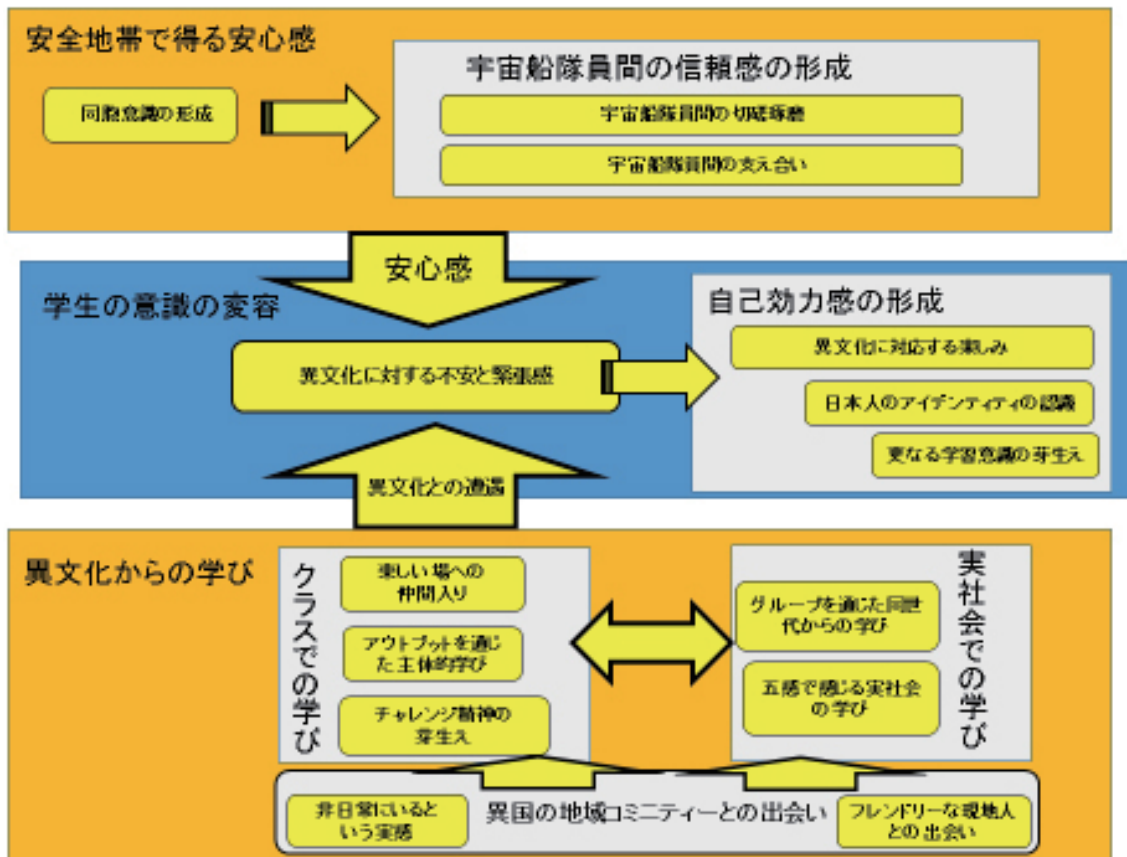


図5 結果図 全員参加の短期海外研修における学生の意識変容プロセス

海外研修においては、クラスにおける授業だけでなく、海外という非日常の世界に出会い、さまざま新しい体験をする。分析の結果、そのような {異文化からの学び} を7つの概念として生成した。それぞれの概念は、学生の意識に変化を与える要因となる。これらの概念を《クラスでの学び》、《実社会での学び》、《異国の地域コミュニティとの出会い》の3つのカテゴリーに分類して、その関係性に注目した。これらは独立した学びではなく、相乗効果を創出する学びとなる。《異国の地域コミュニティとの出会い》があるからこそ、《クラスでの学び》や《実社会での学び》が促進される。《クラスでの学び》があるからこそ《実社会での学び》が促進され、《実社会での学び》があるからこそ、《クラスでの学び》が促進されるのである。

海外研修と一緒に来た学生の影響を3つの概念として生成し、これらを {安全地帯にいる安心感} としてまとめた。奥山は、長期留学においては、日本から離れることへの強い不安感が、海外留学の阻害要因となることを指摘している。工藤は、短期研修における「学

習言語でのコミュニケーション困難の克服過程」の「困難の緩衝行動」の1つとして、「他の研修生との接触」を挙げている。研修当初1週間の寮生活は、学生の不安感を軽減していたのである。このような学生間の強い横並び意識や同調意識の存在が、留学に与える影響は大きいのである。本研究では、{安全地帯にいる安心感}が、学生の不安の解消だけではなく、学習意欲の向上につながることを明らかにできた。さらに、本研究では、学生間の強い横並び意識や同調意識の存在は、【グループを通じた同世代からの学び】という学生間の学び合いにもつながっていることも確認できた。

{学生の意識の変容}においては、短期研修の教育的効果の最終成果として、3つの概念から構成される《自己効力感の形成》が生成できた。奥山(2017)は、バンデュラが提案した自己効力感を生み出す4つの要因を引用して、長期留学の教育的効果として自己効力感の形成プロセスの存在を確認している。本研究で生成した《自己効力感の形成》を、この4つの要因で確認してみたい。《クラスでの学び》において、教員は、学生に「言語的説得」を行いながら、学生が発言する度に、「よくやった」と褒め、「遂行行動の達成」を感じさせていた。クイズなども取り入れ、クイズを当てると菓子の報酬がもらえるというような「情動的歓喜」もある。さらに、この《クラスでの学び》は「代理的経験」であり、この経験を経てクラスから街に出てインタビューをさせるなど、新たな挑戦をさせている。即ち、この短期研修には、バンデュラが提案した自己効力感を生み出す4つの要因が組み込まれていたのである。上述した《クラスでの学び》を得ながら、《異文化に対する不安と緊張感》と闘い、日本人としてのアイデンティティを確認し、少しずつ異文化に適応していき、さらに高みを目指しているデータ提供者には、《自己効力感の形成》が生まれているのである。

本研究においては、「宇宙船で新しい惑星に着いた学生の新しい体験を通じた学びのプロセス」という新惑星探検のストーリーの構築に至ることになった。他の2つの質的研究の研究と共通するのは、困難と遭遇した学生がその困難を乗り越え、成果を出していくという学生の成長プロセスを描いている点である。本研究との大きな違いは、同じ大学からの全員参加で大学の寮に滞在する短期研修の学生を対象とできた点である。奥山は、個人の長期留学の学生を対象とし、工藤はホストファミリーに別々に滞在する短期研修した学生を対象としたので、他の日本人学生からの影響に関する概念に違いが生まれた。本研究のデータ提供者は、新しい惑星と一緒に探索に来た宇宙隊員のように、1年以上の研修を日本で行い、アメリカに来て探索生活を始める。そして、惑星の探索で得た日々の出来事を共有し、学び合う仲間となるのである。このように、他の日本人研修生からの影響は非常に大きく、さらに現地のボランティアであるアンバサダーとの交流もデータ提供者の学びに強い影響を与えており、アイデンティティを形成する青春期には、このような同世代との交流が重要であることが明らかにできた。

短期研修の教育的効果の向上には、その要因となる概念と概念間の関係を理解することに加え、その効果を高める工夫も重要となる。箕曲は、海外スタディツアーの事前研修や

体験学習のなかに、「深い関与」を促す3つの条件を導入し、効果的な学習成果に結びつけたと報告している。本研修において、「深い関与」を促す3つの条件が含まれているかを検証してみたい。1つ目の条件は、「課題が適度にチャレンジングなもの」である。本研修は、留学期間に、クラスにおける授業から外部視察に出かけ、街角インタビューを行い、最後に就業体験と、成長を伴い新たなチャレンジを求めており、この条件を満たしている。2つ目の条件は「コミュニティの感覚」は、本研究で生成した《宇宙船隊員間の信頼感の形成》や【楽しい場への仲間入り】の概念が示すように、データ提供者はコミュニティの一員であることを感じていた。3つ目が「学生がホリスティックに学べるように教えること」についても、【五感で感じる実社会の学び】の概念は、言葉だけでなく、身体性を通じた学びを示している。このように、米国の研修は、「深い関与」に必要な3つの条件を満たしていることが確認できた。データ提供者の大きな変化は、このような「深い関与」の存在も大きい。ただ、議会視察などの事前研修の現場活動においては、「深い関与」に必要な3つの条件は確認できないので、さらなる改善を検討していきたい。

海外研修の引率をする筆者が、自ら面接調査を行うことで、誘導が行われた可能性がないかという懸念はある。研究者という立場を明確にし、調査を行ったが、客観的な面接が完璧にできたとは言い難い。また、研究の主観性が排除できていないかという懸念もある。ただ、25人分の膨大な逐語訳のデータを抽象的に解釈し、論理的に読み取りを行い、意味づけることがM-GTAの目的であるので、個人に関連する事例分析のように、個人的な関係が分析に及ぼす影響は少ないと考えられる。また、25名のデータのうち、数名の海外留学体験のある学生については、データの対象から除くべきであったとの指摘も考えられる。25名のデータの分析のうち、データが豊富な協力者は、初めて海外に来た学生で、自ら大きな変化を感じていたが、数名の海外経験がある学生はデータが少なく、自らは変化を感じていない学生もいたからである。ただ、彼らも全体としての変化は感じており、彼らからは、その海外経験から来る深い分析に基づくデータが得られた。【グループを通じた同世代からの学び】は、彼らのデータなしには生成できなかった概念である。今後、今回の短期留学経験が、どのように彼らの学びに長期的なインパクトを及ぼしていくのか、追跡調査をしていきたい。

海外短期研修が増加するなか、本研究が海外研修プログラムの教育的効果の評価や新しいプログラムの開発の一助となれば、幸いである。

参考文献

- 奥山和子（2017）留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス、神戸大学、大学教育推進帰国『大学教育研究』第25号、pp.83-101
- 川内規会（2006）「大学生の異文化対応と心理的不安の変化に関する研究」『青森保険大学雑誌』7巻1号、pp.37-43
- 木村啓子（2011）「短期海外研修プログラムの効果と役割」ウェブマガジン『留学交流』

- 12月号、Vol.9、pp.1-7
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ質的研究への誘い』弘文堂
- 木下康仁（2005）『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂
- 木下康仁（2007）『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンディド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 工藤加宏（2011）短期開学研修プログラムの教育的効果とは—再考と提言— ウェブマガジン「留学交流」12月号
- 工藤和宏（2009）「日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果—グラウンディド・セオリー・アプローチに基づく一考察—」『スピーチ・コミュニケーション教育』Vol.22、pp.117-139
- 小林文生（2013）「短期海外研修による教育的効果の再検討」一橋大学『人文・自然研究』7、pp.162-185
- 佐々木直子（2017）「短期語学留学プログラムによる効果の検証」『電気通信大学紀要』29巻1号、pp.1-9
- 田中真奈美（2009）「日本人大学生の短期海外留学の教育的効果の分析」東京未来大学科学研究費助成金研究成果報告『幼児・自動における未来型能力育成システムならびに指導者教育システムの開発』第6章第2節 www.tokyomirai.ac.jp/research_report/essay/pdf/6-2.pdf
- 渡部留美（2009）「短期海外研修のプログラム作りと課題—大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実践報告」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生留学生交流』第13号、pp.75-82
- バークレー、E.F.（2015）、「関与の条件—大学授業への学生の関与を理解し促すということ」松下桂代・京都大学高等教育研究開発推進センター [編著]『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を進化させるために』勁草書房、pp.58-91
- 箕曲在弘（2017）「海外スタディツアーにおける授業づくり—アクティブ・ラーニングにおける『関与』を中心に」『大学における海外体験学習への挑戦』株式会社ナカニシヤ出版、pp.26-42
- Bandura A. (1977) “Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral Change” *Psychological Review* 84(2), pp.191-215
- Erikson EH: *Identity and the life cycle* International Universities Press, New York, 1959 (エリクソン (2001) 『アイデンティティとライフサイクル』(訳) 西平直、中島由恵、誠信書房)
- Kitano, K.S. (1993) Preparation for and results of a short-term overseas study program in the United States, *Bulletin of the Institute for interdisciplinary Studies of Culture*, 10, pp.107-118

エマソンとヤコブ・ベーム

—コールリッジを媒介として—

高梨 良夫

1 はじめに

『長野県短期大学紀要』第73号（2019年3月）においては、ドイツの神秘思想家ヤコブ・ベーム（Jacob Böhme, 1575-1624）の生涯とキリスト教神秘主義思想に対するエマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882）の共感を指摘し、また両思想家の思想の類似点と相違点についての考察を試み、顕著な類似性が見出されると論じた。しかしながら同時に、19世紀のニューイングランドに生きたエマソンと16世紀後半から17世紀前半のドイツに生きたベームとの時代と地理的距離の隔たりを考慮すると、ベームの根幹的思想は、19世紀に大西洋を隔てたエマソンに直接的影響を与えたというよりも、ヨーロッパにおいてベームの影響を強く受けたイギリス・ロマン主義の詩人・批評家コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）、さらにドイツ観念論哲学の思想家シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854）などを介して、エマソンにも影響が及んだ可能性が大きいのではないかと指摘した。それ故本稿においては、ベームのコールリッジに対する影響、さらにコールリッジのエマソンに対する影響について考察することを通じて、ベームの思想が如何にしてコールリッジを媒介としてエマソンに影響を与えたのかについて考察してみる。

2 コールリッジを媒介としたベームの思想のエマソンに対する影響の概観

2-1 コールリッジに対するベームの影響

コールリッジはベームから多大な影響を受けたことを記している。¹ コールリッジは

1 ベームとコールリッジについては、高山信雄『コールリッジとドイツ文学者』（こびあん書房、1993年）、28-53頁；「コールリッジとドイツ文学（二）—コールリッジとヤコブ・ベーム—」『法政大学教養部紀要』第57号（1986年）、17-42頁などを参照。またベームの思想については、南原実『ヤコブ・ベーム—開けゆく次元—』（以下『ヤコブ・ベーム』と略記）（哲学書房、1991年）、岡部雄三『ヤコブ・ベームと神智学の展開』（岩波書店、2010年）、31-102頁などを参照。

『文学的自叙伝』(*Biographia Literaria*, 1817) 第9章で、自らの著作の内容とシェリングの『自然哲学への理念』(*Ideen zu einer Philosophie der Natur*, 1797)と『超越論的観念論の体系』(*System des transcendentalen Idealismus*, 1800)における思想との類似について、「私の作品にシェリングとの思想の一致、あるいは表現の類似さえあったとしても、それは必ずしもシェリングから文節を借用した証拠とか、着想を得た証拠にはならないということです。…最も明らかな類似点の多くは、いや実際のところ、そのすべての主要な基本的考えは、このドイツ人哲学者の書物を一頁も見ないうちに私の心に生まれ、熟成したのです。さらに嘘偽りなく断言しますが、それはシェリングのもっと重要な作品が書かれる以前、少なくとも公表される以前のことでした」²と記し、シェリングから剽窃し、着想を得たのではなく、シェリングの作品の公表以前に、基本的な考えは自らの心の中で熟成していたものであると弁明している。さらに「シェリングの体系とベーメのある種概念との一致に関して、シェリングは単なる偶然の一致であると断言していますが、私自身が得た恩恵はもっと直接的なものでした。彼はただ共感の思いをベーメに寄せればいいだけですが、私はベーメに恩義があるのです」³と記し、シェリングは自らの思想とベーメの思想との一致は単なる偶然に過ぎないと述べているが、自分はベーメから直接的な影響を受け、ベーメは自らの思想形成に極めて重要な役割を果たしてきた思想家であったことを告白している。

コールリッジは、ベーメなどの神秘家は無学で卑しい職業に就いていたという理由で、知識階級の人々や聖職者達から迫害を受け、狂信者や夢想家の烙印を押されてしまったと、ベーメを真に神の創造的靈感に導かれ、概念的分析的認識を超え、自然万物と人間の魂の深淵を探求した天才であると擁護しながら、次のように記している。

ベーメの妄想は、実に数多く粗野なものであり、敢えて独力で思索したこの貧しい無学な靴職人を、学者たちが打ち負かすに十分な機会をしばしば与えてしまったのでした。しかし、これらの妄想は、彼には知的訓練がすべて完全に欠落していたことから、そしてまた合理的な心理学を彼が知らなかったことから、予期され得るものであったことは念頭に置くとしても、そうした欠点は当時の

2 東京コールリッジ研究会訳『文学的自叙伝—文学者としての我が人生と意見の伝記的素描—』(以下『文学的自叙伝』と略記)(法政大学出版局、2013年)、136頁; S.T. Coleridge, *The Complete Works of Samuel Taylor Coleridge*, ed. W.G.T. Shedd (New York: Harper and Brothers, 1864, reproduced by Rinsen Book co., Kyoto, 1989), vol. 3: *Biographia Literaria; or, Biographical Sketches of my Literary Life and Opinions*(以下 *BL* と略記), pp. 263-64: "... an identity of thought, or even similarity of phrase, will not be at all times a certain proof that the passage has been borrowed from Shelling, or that the conceptions were originally learnt from him. ... many of the most striking resemblances, indeed all the main and fundamental ideas, were born and matured in my mind before I had ever seen a single page of the German Philosopher, and I might indeed affirm with truth, before the more important works of Shelling had been written, or at least made public."

3 同上書、137頁; *Ibid.*, p. 264: "The coincidence of Shelling's system with certain general ideas of Behmen, he declares to have been *mere* coincidence; while *my* obligations have been more direct. *He* needs give to Behmen only feelings of sympathy; while I owe him a debt of gratitude."

最も学識のある神学者たちにも共通する欠点であったことを忘れてはいけません。… ヤコブ・ベーメは、最も厳密な意味において、熱中家 (enthusiast) でした。つまり、熱狂家 (fanatic) とは単に違うというだけでなく、正反対として区別される熱中家だったのです。… 学問の真の深みや内奥の中心 … に到達することは、無学な人たちや低い身分の人たちに委ねられてしまったのです。果てしない憧れや生来の満ちあふれる精神が彼らを突き動かして、万物の内にある生きた基盤の探求へと駆り立てたわけです。⁴

2-2 エマソンに対するコールリッジの影響

コールリッジがエマソンの思想形成に多大な影響を与えたことは多くのエマソン学者が認めている。ウィッチャーは、『自然論』(Nature, 1836) に直接的な知的影響を与えた二人の人物はコールリッジとスウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg, 1688-1772) である。… エマソンに影響を与えたのは「老水夫行」や「クブラ・カーン」などの詩を詠んだ詩人としてはなく、『文学的自叙伝』の折衷的哲学者、及び『政治家必携の書』(The Statesman's Manual, 1816)、『友』(The Friend, 1809-10)、『省察の助け』(Aids to Reflection, 1825) などを執筆した英国国教会の説教師としてのコールリッジであった。… エマソンの思想形成における触媒としてのコールリッジの重要性はいくら強調してもし過ぎることはない⁵、またカーペンターは、「1929年以降の7年間コールリッジは恐らくエマソンの文学生活に対して最も重要な影響を与えた唯一の人物であった」⁶と記している。ラスクの『エマソン伝』によると、エマソンは1929年の秋から冬にかけてコールリッジの著作を熱心に読んだ。⁷ この頃叔母メアリ (Mary Moody Emerson, 1774-1863)、兄ウィリアム、弟エドワードに宛てた手紙には、コールリッジの『友』、及び当時バーモント大学学長のマーシュ (James Marsh, 1794-1842) が編纂した『省察の助け』を非常に興味を持って読んでいることが記されている。⁸ 次はエマソンの人格形成に大きな影響を与えた叔母メアリに宛てた、1829年12月10日の手紙である。

4 同上書、127-128頁；Ibid., pp. 249-251: “Many, indeed, and gross were his [Behmen's] delusion; and such furnish frequent and ample occasion for the triumph of the learned over the poor ignorant shoemaker, who had dared think for himself. But while we remember that those delusions were such, as might be anticipated from his utter want of all intellectual discipline, and from his ignorance of rational psychology, let it not be forgotten that the latter defect he had in common with the most learned theologians of his age. ... Jacob Behmen was an enthusiast, in the strictest sense, as not merely distinguished, but contra-distinguished, from a fanatic. ... Therefore the true depth of science, and the penetration to the inmost centre, from which all the lines of knowledge diverge to their ever distant circumference, was abandoned to the illiterate and the simple, whom unstilled yearning, and an original ebullency of spirit, had urged to the investigation of the indwelling and living ground of all things.”

5 Stephen E. Whicher, ed., *Selections from Ralph Waldo Emerson* (Boston: Houghton Mifflin, 1957), p. 471.

6 Frederic I. Carpenter, *Emerson Handbook* (New York: Hendricks House, 1953), p. 223.

7 Ralph L. Rusk, *The Life of Ralph Waldo Emerson* (New York: Columbia Univ. Press, 1949), p. 143.

8 Ralph L. Rusk and Eleanor M. Tilton eds., *The Letters of Ralph Waldo Emerson*, 10 vols. (New York: Columbia Univ. Press, 1939-95), vol. 1, p. 291, Jan. 4, 1830.

私はコールリッジの『友』を大変興味深く読んでいます。…しかし何という生き生きとした魂でしょうか。何という広大無辺の知識を持っていることでしょうか。…絶えず活動してやまない人間の魂が、古い思索の狭い境界を破り、その淵に立っている未知の世界の秘密を知ることを切望するのです。…少なくとも私は、今まで一度も会ったことのなかった一つの新しい精神と知り合ったのです。⁹

さらにエマソンは、1832年12月から1833年10月にかけてのヨーロッパ旅行中、『イギリス国民性』(*English Traits*, 1856)に記しているように、1833年8月5日には、ロンドン郊外のハイゲートにコールリッジを訪れ、会見している。¹⁰この会見は実際にはエマソンを満足させるものではなかったが、帰国後のコールリッジが他界した1834年7月以後になって、再びコールリッジに対して新たな興味を抱くようになり、『自然論』を出版した1836年までの間、コールリッジを本格的に研究した。この時期に読んだのは『友』、『文学的自叙伝』、『教会と国家の構成原理』(*On the Constitution of the Church and States*, 1829)などであり、「理性」(Reason)と「悟性」(Understanding)、「想像力」(Imagination)と「空想力」(Fancy)、「天才」(Genius)と「才能」(Talent)の区別、そして極性(polarity)などの超越主義思想(Transcendentalism)の根幹となってゆく学説を学んだ。エマソンは1829年から1833年の間は『友』と『省察の助け』を読み、主として宗教家・形而上学者としてのコールリッジを研究したのに対し、1834年から1836年の間は、『友』と『文学的自叙伝』を読み、主として文芸批評家・心理学者としてのコールリッジを研究したと言えるであろう。¹¹エマソンは、1835年ボストンで試みた10回にわたる英文学に関する講演のなかで、『文学的自叙伝』は英語で書かれた最良の批評書であると述べ、文芸批評家としてのコールリッジを、次のように礼賛している。

コールリッジの真価は哲学者や詩人としてではなく、批評家であることにあります。…彼は極めて鋭敏な識別力を備え、…彼の行った区別の見事さにおいてはどの人をも凌いでいます。…そして彼は、道徳的、知的、社会的な世界を極めて広範に概観したのです。…彼の『文学的自叙伝—文学者としての我が人生と意見—』は、英語で書かれた最も優れた批評書です。…私はどの言

9 Ibid., vol. 7, pp. 188-89, Dec. 10, 1929: "I am reading Coleridge's 'Friend' with great interest. ... but what a living soul, what a universal knowledge! ... the restless human soul bursting the narrow boundaries of antique speculation, and mad to know the secrets of that unknown world on whose brink it is sure it is standing, ... At least I become acquainted with one new mind I never saw before."

10 *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson* (以下CWと略記), eds. Alfred R. Ferguson, Joseph Slater, Douglas E. Wilson et al., 10 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1971-2013), vol. 5, pp. 5-7.

11 コールリッジのエマソンに対する影響については、高梨良夫『エマソンの思想の形成と展開—朱子の教義との比較的考察—』(金星堂、2012年)、199-203頁; Sanja Sostaric, *Coleridge and Emerson: A Complex Affinity* (Dissertation. com, 2003); *Biographical Dictionary of Transcendentalism*, ed. Wesley T. Mott (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1996), pp. 48-50; and Frank T. Thompson, "Emerson's Indebtedness to Coleridge," *Studies in Philology*, vol. 23 (Jan., 1926), pp. 55-57などを参照。

語であれ現代の学者がこれ程多くの恩義を受けられる批評書を他に知りません。… 彼自身の見解によれば、『文学的自叙伝』の半分、『友』第三巻の「方法に関するエッセイ」の少数の詩を加えた始めから終わりまでは、彼が作品において心に留めているもののすべてでした。そしてこうした見解に、『教会と国家の構成原理』と呼ばれる、その後にかかれた計り知れない程貴重な小さな書物を加えれば、私はすべての優れた評者の意見が一致するだろうと思います。¹²

3 ベーメ、コールリッジ、エマソン

本節では、ベーメの思想がコールリッジを媒介として如何にしてエマソンに影響を与えたのかについて、対立者の一致、神人同一、想像力と空想などのコールリッジの思想の核的概念をめぐっての考察を通じて、明らかにしてみる。

3-1 対立者の一致

ベーメは、錬金術の三原質、すなわち硫黄、水銀（メリクリウス）、塩（サル）の一つの硫黄をスルフ（Sulphur）と呼び、スルを自由に向かうルスト、喜びの生命の起源、フルを自然に向かう欲、エッセンス的の生命の起源であると、次のように『シグナトゥール・レーラム—万物の誕生とするしについて—』（1622年）に記している。

スル（Sul）は、第一プリンキウムにおいては自由な意志、あるいは無から有るものものになりたいたいというルスト（Lust）であって、自然の外の自由のうちにある。フル（phur）とは、自由な意志の欲（Begierde）であって、このフルという欲のうちには本体（Wesen）をつくる。… ところで欲であるフルは、スルと切り離せず、それは一語であり、もともとひとつの本体でもある。それがみずから二つの性質（Eigenshaften）、つまり、喜び（Freud）と苦しみ（Leib）、光（Licht）と闇（Finsterniß）に分裂する。こうして、きびしさのうちには闇の火の世界、自由のルストのうちには光の火の世界という二つの世界が生じる。… これが、ガイストの生命の姿と、エッセンス的の生命の姿なのである。スルとはよろこびの生命の起源であり、フルとはエッセンス的の生命の起源である。… 自由の欲は、おだやかで明るく、神と呼ばれる。自然へとむかう欲は、自分で自分を闇で塗り込め、干からびて、怒りっぽく腹をすかしている。その名は、神の怒り、または闇の

12 *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*, eds. Robert E. Spiller, Stephen E. Whicher, and Wallace E. Williams, 3 vols. (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1959-72), vol. 1, pp. 378-79: "His [Coleridge's] true merit is not that of a philosopher or of a poet but a critic. ... He possessed extreme subtlety of discrimination; ... surpassing all men in the fineness of distinctions he could indicate, ... he has taken a survey of the moral, intellectual, and social world ... his singular book called *Biographia Literaria*, or his own literary and opinions, is undoubtedly the best body of criticism in the English language. ... I do not know a book on criticism in any language to which a modern scholar can be so much indebted. ... In his own judgement, half of the *Biography* and the third volume of the *Friend* from the beginning of the *Essay on Method* to the end with a few of his poems were all that he would preserve of his works. In this judgement, if you add the invaluable little book called *Church and State* which was written afterwards, I suppose all good judges would concur."

世界。これを名づけて第一プリンキピウム (Principium) という。これに対して光の世界は、第二のプリンキピウム。しかも両者はもともと分離せず、たがいに相手を包み込み、たがいに相手の原因と起源、そしてまた相手を癒す薬となっている。¹³

このようにベーメの思想においては、怒りの神の顕現、永遠の闇、苦の泉、暗黒の火、永遠の自然のはじまりの領域としての第一プリンキピウムと、火に対する光、愛、へりくだり、やさしさの天使の世界、体と形があるものの本体の領域としての第二プリンキピウムの二つの領域が、『大いなる神秘』(1622年)に記されているように、一つの根源を持ちながらも分離し合い、一にして二という裏腹の関係で二元的に存在している。

このショック、あるいは火が燃えつくときに、二つの国が分かれる。とはいえ、二つはあくまでも一つ。しかし、二つの国は、本性 (Essentz)、性質 (Qual)、意志においてたがいに分かれ、たがいに相手の姿が見えず、それ自体の性質のままに他を理解できず、それにもかかわらず一つの根源から出ているのであって、たがいにもちつもたれつ、片方がなければ無であり、二つはすべてその性質を一つの根源から得ている。¹⁴

ベーメは善だけでなく悪もまた神、人間、自然のうちにあり、善悪の対立、闘争を通じて調和が現出すると考えている。自らの思想形成に際してベーメの思想の影響を直接的に受けたコールリッジにおいては、ベーメの矛盾したものの統一という思想は「対立者の一致」という概念で展開されている。¹⁵ コールリッジは、『文学的自叙伝』、第12章に、客観

13 南原実訳『シグナトゥーラ・レーラム—万物の誕生とするしについて—』(以下『シグナトゥーラ・レーラム』と略記)、キリスト教神秘主義著作集、第13巻(教文館、1989年)、20-21、23頁; Jacob Böhme, *De Signatura Rerum, oder der Geburt und Bezeichnung aller Wesen* (1622), 2:12-13, 16, 23: “Sul ist im ersten Principio der free Wille oder die Lust in dem Nichts zu Etwas, es ist in der Freyheit ausser der Natur; phur ist die Begierde der freyen Lust, und machet in sich in dem phur als in der Begierde ein Wesen. ... Nun ist aber das phur als die Begierde nicht von dem Sul getrennet, es ist Ein wirt, und ist auch um Urstand Ein Wesen., und sheidet sich selber in zwo Eigenshaften, als in Freud und Leib, in Licht und Finsterniß, dann es macht zwo Welten, als seine finstere Feuer=Welt in der Strengheit, und eine lichte Feuer=Welt in der Lust der Freyheit. ... Dieses ist nun die Gestalt des Geist=Lebens, und des essentialischen Lebens: Sul ist der Urstand des Freuden=Lebens, und phur ist der Urstand des essentialischen Lebens. ... Die Begierde der Freyheit ist sanft und lichte, und wird Gott genant, und die Begierde zur Natur macht sich in sich finster, dürre, hungerig und grimmig: die wird Gottes Zorn genant, und die Finster=Welt, als das erste Principium; und die Licht=Welt das ander Principium, ist zwar kein abtheilig Wesen, sondern eines hält das andere in sich verschlossen, und eines ist des andern Anfang und Ursache, auch Heilung und Artzney.”

14 『ヤコブ・ベーメ』、143頁; Jacob Böhme, *Mystieum Magnum*, 4:1: “In diesem Schracke oder Feuers=Anzündunge scheiden sich 2 Reiche, und sich doch nur Eines: Aber sie theilen sich in der Essentz, Qual und Willen, werden auch einander unsichtlich, keines begreiffet das ander in seiner eignen Qual, und sind doch aus Einem Urstande, hangen auch aneinander, und wäre Eines ohne das Ander ein Nichts, und nehmen doch alle beyde ihre Qual von Einem Urstande.”

15 コールリッジの極の理論については、高山信雄『コールリッジ研究』(こびあん書房、1984年)、89-122頁、田村謙二『コールリッジの創造的精神—統一性、分裂、統一性の回復—』(英宝社、1997年)、83-117頁参照。

的なものと主観的なもの、自然と知性との関係について、次のように記している。

そこで、単に「客体的」なものの総体を、これからは「自然」と呼ぶことにします。ただし、この用語を、自然の受動的かつ物質的な意味に限定するとともに、自然の实在を私たちに認識させるあらゆる現象を包含するものとして用います。他方、「主観的」なものの総体は、「自己」または「知性」の名において理解されるでしょう。知性と自然という二つの概念は必然的に対立関係にあります。知性はもっぱら表象するものとして、自然はもっぱら表象されるものとして考えられます。前者は意識するものとして、後者は意識のないものとして考えられるのです。さて能動的な認識というあらゆる行為において、これらに必要なのは両者の相互的協働、つまり意識的存在と、それ自体は無意識的なものとの協働です。¹⁶

客観的なものを最初に在るものとするならば、これと合体する主観的なものが付随して発生することを説明しなければならない。… 主観的なものを最初に在るものとするならば、そこに生じる問題は、どのように客観的なものが主観的なものに付随して起こるか、ということである。¹⁷

コールリッジは、主観的なものと客観的なものとはそれぞれ次元が異なる領域に属し、対立し合いながらも、互いに相手が必要としている関係にあり、根源は一つとみなしている。ペーメの第一プリンキウムはコールリッジにおいては「客体」、「自然」、第二プリンキウムは「主体」、「自己」に相当する。

エマソンは、コールリッジの自己と自然との二元的な分離という概念を、『自然論』の序論に、次のように記している。

哲学的に考えると、宇宙が「自然」(Nature)と「魂」(Soul)から構成されている。だから厳密に言うと、われわれから分離されているすべてのもの、「哲学」が「非我」(NOT ME)として区別するすべてのもの、つまり自然も人工も、すべての他人もわたし自身の体も、ことごとく「自然」

16 『文学的自叙伝』、第12章、223頁；BL, ch.12, p. 335: “Now the sum of all that is merely OBJECTIVE, we will henceforth call NATURE, confining the term to its passive and material sense, as comprising all the *phenomena* by which its existence is made known to us. On the other hand the sum of all that is SUBJECTIVE, we may comprehend in the name of the SELF or INTELLIGENCE. Both conceptions are in necessary antithesis. Intelligence is conceived of as exclusively representative, nature as extensively represented; the one as conscious, the other as without consciousness. Now in all acts of positive knowledge there is required a reciprocal concurrence of both, namely, of the conscious being, and of that which is in itself unconscious. Now in all acts of positive knowledge there is required a reciprocal concurrence of both, namely, of the conscious being, and of that which is in itself unconscious.”

17 同上書、224、226頁；Ibid., p. 336, 338: “Either the Objective is taken as the first, and then we have to account for the supervention of the Subjective, which coalesces with it.”; “Or the Subjective is taken as the first, and the problem then is, how these supervenes to it a coincident Objective.”

という名まえのもとに分類されなくてはならぬ。¹⁸

また主観的なものと客観的なものは相互に相手を必要としている関係にあるというコールリッジと同様の考えを、エマソンは次のように記している。

そもそも人間が本来アナロジスト（類推家）であり、あらゆる物象のなかに関係を探る。…そして人間を理解するためにはこれらの物象がぜひとも必要で、これらの物象も人間なしには理解できない。¹⁹

さらにコールリッジの「対立者の一致」は、「極性」(polarity)の概念としても知られている。極性とは磁気（陽極と陰極）や電気（プラスとマイナス）などの現象にみられるように、自然は対立する二つの力から新たな階層、調和が統一的に形成されるという理論である。エマソンはコールリッジの影響を受けて、エッセイ「償い」(“Compensation,”1841)に、二元的な「極性」が自然界、さらに人間界をも支配していると、次のように記している。

極性、つまり動と反動とは、自然のあらゆる部分でわれわれが会うことだ。たとえば闇と光、熱と冷、潮の干満、雄と雌、植物や動物の吸う息、吐く息、動物体を流れる液体が保つ量と質との平衡、心臓の収縮と拡張、液体や音の波動、求心的で遠心的な引力、電気、流電気、化学上の親和力。… 一種の必然的な二元性が自然を二つに分けていて、そのために、ものはそれぞれ半分に過ぎず、当然おのれを完全にしてくれるべつのもので存在を暗示している。たとえば精神には物質、男には女、奇数には偶数、主観には客観、内には外、上には下、動作には休止、肯定には否定。…

同じ二元性が人間の本性と状態の基礎にもなっている。あらゆる過度が欠乏を、あらゆる欠乏が過度をひき起こす。あらゆる甘味にはそれぞれに酸味が、あらゆる悪にはそれぞれに善がともなう。快樂を感じとるあらゆる能力は、乱用すると、それに見合うだけの罰を課せられる。過度に用いると、いのちを与えて報いることになる。わずかな知恵にも、ひとつひとつ、わずかな愚鈍が対応している。失ったものがあれば、その代償として、必ず何かほかのものが手に入っており、

18 酒本雅之訳『エマソン論文集（上）』（岩波文庫、1972年）、38-39頁；*CW*, 1:8: “Philosophically considered, the universe is composed of Nature and the Soul. Strictly speaking, therefore, all that is separate from us, all which Philosophy distinguishes as NOT ME, that is, both nature and art, all other men and my own body, must be ranked under this name, NATURE.”

19 同上書、59頁；*Ibid.*, 19: “[M]an is an analogist, and studies relations in all objects. ... And neither can man be understood without these objects, nor these objects without man.”

手にはいったものがあれば、必ずその代償として何かを失う。²⁰

3-2 神人同一

ベーメの思想の中核となっているのは神人同一説であり、人間は神の似姿、像、顕現であると考えられている。ベーメは神の究極的根源を、二元的対立を超越した人格以前の「無底」(Ungrund)と規定し、『キリスト、人となる』(1620年)に、「…人間は神の真の似姿(Gleichniß)であって、神はそれをこの上なく愛し、自分自身の本体であることの似姿のうちにみずからをあらわにする」²¹と記されているように、人格以前の「無」(Nichts)なる神が自らの姿を見出したいと憧れ、欲し、顕れ出た結果として最終的に結んだ像が人格を備えた人間とされている。また同時に、「神は、人間の内部の中心であり、中心の中心である。もともと、神は、自己自身のなかに住む。しかし人間の精神(Geist)が神とひとつの精神となるとき、神は人間性のうちに、その心情、感覚、欲望のうちに、みずからをあらわし、心情は、神を感じず。さもなくば、神はあまりにも玄妙細微で、私たちは神を見ることができない」²²とあるように、神のガイストは人間に内在し、人間の側からも神と同一化することの出来る神人合一の可能性についても記している。

コールリッジは主観的自己が絶対的自己にまで高まった神人同一の境地を、次のように『文学的自叙伝』、第12章において I AM (我あり)と表現している。

我々は存在の絶対的な原理を究明しているのではなくて、認識の絶対的な原理を究明しているのだ。… 換言すれば、哲学は宗教に取り組み、宗教は哲学を含むようになるであろう。我々は「自己自身を知る」ことから始め、最後に絶対的な「我あり」(I AM)に達しようとする。「自己」から

20 同上書、248-50頁；CW, 2:57-58: “Polarity, or action and reaction, we meet in every part of nature; in darkness and light; in heat and cold; in the ebb and flow of waters; in male and female; in the inspiration and expiration of plants and animals; in the equation of quantity and quality in the fluids of the animal body; in the systole and diastole of the heart; in the undulations of fluids, and of sound; in the centrifugal and centripetal gravity; in electricity, galvanism, and chemical affinity. ... An inevitable dualism bisects nature, so that each thing is a half, and suggests another thing to make it whole; as spirit, matter; man, woman; odd, even; subjective, objective; in, out; upper, under; motion, rest; yea, nay. ... The same dualism underlies the nature and condition of man. Every excess causes a defect; every defect an excess. Every sweet hath its sour; every evil its good. Every faculty which is a receiver of pleasure, has an equal penalty put on its abuse. It is to answer for its moderation with its life. For every grain of wit there is a grain of folly. For every thing you have missed, you have gained something else; and for everything you gain, you lose something.”

21 『ヤコブ・ベーメ』、191頁；*De incarnatione verbi, oder Von der Menschwerdung Jesu Christi*, II: 10-8: “... ein Mensch das wahre Gleichniß ist, welches Gott hoch liebet, und sich in dieser Gleichniß, offenbaret, als in seinem eigenem Wesen.”

22 同上書、95頁；Ibid: “Gott ist im Menschen das Mittel, das Mittelste, aber Er wohnt nur in sich selber; es sey denn daß des Menschen Geist Ein Geist mit Ihme werde, so offenbaret Er sich in der Menschheit, als im Gemüthe, Sinnen und Begehren, daß Ihn das Gemüthe führet, sonst ist Er uns in dieser Welt viel zu subtil zu shauen.”

着手し、歩を進め、ついには「神」のうちに自己のすべてを失うと同時に自己のすべてを見出すのである。²³

このような特質を持つこの原理は、SUM すなわち I AM として現れる。今後私はこれを区別なしに精神・自己・自己意識という語によって表すことにしよう。これにおいて、これにおいてのみ、客体と主体、存在と認識は一致し、それぞれ一方が他方を包含し想定している。… しかし、もし我々の概念を絶対的的自我、あの偉大で永遠な I AM まで高めてゆくならば、存在の原理と認識の原理、観念の原理と実在の原理、すなわち、存在の根拠と、存在の認識の根拠は、絶対的に同一となる。²⁴

エマソンは、ベーメ、コールリッジと同様の神人同一の境地を、1830年10月3日に試みた「君自身を信頼せよ」(“Trust Thyself”)と題する説教において、次のように述べている。

我々は自らの心の声にひたすら耳を傾ければ傾けるほど、普通の意味における利己的な人間になるのではなく、低俗なものからより離れてゆき、真理と神に依り頼むようになるのです。というのは、魂の価値というのは、そのなかに神的な原理 (divine principle) があり、神の家 (house of God) があり、永遠の住人 (eternal inhabitant) の声が常に聞こえる、ということにあるからなのです。²⁵

さらにエマソンは、1831年7月15日の『日記』に、「私たちの内なる神 (God in us) が神を礼拝するのだ」²⁶と表現し、さらに同年11月23日の『日記』には、祈りについての同

23 『文学的自叙伝』、237頁；BL, ch.12, p. 348: “We are not investigating an absolute *principium essendi*; ... but an absolute *principium cognoscendi*. ... In other words, philosophy would pass into religion, and religion become inclusive of philosophy. We begin with the I KNOW MYSELF, in order to end with the absolute I AM. We proceed from the SELF, in order to lose and find all self in God.”

24 同上書、233-34頁；Ibid., pp. 344-45: “This Principle, and so characterized, manifests itself in the SUM or I AM; which I shall hereafter indiscriminately express by the words spirit, self, and self-consciousness. In this, and in this alone, object and subject, being and knowing, are identical, each involving and supposing the other. ... But if we elevate our conception to the absolute self, the great eternal I AM, then the principle of being, and of knowledge, of idea, and of reality; the ground of existence, and the ground of the knowledge of existence, are absolutely identical.”

25 *The Complete Sermons of Ralph Waldo Emerson*, eds. Albert J. von Frank et al., 4 vols. (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1989-92), vol. 2, p. 267, Sermon No. 90: “In listening to more intently to our own soul we are not becoming in the ordinary sense more selfish, but are departing farther from what is low and falling back upon truth and upon God. For the whole value of the soul depends on the fact that it contains a divine principle, that it is a house of God, and the voice of the eternal inhabitant may always be heard within it.”

26 *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* (以下 JMN と略記), eds. William H. Gilman, Ralph H. Orth et al., 16 vols. (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1960-82), vol. 3, p. 273: “God in us worships God.”

様の考えを、次のように記している。

というのは、神はどんな人間に対しても、ただ猛烈に祈り求めたからといって理に合わぬ願いをききとどけることは期待できないのであって、人間が神と次第に一つとなり、正しいもの、すなわち神の欲するところを祈り求めるようになるに従い、それに正比例して、祈りがきかれるからだ。そして、人間がまったく神に近い (wholly godly) 存在となり、いいかえれば、人間の内なる神 (God within) が次第に開顕して、一切をおのれに服従せしめたとき、そのとき人間はただ神の欲するところのみを祈り求めるようになり、彼の祈りはすべてかなえられるのだ。²⁷

3-3 想像力と空想力

ベームにおいてイマギナチオン (Imagination) とは、イメージし、思いを形つくる力、意志 (Wille) が像 (Bild) のうちに自らをつかむ力を意味し、『シグナトゥーラ・レーラム』に記されているように、愛と敵意、喜びと苦しみの両方に向かう。

こうして明らかに、よろこびと苦しみ、愛と憎しみすべては、イマギナチオンとルストにその起源があり、まことに、神へとむかうルスト、自由な愛へとむかうルストのうちのよろこびの王国が死の不安の只中に開け、そしてまた欲が自由の愛を離れて死の不安、すなわち闇の泉 (Qual) のなかに入っていくと、欲は死の泉で溢れ、メリクリウスもまた死の泉のうちにあらわれる。²⁸

人祖アダムは、イマギナチオンの力によって、神の意志と愛を実現すべく神の似姿として創造されたにもかかわらず、悪魔の誘惑により、誤ったイマギナチオンによって空想をたくましくし、調和と統一を失い、神のもとを離れ、悪の世界への転落の運命をたどることになる。

悪魔は、美しい天使、蛇は、賢い動物、人間は、神性の映像であった。これら三者の破滅のもととなったのは、イマギナチオンと驕り高ぶりであった。そのため、偽の快樂に対して神の呪い

27 小泉一郎訳『たましいの記録』エマソン選集全7巻(日本教文社、1960-61年)、第7巻、124頁; *JMN*, 3:308: "For it is not to be expected that God should gratify any man in an unreasonable request only because he asks it violently, but precisely in proportion as a man comes into conformity with God, he asks right things or things which God wills, and which therefore are done. And when he is wholly godly or the unfolding God within him subdued all to himself, then he asks what God wills and nothing else and all his prayers are granted."

28 『シグナトゥーラ・レーラム』、91-92頁; *De Signatura Rerum*, 8:11: "Also verstehen wir, das Freud und Leib, Liebe und Feindschaft, alles durch Imagination und Lust urstände, dann in der Lust gegen Gott, als gegen der freyen Liebe, entsteht das Freudenreich mitten in der Todes=Angst: Und so die Begierde aus der freyen Liebe ausgehet in die Todes=Angst, als in die Qual gefüllet, also qualificiret auch der Mercurius in Todes=Qual."

を招くこととなったのである。²⁹

墮落したアダムの神の像としての姿を回復し、救済するのは「第二のアダム」としてのキリストである。³⁰ 人間の救済は、十字架上のキリストにならって、神の意志に逆らう自己を否定する決断を自らの意志で下し、イマギナチオーンの力を愛と喜びに向かわせ、火のなかをくぐり抜けることによって悪、闇、死を克服し、再び天の喜び、愛、光の領域に移行することによって実現する。

キリストが死んだとき、アダムは、キリストの死とともにその我性に死んだ。…キリストは、第一のアダムの像のなかに入り、こうして第一のアダムは、キリストの人間性を通して、おなじキリストとなり、蛇を踏みつぶす者となる。…第二のアダムは、死の死のなかに入り、死の死を自分のなか、アダムの人間性のなかにとらえ、死に対する死となり、生命を死から救い出して、永遠の自由へと導き、神の全能のうちに、第一のアダムの本体となって立ち上がった。語る永遠の言葉のなかの神のガイストが、キリストの人間性を通して、アダムを死から救い出したのである。³¹

コールリッジは、ベーメのイマギナチオーンの影響を強く受け、宗教的で難解なベーメのキリスト教神秘主義の思想体系を同時代人にも理解し易くなるように、独自の想像力 (Imagination) に関する理論として再構成している。『文学的自叙伝』第13章において展開されている想像力説によると、精神 (Spirit) には、自己を認識しようとする「求心力」と、自己を拡大しようとする「遠心力」があり、二つの対立する力が相反しながら統一しようとする作用によって、多様で有限な物質的形態をとって顕れ出る。求心力は、ベーメの体系においては、内側に収縮する性質としての渋さ、サル (塩) に、遠心力は、激しく暴れ、外に向かう性質としての苦み、メリクリウス (水銀) に相当する。それ故想像力は、形象を作り出し、精神と物質との間で媒介的な働きをする力 (intermediate faculty) である。さらにコールリッジは、神による万物創造の際に働く力を「第一の想像力」 (primary Imagination)、一度失われた精神と物質の統一を回復するために働く「再創造」 (re-creation) の力を「第二の想像力」 (secondary Imagination) と定義し、次のように記し

29 同上書、66-67頁；Ibid., 7:7: “Der Teufel war ein schöner Engel, und die Schlange das listigste Thier, und der Mensch die Gleichniß der Gottheit. Nun sind sie doch alle drey durch Imagination und Erhebung verdorben, und haben von Gott den Fluch erlanget für ihre falsche Lust.”

30 第二のアダムとしてのキリストについては、『ヤコブ・ベーメ』、209-16頁参照。

31 『シグナトゥーラ・レーラム』、180-81頁；*De Signature Rerum*, 12:8-9: “Da Christus starb, so starb Adams seine Ichheit in Christi Tod mit. ... Christus ging ein in das Bild des ersten Adams, also, daß der erste Adam in der Menschheit Christi, derselbe Christus und Schlangen=Treter ward. ... Der andere Adam ging in Tod des Todes ein, und nahm den Tod des Todes in sich, als in Adams Menschheit, gefangen: Er ward dem Tod ein Tod, und führete das Leben, in die ewige Freyheit, aus dem Tod aus. Er stund in Göttlicher Allmacht in des ersten Adams Wesen auf: Gottes Geist in dem sprechenden ewigen Worte, führete Adam in Christi Menschheit aus dem Tode aus.”

ている。

さて「想像力」について、私はそれを第一あるいは第二のいずれかとして考えます。第一の「想像力」はあらゆる人間の知覚の生きた力であり主要な行為者であって、それは無限の I AM における永遠の創造行為を、有限な心のうちで反復するものと私は考えます。第二の想像力は第一の想像力の反響であり、意識的な意志と共存しますが、その行為の種類においては第一の想像力と同一であって、ただその程度とその働きの様式においてのみ異なっているのです。³²

第二の想像力が第一の想像力と異なるのは、人間の自覚的意志と協働して働く点にあり、これは人間による芸術創造において、神の創造の行為に匹敵する創造的な力として働くと考えられている。そして「想像力」を「形成し、変容させる力」(shaping and modifying power)、「統一的、魔術的な力」(synthetic and magical power)、相反する性質を有するものに均衡と調和を与え、一つの中心力となって、異質な部分を結びつけ、「一つの優美な全体」(one graceful whole)を有機的に創り上げる力であると説明している。コールリッジにおいては、想像力は大自然を創造した神に対する信仰と密接に結びついており、ベーメの体系における救済の過程でキリストと同等の役割を担うのは芸術家、詩人となっている。芸術家は、物質のなかに隠されている「本質」(essence)が現われ出るようにし、固定した現象としての「所産的自然」(natura naturata)から生成変化する「能産的自然」(natura naturans)の次元にまで高め、再び自然に生命を与えなくてはならないと、次のように述べている。

芸術家は、物のなかに存在するもの、形や姿を通じて発動し、シンボルによって我々人間に語りかけてくるもの—すなわち自然の霊 (spirit of nature) を、我々が愛する人を無意識のうちにまねるように、模倣しなくてはならない。というのは、そのようにしてはじめて、芸術家は、対象に対して真に自然であり、効果において真に人間的な作品を創造することが出来るからである。形を創りあげる観念は、それ自体形ではあり得ない。それは形を超えたものであり、その本質であり、個別性の中の普遍性であり、あるいは個別性それ自体であり、内在する力のひらめき、現

32 『文学的自叙伝』、259頁；BL, ch.13, pp. 363-64: “The Imagination then I consider either as primary, or secondary. The primary Imagination I hold to be the living power and prime agent of all human perception, and as a repetition in the finite mind of the eternal act of creation in the infinite I AM. The secondary Imagination I consider as an echo of the former, co-existing with the conscious will, yet still as identical with the primary in the kind of its agency, and differing only on degree, and in the mode of its operation.”

われである。³³

もし芸術家が、単なる自然すなわち「所産的自然」を模写するだけならば、何と意味のない競争であろうか。もし芸術家が、与えられた形体のなかから進み出すとするならば、… 何と彼の作品には常に現実性がないことであろうか。… 芸術家は、本質すなわち「能産的自然」を会得しなくてはならないという私の言葉を信じてくれたまえ。³⁴

コールリッジは、詩は模倣芸術であり、単なる「模写」(copy)とは全く異なると述べている。詩人は自然を「模倣」(imitate)し、目に見える自然の内奥に美、音楽的状态、象徴的な内的言語を見出さなくてはならない。「詩はまた純粋に人間的である」³⁵と述べられているように、詩において自然は人間化される。これはベーメの体系における、第二のアダムによる自然と人間との間の統一的な調和の回復に相当すると考えられる。

さらにコールリッジにおいては、ベーメにおける神、光、自由な愛、喜びに向かうイマギナチオンに相当するのは「想像力」、神の創造の現実から遊離する方向に働く連合効果のみの想像力に相当するのは「空想力」(Fancy)と区別されており、『文学的自叙伝』に「空想力」について次のように記されている。

それに対して「空想力」が相手とするのは、固定されたものと限定されたもの以外にはありません。実際、空想力は時間と空間の秩序から解放された記憶の一つの様式に過ぎません。それは私たちが「選択」(Choice)という言葉で表している、意志の経験的現象と混じり合い、その現象によって変化させられます。しかし空想力は通常の記憶の場合と同様に、その材料のすべてを、連合の法則 (the law of association) によってすでに作られたものとして受け入れるのです。³⁶

コールリッジは、空想力を「集合的で連想的な力」(aggregative and associative power)であり、想像力のような創造的 (creative) な力ではなく、固定したものと戯れ、

33 *The Complete Works of S. T. Coleridge*, vol. 4, p. 333, "On Poesy or Art": "The artist must imitate that which is within the thing, that which active through form and figure, and discourses to us by symbols the Nature-geist, or spirit of nature, as we unconsciously imitate those whom we love; for so only can he hope to produce any work truly natural in the object and truly human in the effect. The idea which puts the form together can not itself be the form. It is above form, and is its essence, the universal in the individual, or the individuality itself, —the glance and the exponent of the indwelling power."

34 *Ibid.*, p. 332: "If the artist copies the mere nature, the *natura naturata*, what idle rivalry! If he proceeds only from a given form, ... what an emptiness, what unreality there always is in his productions! ... Believe me, you must master the essence, the *natura naturans*."

35 *Ibid.*, p. 329: "Poetry also is purely human."

36 『文学的自叙伝』、259-60頁；*BL*, ch. 13, p. 364: "Fancy, on the contrary, has no other counters to play with but fixities and definites. The fancy is indeed no other than a mode of memory emancipated from the order of time and space; while it is blended with, and modified by that empirical phenomenon of the will, which we express by the word Choice. But equally with ordinary memory the Fancy must receive all its materials ready made from the law of association."

修飾的に結び付けるだけの力と考えている。空想力は想像力とは異なり、「所産的自然」の次元にとどまり、「能産的自然」の次元、すなわち「存在」(existence)の背後にある「本質」にまで達することはない。そして彼は、詩は詩的天才の証拠となる想像力によって生み出されるとし、「詩人は、想像力にしたがって描くべきであり、空想力にしたがって描くべきではない」³⁷と主張する。³⁸

ベーメの思想を受容した上で、コールリッジがエマソンの詩芸術論に影響を与えたのは、主として想像力説と「想像力」と「空想力」の区別が中心であろう。マシーセンは、「コールリッジはエマソンの言語、芸術の有機体説に直接的な刺激を与えた」と記している。³⁹エマソンは、想像力と空想力の相違について、コールリッジの学説をほぼそのまま受容し、1835年8月1日の『日記』に、次のように記している。

空想力と想像力の差異は、私には質的なものに思われる。空想力は集合させ、想像力は生命を与える。空想力は世界をそのままに受け入れ、表面的な関係によって快い集団を選ぶ。想像力は幻想(Vision)であり、世界を象徴的(symbolical)であると考え、象徴を真の意味で洞察し、全ての外的物象を象徴(types)として見る。⁴⁰

エマソンの自然論もまた、「1. 言葉は自然の事実を示す記号だ。2. 特定の事前の事実は特定の自然の事実を表す記号だ。3. 自然は精神の象徴(symbol)だ」⁴¹と『自然論』第四章「言語」に記されているように、ベーメ、コールリッジの、神は自然のなかに顕現し、外的自然には内的言語が内在しているとする自然観を受け継ぎ、自然は象徴的な言語であり、自然と精神は「照応」(correspondence)の関係にあるという思想を基盤に展開されている。さらにエマソンは、第三章「美」に、「自然美は精神のなかでふたたび形をとり、しかもそれは不毛な観照のためではなく、新たな創造のためなのだ。…美を創造することが〈芸術〉だ。…だが自然の美は究極的なものではない。内面的で永遠の美を告知する使者であり、それ自体では実体のある満足する恵みではない。あくまでも部分としての立場を守っていなければならないもので、これまでのところでは、〈自然〉の究極

37 同上書、410頁；Ibid., ch. 22, p. 470: “The poet should paint to the imagination, and not to the fancy.”

38 コールリッジの想像力説については、岡本昌夫『想像力説の研究—イギリス文芸批評における想像力説の形成とその展開』(南雲堂、1967年)、高山信雄『コールリッジ研究』、409-81頁、田村謙二『コールリッジの創造的精神』、197-216頁、山田豊『詩人コールリッジ—「小屋のある谷間」を求めて—』(山口書店、1986年)、223-48頁などを参照。

39 F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (New York: Oxford Univ. Press, 1941), Acknowledgement, xvii-xviii.

40 *JMN*, 5:76: “The distinction of fancy and imagination seems to me a distinction in kind. The fancy aggregates; the Imagination animates. The Fancy takes the world as it stands and selects pleasing groups by apparent relations. The Imagination is Vision, regards the world as symbolical and pierces the emblem for the real sense, sees all external objects as types.”

41 『エマソン論文集(上)』、57頁；*CW*, 1:17: “1. Words are signs of natural facts. 2. Particular natural facts are symbols of particular spiritual facts. 3. Nature is the symbol of spirit.”

的な根源の最後の、あるいは最高の表現ではない⁴²と記し、人間に及ぼす自然の美的作用では不十分で、究極の目的は、人間精神に働きかけて、美を創造することにあると論じている。

そしてエマソンは、エッセイ「詩人」(“The Poet,” 1844)⁴³において、詩人の役割は、自然のなかに隠されている象徴的言葉を読みとり、美を創造することにあるとする詩人論を展開する。詩人は「第二の目」(second eye)としての「想像力」によって自然の本質を洞察し、不可視の領域を映し出し、「命名者」(Namer)、「言葉を創る者」(Language maker)として、それぞれの事物にふさわしい固有の名前を与えなくてはならない。彼は詩人を「解放の神」(liberating gods)と呼んでいる。次に記されているように、事物は命名されることによって解放され、一段と高い有機的な形に変貌する。

表現は有機的であり、つまりもの自身が解放されるとわが身に帯びる新しい型だ。…ものが美しい調べに変わるさまは、ものが一段高い有機的な形態に変貌 (metamorphosis) するさまに似ている。あらゆるものの頭上にはそれぞれのデーモン (守護神)、つまり魂が君臨していて、ものの形態が目によって映されるように、ものの魂も何らかの美しい調べによって映される。⁴⁴

詩人を解放者とみなすエマソンの詩人論⁴⁵は明らかに、外的自然の内奥に美と音楽的状态、象徴的な内的言語を見出し、表現することを詩人の役割とするコールリッジと、第二のアダムとしてのキリストによる自然と人間との間の統一的な調和の回復、人間のみならず宇宙万物の救済というベーメの思想を基本的に受け継いでいると考えられる。⁴⁶

4 終わりに

以上、対立者の一致、神人同一、想像力と空想力などの思想概念をめぐって、コールリッジを媒介としたベーメの根幹的思想のエマソンに対する影響について考察してきた。少なくとも本稿においては、ドイツの神秘家ベーメの思想の根幹が、イギリスの詩人思想家コー

42 同上書、54-56頁；Ibid., pp. 16-17: “The beauty of nature reforms itself in the mind, and not for barren contemplation, but for new creation. ... The creation of beauty is Art. ... But beauty in nature is not ultimate. It is the herald of inward and eternal beauty, and is not alone a solid and satisfactory good. It must therefore stand as a part and not as yet the last or highest expression of the final cause of Nature.”

43 酒本雅之訳『エマソン論文集(下)』(岩波文庫、1973年)、103-46頁；CW, 3:24.

44 同上書、128-29頁；Ibid., pp. 14-15: “The expression is organic, or, the new type which things themselves take when liberated. ... Like the metamorphosis into higher organic forms, is their change into melodies. Over everything stands its dæmon, or soul, and, as the form of the thing is reflected by the eye, so the soul of the thing is reflected by a melody.”

45 エマソンの詩人論については、『エマソンの思想の形成と展開』、92-93頁参照。

46 エマソンに対するベーメの影響については、Elizabeth Hurth, “The Uses of a Mystic Prophet: Emerson and Boehme,” *Philological Quarterly*, no. 70 (1991), pp. 219-35; “The Poet and the Mystic: Ralph Waldo Emerson and Jakob Böhme,” *Zeitschrift für Anglistik und Amerikanistik*, vol. 53, no. 4 (Jan. 2005), pp. 333-52などを参照。

ルリッジによって積極的に受容され、18世紀後期から19世紀前期のヨーロッパの思想状況を背景にした学術用語を用いながら吟味・検討され、ロマン主義思想として再構成された上で、大西洋を隔てたニューイングランドのエマソンの超越主義思想の形成に直接的な影響を与えたという事実関係を確認することが出来た。そして環大西洋的な視点からヨーロッパの思想家のエマソンに対する影響関係を考察することを通じて、エマソンの思想をベーメを代表とするキリスト教神秘主義思想の流れのなかに位置付けるという当初の目的を、一定程度は達成することが出来たのではないかと思う。さらにドイツ観念論哲学の哲学者シェリングもまた、ベーメの思想をエマソンに伝達する役割を果たしたと考えられるが、このテーマについての詳細な考察は今後の研究の課題としたい。

※本稿は2020年度日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究C、研究課題：グローバル・エマソン、課題番号：19K00464）による研究成果の一部である。

英国における財務報告の法執行制度の設計 —キングマン報告書とFRCの改組の提言—

金 賢仙 (KIM HYONSON)

1 はじめに

金融・資本市場法制及び企業法制の領域において、法執行をどのように行うかという問題（法執行の制度設計という問題）は、——法令上にどのような条文を置くかという点と同様に——重要な意義を有する^{1・2}。

英国では伝統的に、法執行の制度設計上、自主規制^{3・4}を重んじてきたが、2008年金融危機以降、2012年金融サービス法によりFSA（Financial Service Authority、金融サービス機構）がFCA（Financial Conduct Authority、金融行為規制機構。以下、FCAという。）に改組され、銀行業及び証券（行為）規制の領域において、行政機関主体による法執行体制の強化が図られてきた⁵。近年、財務報告、会計監査の領域でもその傾向が見られる。

2018年に新たに公表された「財務報告評議会に関する独立レビュー」（Independent Review of the Financial Reporting Council、以下、公表者の氏名からキングマン報告書という。）⁶では、会計監査業を「自主規制が機能し得ない」⁷領域として名指しした上で、規制主体の刷新、関連領域の法改正も含めた83項目もの抜本的な改革を提言しており、実現すれば、英国特有の規制スタイルを含め、大きな変化をもたらすこととなる。目下（2020年4月時点）、これら提言について、英国ビジネス・エネルギー・産業戦略省（Department

1 John Armour, *Principles of Financial Regulation* (English Edition, OUP 2016) 597

2 金賢仙「欧州における国際会計基準に関する法執行—金融危機後の制裁の体制の調和とESMAガイドライン—」『企業法の現代的課題』成文堂（2015）199-219頁。

3 河村賢治「英国上場規則における公開会社法」早法第76巻第4号（2001）130-134頁。

4 John Armour, *Enforcement Strategies in UK Corporate Governance: A Roadmap and Empirical Assessment*, ECGI Working Paper Series in Law, Working Paper No.106/2008 (2008) 17-20

5 Louis Gullifer & Jennifer Payne, *Corporate Finance Law - Principle and Policy* (2nd Edition, 2015) 518

6 John Kingman, *Independent Review of the Financial Reporting Council* (2018)

<https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/767387/frc-independent-review-final-report.pdf> accessed 20 April 2020

7 Kingman (n 6) para 2.2

for Business, Energy & Industrial Strategy. 以下、BEISという。)が35項目を可及的速やかに実施すること、13項目を検討をした上で実施する可能性のあること、35項目につき立法措置が必要という見解を示した諮問書⁸を公表している。

本稿では、英国でなぜこういった状況が生じたのかを整理するために、キングマン報告書の内容を軸に、財務報告の法執行の制度設計に関する英国の近時の状況について検討を試みる。

キングマン報告書の内容は、①現存の財務報告評議会 (Financial Reporting Council. 以下、『FRC』という。)に代えて新しい規制機関 (Accounting, Reporting and Governance Authority. 以下、『ARGA』という。)を創設すること、②企業の会計不正に対する規制の強化、③監査及び職業専門家の規制の強化の3方面にわたる。本稿では、①と②を取り上げることにしたい⁹。

以下では、まず、キングマン報告書の公表の背景となった上場企業の破綻の事案について確認し、追って、上記①と③それぞれの内容について整理を行う。

2 キングマン報告書の公表の背景

2-1 カリリオン社の破綻

少数の企業の事案が規制・制度に何らかの変化を及ぼすことは、——その是非は措くとして、——珍しいことではないが、キングマン報告書が公表された背景にもある企業の破綻がある。カリリオン社 (Carillion plc.¹⁰) 破綻の事案である。

キングマン報告書は、直接的に同社の破綻の事後処理のために作成されたものではない。しかし、同報告書で示された企業の財務報告に関する施策の多くは、同社の破綻に関して設置された英国議会の特別委員会、関連する規制当局の調査の内容を汲み入れて発展させたものとなっていることから、カリリオン社破綻事案との関連性が極めて強いといえる。

カリリオン社の破綻が、なぜ、財務報告や会計監査の規制機関の刷新という改革の提言にまで至ったのかというと、同事案が英国社会にもたらした影響度の大きさを挙げること

8 Department for Business, Energy & Industrial Strategy, Independent Review of The Financial Reporting Council, Initial Consultation on the Recommendations, Closing Date: 11 June 2019 (2019)

<https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/784988/independent-review-financial-reporting-council-initial-consultation-recommendations.pdf> accessed 20 April 2020

9 ③監査規制について。関川正ほか「英国の監査規制等をめぐる最近の動き①」会計・監査ジャーナル第764号 (2019) 80-85頁、関川正ほか「英国の監査規制等をめぐる最近の動き②」会計・監査ジャーナル第765号 (2019) 25-31頁、関川正ほか「英国の監査規制等をめぐる最近の動き③」会計・監査ジャーナル第766号 (2019) 18-23頁、関川正「英国の監査規制等をめぐる最近の動き④」会計・監査ジャーナル第768号 (2019) 24-29頁。

10 英国政府の会社局 (Companies House) での登録番号は、3782379。

ができる。同事案に関して、議会下院（庶民院）には3つの特別委員会¹¹が設けられたほか、4つの規制当局（FCA、破産サービス局¹²、年金規制局¹³、FRC）が調査を実施しており、いわば総出で原因解明と対策を試みたものといっても過言ではない。以下では、これら当局の報告書等の文献をもとに、同社破綻事案の概要と特徴について整理したい。

2-2 カリリオン社の破綻事案の概要

① 基本情報と概要

カリリオン社は、1999年に設立された建設業（国内2番手）と施設管理業を中心に複数の事業を営む多国籍企業（英国、カナダ、中東、北アフリカ地域で事業を展開）であった。ロンドン証券取引所に上場し、FTSE350指数にも組み入れられている代表性のある企業であり、また、公益性事業者（public interest entity, 以下、PIEという。）でもあった。

従前、配当を継続し、好業績を謳っていたものの、2017年に突如、収益面での懸念を表明し、株価は一気に70%も下落した。その後、新規の借入れの模索や政府への救援要請等の再建策を試みたが失敗し、2018年1月、同社の取締役の申立てに基づき、高等法院（High Court）が同社及び26の関連会社の強制清算を宣告した（compulsory liquidation order）。残余財産がほぼないこと、キャッシュインフローを生み出す契約関係は残っていたものの、負債額がそれを遥かに上回っていたことから、事業の再生手続き（administration）は適用されなかった¹⁴。

② 事業内容の特徴：公共サービスの担い手

英国内では、政府部門に様々なサービス（道路や病院の建設、学校給食や防衛施設住居での食事のサービス等）を提供していた。2016年の時点において、政府機関と450件の契約を締結しており、収益の38%が公共サービス由来であった¹⁵。こういったところから、政府の外注先である公共サービスの供給者の破綻が英国社会に及ぼした影響は大きかったということが窺われる。

11 ①ビジネス・エネルギー・産業戦略及び労働・年金委員会（Business, Energy and Industrial Strategy and Work and Pensions Committee）による調査（2つの委員会の合同型）。報告書は、Energy and Industrial Strategy and Work and Pensions Committees, *Carillion* (HC2017-19, 769)。②行政・憲法問題委員会（House of Commons Public Administration and Constitutional Affairs Committee）による調査。報告書は、House of Commons Public Administration and Constitutional Affairs Committee *After Carillion: Public Sector Outsourcing and Contracting* (HC2017-19, 748)。③連絡委員会（Liaison Committee, 各特別委員会の議長が主たる構成員となるもの。）による聞き取り調査（各省庁横断型）。詳細については、下記を参照（2020年4月20日時点）。

<https://www.parliament.uk/business/committees/committees-a-z/commons-select/liaison-committee/news-parliament-2017/carillion-collapse-cross-government-evidence-17-19/>

12 The Insolvency Service.

13 The Pensions Regulator.

14 House of Commons Library, *The Collapse of Carillion, Briefing Paper No.8206, 14 March 2018* (2018) 7-14

15 <https://www.gov.uk/government/news/government-protects-essential-public-services-as-carillion-declares-insolvency>を参照（2020年4月20日時点）。

英国では、公共部門の事業発注に関して、2011年に内閣府が新たな事業発注の仕組み——The Crown Representative¹⁶——を採り入れていたが、同社の破綻を受けて、その見直しが検討されている。この仕組みは、英国政府が事業者選択をする際に、公共部門側のニーズの適切な伝達、省庁横断型での受注、コスト削減、事業者間の連携という要素を考慮しながら、「政府が1つの顧客として行動することをサポートする (help the government to act as a single customer)」役割を果たすというものである。戦略的事業供給者 (the strategic suppliers) を選定した上で事業者らのネットワークが構築される。(事業者の一覧は政府のウェブサイト上で公開される。) カリリオン社は、この戦略的事業供給者の1つであった。

③ 事業の展開：企業買収による事業の多角化と海外市場での不振

カリリオン社は、企業買収を積極的に行いながら事業の多角化を図ってきた¹⁷。企業買収のその多くが、のれん計上を伴うタイプのものであると同時に、多額の年金支払い義務を承継する形態のものであった¹⁸。また、資金調達を多くを借入に頼っていたが、取締役は、その事自体に対して楽観的であり懸念を抱いていなかった。ほかに、多国籍企業として、海外でも事業展開を行ってきたが、特に中東地域での業績は芳しい結果をもたらさなかった¹⁹。

こういった経営の実態について、ビジネス・エネルギー・産業戦略及び労働・年金委員会の報告書 (以下、BEIS報告書) では、「破綻したという事実よりも、[危ない状況のまま] どのようにしてそれほど長く持ちこたえられたのかが、謎である。」との言及がなされるに至っている²⁰。

④ 財務の状況、配当性向

同社の財務の状況についてみると、2008年には金融危機の影響でいったん減益となったが、持ち直し、2014年以降は1株あたり利益 (EPS) が向上した。利益率は5~6%ながら、市場では、「同業他社と比べて魅力的」 (attractive relative to peers) と受け止められていた²¹。しかし、2009年12月を皮切りに借入額が膨らみ、2016年には、負債比率が5.6 (一般的な正常値は2程度) に至っていたほか、流動比率のレベルも1.0 (一般的な正常値は1.2程度) となっていた²²。

乱高下するその業績からすると無理を伴うものであったにも関わらず、1999年の設立以

16 詳細については、<https://www.gov.uk/government/publications/strategic-suppliers>を参照 (2020年4月20日時点)。

17 2006年2月以降、Mowlem社 (買収額：3億5千万ポンド)、Alfred McAlpine社 (買付額：5億6千5百万ポンド)、Eaga社 (買収額：2億9千8百万ポンド)。Energy and Industrial Strategy and Work and Pensions Committees (n 11) paras 5-6

18 ibid para 7

19 ibid para 12

20 ibid para 14

21 ibid para 77

22 ibid para 78

降、連続して配当を行っていた。配当額をカバーできるキャッシュ・フローを確保できていないにも関わらず、配当を継続しており、特に2012年、2013年には、キャッシュ・アウトフローが多額であったにも関わらず配当がなされるという実態があった²³。

⑤ 2017年の注意喚起と株価の70%の下落

2017年7月10日、同社は突如、収益の額に関する注意喚起（9月の中間決算での契約の評価額を8億4,500万ポンド下方修正すること）とともに、最高経営責任者の辞任、配当の停止を公表した。その後、追加的に、契約評価額を2億ポンド下方修正することが公表された。これらの契約評価額の下方修正により、過去7年間の収益が帳消しとなった上、4億5000万ポンドの純負債が計上されることとなった。さらに、約9億6,100万ポンドの負債を計上するほか、資産計上されていたのれんを1億3,400万ポンド減額することも同時に公表されたが、その結果として、流動比率（working capital ratio）は0.74に低下した。

同社の株価は、7月7日から12日までに70%下落（197ポンドから57ポンド）し、破産の申立てをした時点では最終的に14ポンドにまで下落した²⁴。

⑥ アグレッシブな会計処理の方針

こういった会計数値の急激な下方修正は、同社がそれまで採っていたアグレッシブな会計処理の方針に起因していたとされる。同社の収益の多くは、工事契約を源泉としており、多くの見積もり項目を伴う工事進行基準による会計処理を必要とする。同社は、これらに関して、実際に収益が発生する前に、収益（及び利益）について楽観的な見積りを行っていた。その見積り予測が正しければ特に問題は生じないが、仮に費用が上昇し、収益が減少した場合には、当然ながら、大きくマイナスへと転じる。カリリオン社の会計処理はその典型であったとされ、政府の連絡委員会では、会計検査院の検査官（Comptroller and Auditor General）によって、「カリリオン社の内情が明らかになれば、かなりアグレッシブな会計処理がなされていたことを知るようになるだろう。」との言及が敢えてなされるまでに至っている²⁵。

⑦ 監査法人—KPMGの“加担”

1999年以降、カリリオン社は、約19年間、KPMG監査事務所（KPMG LLP。以下、KPMG）による監査を受けてきた（監査報酬額は約2,900万ポンド。このほか、税務その他保証サービスも提供）。英国では、監査人の継続在任期間に関しては、EU規則の影響下、強制入札とローテーション制度が導入されており²⁶、FTSE350企業には10年ごとの強制入札の実施と監査人の最長継続任期を20年とすることが求められていた。しかし、同社とKPMGは、経過措置の下で2024年までカリリオン社に対する監査を継続することが可能

23 ibid paras 15-16

24 ibid paras 79-80

25 ibid paras 81-82

26 金融庁「監査法人のローテーション制度に関する調査報告（第一次報告）平成29年7月20日」（2017）15-16頁。https://www.fsa.go.jp/news/29/sonota/20170712_auditfirmrotation/02.pdfにて入手可能（2020年4月20日時点）。

となっていた。議会の報告書では、「このような長い任期からして、高品質の監査に不可欠な独立性と客観性を提供できるかどうか疑問」と指摘されている²⁷。

BEIS報告書によれば、KPMGは、監査期間中に、工事契約の収益の認識が最も重要なリスクであることを認識しており、2016年の監査報告書で言及していた。しかし、その説明では、工事契約に伴う固有のリスクを一般的な用語で解説し、リスク軽減のために実行される一般的な監査手順を説明したものに過ぎず、カリリオン社の異常に楽観的な見通し（unusually optimistic outlook）を指摘するものではなかった²⁸。

なお、FRCが行う監査の年次品質レビュー（AQR：annual audit quality reviews）では、KPMGが行う監査において、収益の認識テスト、のれんの減損テストに弱点のあることも指摘されていた。

KPMGは、監査期間中に、一度も監査意見を「限定付適正（qualify）」とすることはなかったが、工事契約、収益認識、のれんの処理について、警告をする余地はあったはずであるところ、会計判断に対する職業専門家としての猜疑心を適切に働かせることをしなかった。BEIS報告書では、KPMGがカリリオン社によるアグレッシブな会計処理に加担（complicit in）したと指摘されるに至っている²⁹。

⑧ 取締役の責任—2006年会社法第172条の義務違反

英国2006年会社法第172条³⁰は、会社の成功を促進すべき義務を定めるものであり、取締役の一般的義務の1つとして、会社の成功を促進すべき義務を新たに規定し、その義務の履行において株主以外の従業員や取引先、地域社会等の利害関係者（stakeholders）

27 Business, Energy and Industrial Strategy and Work and Pensions Committees (n 11) para 116

28 ibid para 120

29 ibid para 124

30 中村信男ほか「イギリス2006年会社法(2)」比較法学第41巻第3号（2008）203頁。訳文を以下に引用した。

「第172条 会社の成功を促進すべき義務（Duty to promote the success of the company）

(1) 会社の取締役は、当該会社の社員全体の利益のために当該会社の成功（success）を促進する可能性が最も大きいであろうと誠実に考えるところから従って行なうべき行為をしなければならない。

(a) 一切の意思決定により長期的に生じる可能性のある結果（the likely consequences of any decision in the long term）

(b) 当該会社の従業員の利益

(c) 供給業者、顧客その他の者と当該会社との事業上の関係（business relationships）の発展を促す必要性

(d) 当該会社の事業（operations）のもたらす地域社会（the community）および環境への影響

(e) 当該会社とその事業活動（business conduct）の水準の高さに係る評判を維持することの有用性（desirability）

(f) 当該会社の社員相互間の取扱いにおいて公正に行なうべき必要性

(2) 会社の目的（the purposes）が、その社員の利益以外の目的から成るとき、または社員の利益以外の目的を含む限りにおいて、第1項は、当該会社の社員の利益のために当該会社の成功を促進するとは、当該目的を達成することをいうものとしてその効力を有する。

(3) 本条により課される義務は、取締役に対し一定の状況において当該会社の債権者の利益を考慮しまたは当該会社の債権者の利益において行なうべき行為を要求する一切の法規（enactment）またはコモンロー・ルール（rule of law）に従うことを条件として、効力を有する。」

の利益が考慮される必要がある旨を明言したものの³¹であるが、カリリオン社の取締役らには同条の義務違反の可能性があること、その事を取締役会が認識していた旨が指摘されている。

BEIS報告書によれば、①同社のビジネスモデルが企業の長期的な戦略的利益を追求するものというよりむしろ、都度、の新規事業立上げを頼りにしたものであり、②取引先との事業慣習が不適切（特に、小規模な取引先に対する支払い遅延。）で事業活動レベルの評判を維持するものではなく、③従業員の年金原資の拠出の管理が不適切であったこと等を問題点として指摘した上で、「従業員の利益、取引先や顧客との関係、高レベルの行動、会社全体の長期的な持続可能性を十分に考慮していたと結論付けるのは困難」と断じている。同時に、そもそも、「2006年会社法第172条による抑止効果は、…取締役の行動に影響を与えるには十分ではなかった」との指摘もなされている³²。

⑨ 雇用関係と年金

破綻時の従業員数は、約43,000人（うち、英国内は19,000人）に上り、川下事業でも多くの雇用関係が存在していた。BEIS報告書の公表の時点（2018年5月）で2,000人が失業した。同社が負う年金支払い義務の対象額は、26億ポンド（破綻時）であったところ、英国年金保護基金（Pension Protection Fund）による救済措置の下、27,000件の支給額減額が余儀なくされた。

⑩ 政府によるペール・アウト—公金の投入

破綻後、同社が担っていた公共サービスの維持のために、政府は、1億5千万ポンドに上る公金（tax payer's money）を投入している。

⑪ 関連事象の時系列表

以下に、カリリオン社破綻事案に関する事象を表にまとめた（表 カリリオン社破綻の関連事象）。

表 カリリオン社破綻の関連事象

2006年2月	Mowlem社を3億5000万ポンドで買収。
2007年4月	リチャード・アダム氏（Richard Adam）が財務担当取締役（Finance Director）に着任。
2008年2月	5億5,600万ポンドでAlfred McAlpine社を買収。
2009年12月	リチャード・ハウソン氏（Richard Howson）が取締役に着任。
2010年9月	ハウソン氏が最高経営責任者（Chief Executive）に着任。取締役会の構成員となる。
2011年4月	Eaga社を2億9,800万ポンドで買収。
2011年6月	フィリップ・グリーン氏（Philip Green）が非業務執行取締役（Senior Non-Executive Director）に着任。取締役会の構成員となる。

31 中村信男ほか「イギリス2006年会社法(2)」比較法学第41巻第3号（2008）192頁。

32 Business, Energy and Industrial Strategy and Work and Pensions Committees (n11) para 166

2012年1月	ハウソン氏が最高経営責任者に着任。
2013年12月	アリソン・ホーナー氏 (Alison Horner) が非業務執行取締役に着任。取締役会の構成員となる。
2014年5月	グリーン氏が取締役会議長 (Chairman) に着任。
2015年7月	キース・コクラン氏 (Keith Cochrane) が独立・非業務執行取締役 (Senior Independent Non-Executive Director) に着任。
2016年12月	アダム氏が財務担当取締役 (Finance Director) を退任。
2017年	
1月1日	ゼファー・カーン氏 (Zafar Khan) が財務担当取締役に着任。取締役会の構成員となる。
3月1日	2016年度の年次報告書と計算書類が公表される。
	元・財務担当取締役アダム氏は持株の全てを534,000.19ポンドで売却。
3月末～ 4月15日	エマ・マーサー氏 (Emma Mercer) が建設サービス部門の財務担当取締役として英国に戻る。ハウソン氏とカーン氏に懸念事項を伝達。
5月8日	元・財務担当取締役アダム氏にインセンティブ報酬 (2014年からの長期分) が付与されるが、同氏はこれを242,000.21ポンドで売却。
5月	マーサー氏が示した懸念に基づき、売掛金 (receivables) の会計処理を見直し。KPMGによるレビューでは、資産の分類に間違いがあるものの、収益の虚偽記載はないとの結論。このレビューが、のちの契約額の大幅な見直しのきっかけとなる。
6月7日	取締役会は、企業文化、経営と運営に関して、「教訓 (lessons learned)」を公表。
6月8日	取締役会は、新株発行による資金調達についての開示を検討。
6月9日	2016年分の配当 (5500万ポンド)。
7月 4～5日	取締役会議長と取締役に対して、証券会社による新株発行引受が不可能であることが通知されるとともに、7月10日に同社の取引の状況について市場に情報提供できるよう助言を受ける。取締役会議長は、この時点でもなお、市場に対して「前向きで明るい」発表をすることを期待していた。
7月9日	ハウソン氏が最高経営責任者を退任。暫定の最高経営責任者としてキース・コクラン氏が着任。
	取締役会は、2017年中間決算において、契約評価額を8億4,500万ポンド減額する旨を公表することについて合意。
7月10日	契約評価額を8億4,500万ポンド減額のほか、グループの事業および資本構造の包括的な見直しについて公表。
7月12日	7月10日から株価が70%下落。
7月14日	アーンスト・ヤング監査事務所 (EY) が、コスト削減と現金回収に焦点を当てた戦略的レビューをサポートするために招聘される。HSBCが新しい引受人となる。
8月	取締役会が短期の銀行借入れの必要性を確認。
9月3日	カーン氏が財務の状況について取締役会に伝達。(取締役らが驚愕とともに事実を受け止める。)
9月11日	カーン氏が財務担当取締役に辞任し、マーサー氏が後任に就く。新しく非業務執行取締役が着任したほか、EYから変革担当役員 (Transformation Officer) が出向。

9月29日	半期報告において、収益の下方修正（2億ポンド）が追加的になされる。
10月24日	年金不足分の抛出の延期が合意される。新たな銀行融資（無担保の1億ポンド、担保付きの4,000万ポンド）が公表される。
11月17日	財務制限条項抵触の可能性のほか、利益額についての注意喚起（3度目）を公表。
12月の最初の週	週次キャッシュフローの見積もりの変更により、短期キャッシュフロー予測を大幅に下方修正。
12月11日	筆頭株主が持株の半分を売却。
12月22日	融資者向けのキャッシュフロー予測では、2018年3月の現金が2,000万ポンド未満となっており、無担保の1億ポンドの借入れは、財務制限条項抵触の免責をしなければ困難という状況に。
12月下旬	新たな資金の貸し手は、同社が政府への支援要請を行わない限り、財務制限条項抵触の免責を行わないことを会社に通知。
12月31日	政府に対し、正式に支援要請を行う。
2018年	
1月3日	FCAは、2016年12月7日から2017年7月10日までにおける同社による情報開示の適時性について調査を開始したことを同社に通知。
1月4日	リストラの状況と短期および長期の資金調達必要性について、政府当局者と協議。
1月9日	2018年1月、2月、3月、4月に予定されていた租税債務の繰延払いの可能性について税務当局と協議を行ったが、決定的な回答は得られず。
1月12日	アドバイザーや弁護士に高額報酬（640万ポンド）を支払う。（KPMGに78,000ポンド、FTIコンサルティングに100万ポンド、EYに250万ポンド他）
1月13日	内閣府（Cabinet Office）に書簡を送り、1000万ポンドの即時の支援を含めた合計1億6000万ポンドの支援を要請。
1月14日	内閣府は、同社の支援をする考えのないことを通知。
	取締役会は、破産を決定。
1月15日	支払い不能を理由として、同社の取締役が会社の強制解散を裁判所に申立て。裁判所は受理し、同宣告をした。
	政府は、清算を支援するために、破産管財人への支払い用として1億5000万ポンドを提供することを公表。
1月16日	国務大臣である下院議員グレッグ・クラーク氏が、倒産サービス局と破産管財人に対して、同社の破綻の原因及び取締役の行動についての調査を早急に進めるよう要請。
1月18日	年金規制局（The Pensions Regulator）が同社の年金の抛出状況についての調査を開始。
1月24日	ビジネス・エネルギー・産業戦略及び労働・年金委員会が同社の経営、ガバナンス、年金、諸法令及び規制、政策への影響についての共同調査を開始。
1月29日	FRCが2014年、2015年、2016年におけるKPMGによる監査について調査を実施。
3月19日	FRCがアダム氏とカーン氏による財務諸表の作成及び承認に関して調査を実施。

（ビジネス・エネルギー・産業戦略及び労働・年金委員会の報告書掲載の資料³³を元に作成。）

33 Business, Energy and Industrial Strategy and Work and Pensions Committees (n 11) para 4

2-3 小括—カリリオン社破綻事案の特徴

カリリオン社の破綻事案の特徴として、①多種多様なステークホルダーとの繋がり深い、いわば社会的公器の役割を担う大規模な企業の破綻であったこと、②そのような企業が、それまで安定的に配当まで行い、見栄えのよい財務報告情報を開示したわずか4か月後に、突如、収益の源泉となる契約の評価額を下方修正し（当初は8.45億ポンド、のち、10.45億ポンドにまで膨張）、株価が約70%下落した上、その約4か月後には70億ポンドもの負債（現金残存額は2,900万ポンドのみ）を抱えたまま、倒産手続きを行ったという2点を挙げるができる。

カリリオン社は、ロンドン証券取引所の上場会社（FTSE指数の対象企業）であっただけでなく、政府による公共サービスのアウトソース先であることから破綻処理の過程でも受託公共サービスの運営の維持が求められたこと、国内外を問わず多くの雇用関係を擁していたため多くの失業者が出たこと、様々な取引先との関係があったこと、退職者年金の原資拠出者であったこと等から、英国社会へのインパクトが極めて大きかった。その結果、同社の破綻への対応として、下院に3つの特別委員会が設置されたほか、4つの規制当局（FCA、破産サービス局、年金規制局、FRC）が調査を実施するに至り、英国議会と政府とがいわば総出で原因解明と対策を試みるに至った。

本稿の検討対象の①財務報告の法執行のための新しい規制機関の創設、②企業の会計不正に対する規制の強化という施策は、同社の破綻を受けて採られた一連の諸施策のほんの一部に過ぎないと見ることもできる。

次章以降では、これらについて、どのような施策や提言がなされていたのかについて検討する。まず、現行のFRCによる法執行体制を確認したのち、新たな動きについて整理したい。

3 財務報告の監督と法執行の体制の動向

3-1 現行の体制の概要³⁴

3-1-1 FRC創設の経緯と業務領域の漸増

FRCは、1990年に創設された。創設当初は、会計及び財務報告基準（accounting and financial reporting）の設定主体としての役割を果たすことが念頭に置かれていた。FRCの設置以前、会計基準の設定と監督は、英国の（当時の）6つの職業専門家団体が資金を拠出する会計士団体諮問委員会（Consultative Committee of Accountancy Bodies）³⁵によってなされていたところ、独立性の懸念がディアリング卿（Sir Ron Dearing）による報告書（1988年に公表）によって示され、これへの対応としてFRCが創設されるに至っ

34 金賢仙「国際会計基準（IFRS）に係る法執行—英国財務報告評議会（FRC）によるレビューを素材として—」グローバルマネジメント第1巻（2019）30-33頁。

35 訳語は、中川美佐子『イギリスの会計制度』千倉書房（1982）51頁を参照。

た³⁶。

以降、会計基準設定主体の役割のほか、その取扱い領域が徐々に拡張することとなる。1992年には、上場企業のコーポレート・ガバナンス領域の業務を取り扱うこととなり³⁷、2005年以降は、監査、保険数理士の規制及び基準設定も業務領域に追加され³⁸、2010年には、機関投資家の受託者責任に関して英国スチュワードシップ・コードを公表している³⁹・⁴⁰ほか、今日では、地方公共部門の監査や監査人総監（Auditor General）の独立した監督に関連する様々な機能までも背負うこととなっている。

3-1-2 FRCの有する権限とMoU

現在、FRCが有する権限には、①特定の制定法による授権、②関係者間の自発的な取決めに基づくものがある。

特定の制定法による授権（上記①）の例としては（本稿の問題関心との関係では、）次の2領域を挙げることができる。

1つ目の領域は、金融・資本市場における情報開示の領域である。英国では、2000年の金融サービス市場法⁴¹・⁴²のパート6に基づき、FCAが諸規則（上場規則、開示規則、目論見書規則）を定めているが、FRCは、同規則上のFCAによる法執行に関して、所定の財務報告の要件を証券発行者等が遵守しているかどうかを監督する者として指定を受けている⁴³。

FRCとFCAとの間の協調関係の委細は法令上に定めを置く形ではなく、覚書（Memorandum of Understanding、以下、MoUという）⁴⁴をベースとした運用がなされているのが特徴といえる。以下、MoUの内容を簡単に確認する。

同MoUでは、まず、両者それぞれの役割及び責任とその法的根拠について確認（MoUのパラグラフ6.-12.）した上で、両者間の情報共有（同13.-18.）、守秘義務（同19.-24.）、協力（同25.-39.）、協調（同40.,41.）について定めている。次に、両者が協力をし合う領域として、①基準及び各種コード設定の領域での協力（同25.-29.）、②監視と監督面での協力（para 30.）、③法執行に係る調査面での協力（同31.-36.）、④FRCによる職業専門家

36 Kingman (n 6) para 1.1

37 キャドバリーによる報告書（1992年に公表）を受けたもの。英国コーポレート・ガバナンス・コードに繋がる。Kingman (n 6) para 1.2

38 保険数理士に関する役割は、モリス報告書を受けたもの。Kingman (n 6) para 1.3

39 ウォーカー報告書（2009年）を受けたもの。ibid.1.3

40 村澤竜一「英国における機関投資家のエンゲージメントーハードローとソフトローによるスチュワードシップの推進」商学研究論集第49号（2018）147-148、157-158。

41 Financial Services and Markets Act 2000, c 8

42 訳文については、証券経済研究所『新外国証券関係法令集イギリス 2000年金融サービス市場法』（日本証券経済研究所、2011）1-590頁を参照した。

43 The Supervision of Accounts and Reports (Prescribed Body) and Companies (Defective Accounts and Directors' Reports) (Authorized Person) Order2012 (SI 2012/1439) art 4 (the Order 2012).

44 Memorandum of Understanding between the Financial Reporting Council (FRC) and the Financial Conduct Authority (FCA).

<https://www.fca.org.uk/publication/MoU/MoU-frc.pdf>（2020年3月時点）

の監督という領域での協力（同37.-39.）について定めている。MoUの法的性質は、契約ではないこと、法的な拘束力をもたらすものではないこと等が示されており、書面による双方の合意により終結し得る（同43.）ものとされている。

なお（後に検討するが、）、このようなMoUによる繋がりでは、法執行の際にFRCが企業に対して採ることのできる手段が限定的になり得る等の問題が生じることから、改善策が提案されるに至っている。

特定の制定法による授権（上記①）の例の2つ目の領域は、会社法の領域である。FRCは、会社法に基づく会計基準の設定主体でもあり、会計基準違反の財務報告を行った会社に対する是正勧告や裁判所の是正命令への付託権限が付与されている⁴⁵組織でもある。英国2006年会社法^{46・47}第455条(1)項及び同(2)項では、国務大臣は、会社の計算書類等が会社法の求める会計基準に適合しているかどうか疑念のあるときに、会社に対して、通知をすることができる⁴⁸とされている。会社の取締役がこれに対して十分な説明をできないとき、又は会社法又は国際会計基準規則第4条を遵守するように訂正を行わないときには、国務大臣は、裁判所に対して申立てを行うことができる（第455条第(4)項）。これらの国務大臣の権限は、国務大臣自体によっても行使され得るが、授権を受けた組織が行使することも可能とされている（第456条第(1)項(a)及び同(b)）。FRCの行為監督委員会は、2012年に公布された命令⁴⁸により、その授権を受けている（会社法第457条(1)項、同(2)項及び同(6)項）。

関係者間の自発的な取決め（上記②）としては、会計士、保険数理士という職業専門家ないし職業専門家の団体との関係を挙げることができる。

FRCは制定法由来のものも含めたこれらの権限を行使するが、その一方で、FRCが何らかの法令上の拘束を受けることはないものとされている⁴⁹。

3-1-3 FRCの組織形態と特徴、活動財源

FRCは、保証有限責任会社（company limited by guarantee）⁵⁰として創立され、今日に至る。組織形態こそ会社という形をとっているが、上でみたとおり、様々な法令上の権限が付与されているほか、諸ルールの策定と公表も行っており⁵¹、その役割からみると、規制主体としての重責を担っているにも関わらず、存在そのものについて、制定法上の根拠を有さない。自主規制機関の中でも珍しい部類の組織とされる⁵²。

45 川島いづみ「コーポレートガバナンス・コードと英国会社法」ビジネス法務第16巻1号（2016）107頁。

46 Companies Act 2006, c. 46

47 訳語については、イギリス会社法制研究会（代表者 川島いづみ）「イギリス2006年会社法(1)」比較法学41巻2号（2008）362-363頁を参照した。

48 The Order 2012, art 4

49 Kingman (n 6) para 1.8

50 訳語については、イギリス会社法制研究会（代表者 川島いづみ）「イギリス2006年会社法(1)」比較法学41巻2号366頁を参照した。

51 川島いづみ「コーポレートガバナンス・コードとイギリス会社法」『現代商事法の諸問題』成文堂（2016）249-250頁。

52 Kingman (n 6) para 1.8

FRCの財源は、制定法に基づいた資金拠出（多くが会計の職業専門家団体による）と寄付（大規模上場企業、年金機構、保険会社によるもの）とに依拠している。この財源のあり方も批判の対処となった（後述）。

3-2 カリリオン破綻事案の調査におけるFRCへの批判

カリリオン社の破綻事案の調査では、FRCと規制の仕組みについて、痛烈な批判がなされた。その内容は、本稿の検討対象のキングマン報告書の土台となっているので、簡単に内容を確認する。

ビジネス・エネルギー・産業戦略及び労働・年金委員会の報告書では、カリリオン社の破綻事案を現行の規制システムが機能しているかどうかのテストと表現した上で、現在のFRCが強力な規制手段を欠くと同時に、行使し得る権限でさえ積極的に活用していないこと、さらに、能動的に働きかけて破綻を防ぐという方向ではなく、単に、事後に責任を分散させることだけに甘んじた状態にあると指摘している。同社の破綻事案の以前にも、FRCによる企業への法執行が十分になされ得ない状況への対策が必要との勧告がなされてきたが、FRCはFCA及び破産サービス局と協力して法執行を行うことができるので別段の権限強化は不要とした当時の国務長官の見解の下、退けられてきたという経緯のあったことを紹介した上で、現行の規制のあり方を問い直している。

まず、対企業の規制当局の数そのものが多すぎることで、それぞれの責任は重複しているものの目的と計画とに少しずつずれのあること、MoUをベースとした規制手法（MoUについては、本稿3-1-2を参照。）には限界があり、4つの規制当局が共通の目標を追求するために調和して協力することを期待することは非現実的であるとの指摘をしている⁵³。

また、前節でみたように、FRCが複数の領域の業務を取り扱っているため、役割に混乱のあること、現在のFRCは、（カリリオン社事案のような）杜撰な監査と会計処理への抑止力がなく、むしろ、規制対象（特に会計士、監査法人）に過度に同情的（too sympathetic or close）だという見解を払拭できない状態にあるとの言及もある⁵⁴。

その上で、FRCのそもそもの存在意義を問うような指摘——現在のFRCは、適切な財務報告、良好な企業行動、企業の存続との間に繋がりのあることを理解していないように映る、という痛烈な指摘をしながら、FRCがより積極的な規制当局となるに必要な権限を付与すべきとの見解を示すとともに、FRCの権限と有効性についての政府によるレビューを歓迎すると言明している。

なお、上記の政府によるレビューとは端的にキングマン報告書を指しているものと考えられることから、同報告書とカリリオン社破綻事案との関係がとりわけ深いことが窺える。

53 Energy and Industrial Strategy and Work and Pensions Committees (n 11) paras 188-189

54 ibid para 191

4 キングマン報告書による分析と提言

4-1 キングマン報告書とは一経緯と位置づけ

ここまで検討してきたように、カリリオン社破綻の事案が契機となり、キングマン報告書が公表されることとなった。以下、その内容を検討するが、その前に改めて同報告書の位置づけを確認しておきたい。

キングマン報告書は、FRCの規制、ガバナンス、透明性及び独立性のあり方についてレビューを実施し、その結果を国務長官、BEISおよびFRC理事会に提出することを求めた国務大臣の要請を受けて作成されたものである。付託内容は、ガバナンス、独立性、利益相反の回避、FRCの説明責任、権限、国際的な影響力の保持、活動財源と人材の正当と多岐にわたる^{55・56}。

本稿の冒頭1でも触れたように、報告書の提出を受けて、国務大臣は、提言それぞれの実現可能性を含めた回答を行った諮問書（以下、大臣回答諮問書）⁵⁷を公表し、パブリック・コメント募集に付している。

キングマン報告書の内容は、大きく分けて、①FRCに代えて新しい規制機関を創設すること、②企業の会計不正に対する規制の強化、③監査及び職業専門家の規制の強化の3方面にわたる。本稿冒頭で述べたとおり、①と②の内容を取り上げることとしているので、順に検討する。検討にあたっては、大臣回答諮問書の回答についても簡単に確認する。

4-2 新規制機関ARGAの設置と責務に関して

4-2-1 キングマン報告書による提言

① 新規制機関の設置に関して

キングマン報告書は、FRCに代えて、制定法上の明確な権限と目的を持つ独立した新しい規制機関を創設すべき提言している（提言1）。その名称として、監査、報告及び企業統治監督機構⁵⁸（Audit, Reporting and Governance Authority. 以下、ARGAという。）

55 キングマン報告書本体と関係する文書について。

<<https://www.gov.uk/government/publications/financial-reporting-council-review-2018>> accessed 20, April, 2020.

56 レビュー実施の要請に関する文書。Independent Review of the Financial Reporting Council (2018), Terms of Reference.

<https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/700173/frc-independent-review-tor.pdf> accessed 20, April, 2020.

57 Department for Business, Energy & Industrial Strategy, Independent Review Of The Financial Reporting Council, Initial Consultation on the Recommendations, Closing Date: 11 June 2019 (2019)

<https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/784988/independent-review-financial-reporting-council-initial-consultation-recommendations.pdf> accessed 20 April 2019

58 金融庁の議事録では、監査財務報告企業統治監督機構との訳例が示されている。金融庁・企業会計審議会総会・第43回監査部会議事録（平成31年3月28日（木曜日）開催分）〔八田発言〕

https://www.fsa.go.jp/singi/singi_kigyousoukaikou/soukai/20190328.html.

を提案している（提言3）。

ARGAの権限ないし英国議会及び政府との関係については、FCAに倣って、各議会の会期毎に政府からの権限付託書簡（remit letter）の交付を受けて、これに基づき、制定法上の権限、目的及び規制対象を画すること、また、当該権限付託書簡に対してARGAが正式に回答することを提案している（提言2）。

監査、財務報告及び企業統治の規制の役割を1つの組織に担わせずに分化するという案もあったが、3領域を1つの組織が監督することにシナジー効果があると整理されている。また、FCAとの統合案も検討されたが、FCAの既存の管轄領域が多岐に渡ることから、上記3領域の追加は困難との見解が示されている。因みに、諸ルール及び基準の設定と法執行と2つの役割を同時に兼務することによって生じ得る対立に関しては、弊害よりもむしろ、よりよい結果をもたらす可能性が高いと結論づけている⁵⁹。

② 責務に関して

キングマン報告書は、新規規制機関の中核的な責務として、a 企業統治、財務報告及び監査の領域でのリスクを予測して適切に対応すること、b 法定監査サービスの市場の競争促進、c 財務報告の簡潔性、包括性、有用性の促進、d 規制対象者に対応しきれぬ各種資源を確保すること、e 規制におけるコストとメリットとのバランスをとること、f 内外を問わず、他の規制当局と緊密に連携すること、g リスクに基づいて規制の優先順位を考慮することを挙げている（提言5）。

その上で、a 企業統治、財務報告及び監査に係る高品質な基準を設定して運用する、b 監査専門職の登録を規制し、責任を負う、c 英国のコーポレート・ガバナンス・コード、スチュワードシップ・コードを維持しつつ発展させ、コードの遵守状況について毎年報告する、e 投資家や他の情報利用者らとの幅広い関係を維持する、f 監査サービス市場（監査報酬の動向、非監査業務からの報酬の範囲、監査の質への影響等）の動向を監視して報告する、g 公益の懸念がある場合に会社の業務を調査する調査官を任命するといった役割も追加して担うよう主張している（提言6）。

4-2-2 大臣回答諮問書での回答

大臣回答諮問書は、キングマン報告書による提言を①BEISとFRCとが速やかに実施可能、②一旦検討した上で実施可能、③立法措置が必要のカテゴリーに分類している。

前節で挙げた設置に関する提言の中では、提言2を①速やかに実施可能とし、提言1及び同3を③立法措置が必要なものに仕分けている。

責務に関する提言の中では、提言5、同6ともに②一旦検討した上で実施可能なものとしている。

59 Kingman (n 6) 20

4-3 企業の財務報告の不正に対する規制の強化に関して

4-3-1 キングマン報告書による提言

① 新規制当局の権限に関して

キングマン報告書によれば、そもそもFRCは、2006年会社法によって付与された権限（本稿3-1を参照。）を何度か行使して法的手続きを開始したことがあるものの、最終的には和解で終結しており、権限が正面から行使されたことは一度もなかった。それと同時に、FRCによってなされるレビューには一定の不正抑止の効能のあることを認めている。ただし、その対象は、取締役報告書、戦略報告書、年次計算書類のみであり、例えば、コーポレート・ガバナンスに係る声明、取締役の報酬報告等はその対象外となっているといった限界を指摘している。

その上で、新規制機関による企業の財務報告レビューの実施件数を増やすこと（提言24）、裁判所での手続きを介さずに企業の財務報告の是正を求めることができる権限を新規制機関に付与し、権限の強化とタイムリーな法執行とを実現できるようにすること（提言25）、英国2006年会社法の機密扱い条項が障壁となり、FRCによるレビューの結果を公表することができないので、法改正も含めて改善をすること（提言26）、FRCによる財務報告レビュー対象企業群（公開会社と大規模私会社）と監査品質レビュー群（社会的影響度の高い事業（Public Interest Entity, 以下、PIE））とがリンクしていないので、EU法との関係を考慮した上で、対象をPIEに限定すること（提言27）、事前照会手続（pre-clearance procedure）を導入すること（提言28）、リスク分析に基づき、コーポレート・ガバナンス報告書を含む年次報告書全体をレビューの対象とすること（提言29）といった提言を行っている。

このほかに、上場会社による将来予測情報、投資家向けプレス・リリース等の情報に関しても、そもそも監査や規制の対象となっていないことを問題視し、FCAと新設機関とが協力して、投資家に向けた様々な情報の質についての規制を強化するよう提案している（提言30）。

② FRCの公表するガイダンス文書の扱いに関して

FRCは、様々なガイダンスを公表しているが、その中には、専門性に基づいた有用なもの（例として、監査委員会に関係するガイダンス、監査契約入札のベスト・プラクティス・ガイド、リスク管理、内部統制等）もあるが、一部のガイダンス（取締役会の有効性についてのガイダンス（Guidance on Board Effectiveness））は、そもそもFRCの専門性の範疇外の事柄を扱っており、また、企業側に行き過ぎた形式主義的姿勢（bureaucratic mindset）を植え付けるもので負担となっていると指摘する。そして、新規制機関では、ガイダンス等の指針となる文書を公表する際の規律を強化し、有用で、かつ、運用にあたっての便益がコストを明らかに上回る場合にのみ文書を公表するべきと指摘している（提言31）。

③ 財務報告の不正に係る取締役に対する法執行に関して

現在、FRCは、取締役が職業専門家団体の構成員（会計士）である場合を除き、企業の取締役一般に対して法執行を直接的に行う権限を有していないが、このことについては、かねてより、懸念が示されてきた。取締役の責任を追及する方法には、FRC、FCA、破産サービス局の3者間の領域の分担により、いくつかの選択肢がある。①株主による訴訟提起、②破産サービス局による対応のほか、極めて深刻な場合には会社法に基づく刑事訴追、③FCAによる虚偽記載又は市場阻害行為についての制裁、④金融業規制の一環としてのFCA及びPRAによる法執行という各ルートであり、キングマン報告書では、これらに一定の効果があると認めている。

その一方で、職業専門家（会計士）資格を有する取締役と有さない取締役との間の責任のバランスが取れていないことを問題視し、資格保有の取締役に対する制裁のみを強くしてしまうと、取締役となった者に、専門家資格を放棄するという捻じれた動機を与えることとなり、不適切であると指摘する。そして、新規制当局との協力の下、政府がPIEに対する効果的な法執行の仕組みを新たに構築して、それを会社のCEO、CFO、議長（chair）、監査委員会の議長（audit committee chair）にも適用できるよう提言している（提言36）。

また、職業専門家資格を有していない取締役にもFRCによる「監査に係る懲戒処分手続」に示されている行動の基準、多層的な制裁等を適用すべきと指摘し、そのために、新規制当局は監査と報告に関する取締役の責任を定めることを提言している（提言37）。また、現存の破産サービス局による取締役の資格剥奪システムを継続しつつ、新規制機関に、対取締役の調査権限を付与すると同時に、対破産サービス局への報告権限を与えて、両者による緊密な連携の確保を提言した（提言38）。

④ 企業の不正への対処に関して

キングマン報告書は、そもそも会社の失敗・不正は、第一義的には、会社の取締役ら、或いは株主の責任であって、規制当局が企業の好業績と不正防止そのものに責任を負うべきという立場は採っていないことを強調しつつも、FRCの業務は、会社の失敗・不正の回避に貢献するものという認識を示している。そして、現在のFRCは後追い（backward-looking）の手法——公表済みの文書に問題がないかどうか、監査が適切に行われたかどうかを確認するという手法を用いているが、これでは適切に対処できないことがあるので、新規制機関は、事前に働きかける（forward-looking）手法（例として『警告サイン』（“warning signs”）等）を用いることを提案している。例えば、監査品質レビューや企業の財務報告レビューのほか、コーポレート・ガバナンスを通じて、会社の内部の状況と情報を早めに入手し、市場での開示情報と組み合わせるリスクの高い会社につき分析を行うといったアプローチを用いて、潜在的なリスクを特定するための情報分析を早期に行い、現時点でのリスクと将来におけるリスクについての見通しを持つことを提言している（提言44）。

⑤ ゴーイング・コンサーン懸念に関する報告制度の新設に関して

現在、銀行及び保険事業者の監査人は、当該事業者にゴーイング・コンサーンの面で懸念がある、或いはその可能性があるとして認識したときには、PRAに報告をするよう義務付けられているが、キングマン報告書では、この方法をPIEにも適用し、企業の存続可能性や深刻な懸念の有無についての監査人による警告義務を導入すること、規制当局がPIEの監査人との連携を深めることを提言している（提言45）。

⑥ 専門家調査官（skilled person）制度の準用に関して

現在、2006年会社法に基づき、会社の財務諸表、取締役報告書又は戦略報告書が同法を遵守していないときには、FRCは、会社に説明を求める権限を有する。しかし、FRCは、これら法定監査の対象文書と関連しない限り、会社のリスク、システムその他の事項について、より深く調査を行う権限を有していない。他方で、FCAとPRAは、規制当局の行政目的に関係する事項に関して、会社による費用負担の下、専門家調査官（“skilled person”）を会社に派遣して検証を行う権限を有している（2000年金融サービス法166条）。

キングマン報告書では、コーポレート・ガバナンス、会社の報告、法定監査の高レベルの基準を設定し、会社及び所定の基準に適合する職業専門的助言者の責任の下で、投資家の利益及びより広い公益を守るために、同様の専門家による調査制度を導入するほか（提言47）、その専門調査官による報告書を公表する権限を新規制当局に付与し、投資家らの意思決定に利用できるようにすべきと提案している（提言48）。

なお、専門調査官が調査を行う局面として、①監査の判断上、重要な領域での会計処理に懸念のあるとき、②投資家に重大な影響をもたらす懸念のあるとき、③会社のゴーイング・コンサーン面で示された見解とその根拠の信頼性に懸念のあるとき、④コーポレート・ガバナンスの説明が誤導的か不正確で、株主らが誤導された印象を受ける懸念のあるとき、⑤コーポレート・ガバナンスが著しく非効率的であると信じるに足る根拠があるとき、⑥会社の監査委員会が職責を果たしていない、又は業務執行取締役（executive director）の影響を不適切に受けているとの情報のあるとき、⑦内部統制又はリスク管理が著しく不適切であると見えるとき、⑧英国における資本維持の原則にそぐわない、無謀かつ支払い困難となる可能性のある配当が公表されたとき、⑨会社が財務面で存続不能となる可能性がありながら、そのリスクに責任をもって対処していないことが示唆されるときという9つの例を挙げている。

このほかに、キングマン報告書では、専門調査官による調査（inspection）の後に、その内容と結果次第で新規制機関が後続の措置を採る権限を定めるべきとし、後続の措置の例として、①自社の開示と会計について追加的な保証をするよう会社に求める権限、②特定の事項（例として、自社の監査委員会の有効性）について、独立の取締役会（independent boardroom）による評価を行うよう会社に求める権限、③会社に対して、財務面での生存可能性（viability）のリスクについての見解を知らせ、これに対して、再建計画と併せて公式に回答するよう会社に求める権限、④監査人の解任（removal）を命じる権限を挙

げている（提言49）。

さらに、より深刻なときには、新規制当局が、株主らに対して、会社の配当政策を見直すべきこと、CEO、CFO、議長又は監査委員会の議長を変える余地のあること、取締役会の機能を強化すべきことについての報告書を発行することも適当となり得ると指摘している（提言50）。

4-3-2 大臣回答諮問書での回答

企業の財務報告の不正への規制の強化に関するキングマン報告書の提言に対する大臣回答諮問書の回答での仕分けは次のようになっている。

- ① 新規制当局の権限関連では、提言24、同29を速やかに実施可能、提言27、同30を検討したのち実施可能、提言25、同26、同28を立法措置が必要なものと仕分けている。
- ② FRCの公表するガイダンス文書の扱いの関連では、提言31を速やかに実施可能としている。
- ③ 財務報告の不正に係る取締役に対する法執行との関連では、提言36、同37、同38を立法措置が必要なものとしている。
- ④ 企業の不正への対処との関連では、提言44を速やかに実施可能としている。
- ⑤ ゴーイング・コンサーン懸念に関する報告制度の新設との関連では、提言45を立法措置が必要なものとしている。
- ⑥ 専門家調査官制度の準用との関連では、提言47、同48、同49、同50を立法措置が必要なものとしている。

5 むすび

英国では、財務報告に関して、他国（端的には米国）と比べて法執行の結果（例えば、法執行行為や制裁の件数）が比較的少なく、強度が高いとはいえないものと整理されている⁶⁰。その理由は様々だと思われるが、本稿で検討してきた内容からすると、英国特有の制度設計——自主規制を重んじるという手法——がある程度関係していたと考えることができるかもしれない。その答えは、今後、キングマン報告書がどのように具現化されていくかによって、明らかになってくるように思われる。

規制手法として、自主規制機関を用いる理由の1つに情報の非対称性を解消しやすいという指摘⁶¹があるが、本稿で検討したキングマン報告書の提言内容からすると、規制者側の自律性、規制者側と規制対象者との関係性といった要素の如何によって、弊害も生じ得ることが英国において改めて認識されることとなったものと見る事もでき⁶²、金融・資本市場法制の制度設計を検討する上で示唆に富むものと思われる。

60 Louis Gullifer & Jennifer Payne (n 5) 517-519

61 Armour (n 1) 545

62 LIBORの不正に関して。ibid 547-549

The life and remarkable achievements of Anita Roddick, a dreamer, a doer and a female entrepreneur

Hiroko Tomida

Introduction

The name of the British company The Body Shop is well-known internationally and there are over 1,500 of its shops worldwide. However, outside Britain, its founder Anita Roddick remained for some time a relatively obscure figure, especially in Japan. As a consequence, her life and achievements are not widely known as they deserve to be, even to her customers beyond Britain. In terms of sources, there is a considerable amount of material about her in English. For example, she wrote six autobiographical books about her business.¹ Biographies are easily obtainable and her radio and television interviews are also accessible.² Many short articles were written about her, most of which appeared in newspapers and magazines. However, only a limited number of books and articles evaluate her entrepreneurial skills and her achievements from an international perspective. The main objectives of this article therefore are to make an assessment of Anita Roddick's life and achievements,

1 Anita Roddick, *Body and Soul* (London: Ebury Press, 1991); Anita Roddick, *Business As Unusual: The Triumph of Anita Roddick* (London: Thorsons, 2000); Anita Roddick, *A Revolution in Kindness* (Chichester, West Sussex: Anita Roddick Books, 2003); Anita Roddick, *Take It Personally: How to Make Conscious Choices to Change the World* (New York: Harper Collins, 2001); Anita Roddick, *Take It Personally: How Globalisation Affects You and Powerful Ways to Challenge It* (London: Element Books, 2011); Anita Roddick, *The Body Shop Book* (London: Little, Brown Book Group, 1987).

2 Sherry Beck Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur* (New York: Chelsea House, 2010); Rob Alcraft, *Anita Roddick* (Oxford: Heinemann Library, 1998); Paul Brown, *Anita Roddick and The Body Shop* (Watford, Herts.: Exley Publications, 1996); Sean Connolly, *Heinemann Profiles: Anita Roddick Paperback* (London: Raintree, 1999); John Bank, *Women with Attitude* (London: Routledge, 2015); Katharina Maute & Jennifer Borchers, *What Makes a Brand Authentic? The Example of The Body Shop* (München: Grin Verlag, 2013); Jesse Russell & Ronald Cohn, *Anita Roddick* (Norderstedt, Deutschland: Book on Demand, 2012).

and to evaluate the major characteristics of her international company.

This article will be divided into three sections. In the first part, Anita's upbringing, her family and educational background, and her career working as an administrator, a teacher, and the owner/proprietor of a bed and breakfast and a restaurant will be discussed.

In the second part I will focus on The Body Shop, which Anita established in 1976 and built up from one small shop in Brighton into a global business with 1,500 stores throughout the world. First, I will provide background information about the state of the cosmetics industry in the early 1970s, and investigate the reasons why she decided to start a small cosmetics business. Then the main features of both her products and the company's core ethical principles will be examined. Some comparisons will be made between The Body Shop and other cosmetic companies to point out similarities and differences. What impact did The Body Shop have on the field of cosmetics?

The article will next pursue the development of the company, discussing how her business expanded to such a great extent over its first twenty years. What was the key to the great success of her venture? How did she become such a highly successful businesswoman? Where did her innovative ideas come from? What influence did it exert on women and their participation in public affairs and the promotion of women's status? To what extent did her enterprise differ from businesses run by men? These questions will be answered in this article.

In the third part, other aspects of Anita Roddick will be examined. As Rob Alcraft rightly stated, she was more than a businesswoman.³ Indeed she was also well-known as a human rights activist, a campaigner and supporter for many social, political and environmental causes, and a charity worker as well as a philanthropist.⁴ She urged that business can have a kinder face, and stuck to her own principle of rejecting the idea of animal testing.⁵ She argued that it is wrong that thousands of animals should suffer in cosmetics experiments.⁶ Then she campaigned to save the whale and rainforests.⁷ Moreover she became the patroness of many charities, raising

3 Alcraft, *Anita Roddick*, p. 4.

4 Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur*, pp. 7-10; Anita Roddick, Brooke Shelby Biggs et al., *Troubled Water: Saints, Sinners, Truth and Lies about The Global Water Crisis* (Chichester, West Sussex: Anita Roddick Books, 2004).

5 Alcraft, *Anita Roddick*, p. 5.

6 Ibid., p. 5.

7 Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, pp. 31-34.

money for them and donating substantial sums to them.⁸ This article will try to uncover the reasons why she decided to be involved in social activism in the first place, and also discuss her achievements in this field.

Finally, in March 2006 The Body Shop was sold to beauty giant L'Oréal, the world's largest cosmetics company, which triggered public criticism and discussions.⁹ In the following year Anita Roddick died of an acute brain haemorrhage at the age of 64.¹⁰ What legacy did she leave not only in the business world but also in society?

Anita Roddick's biography

Her early life

The British female entrepreneur Anita Roddick (née Perella) had a humble family background. On 23rd October 1942 she was born into an Italian-Jewish immigrant family, the third child of Gilda and Donny Perella, in Littlehampton, a small seaside town in West Sussex.¹¹ Her mother Gilda had moved from a small village in Italy to England to become a nanny at the age of 15.¹² Her father Donny had also emigrated to England at a very young age. Their marriage had been arranged by their parents living in Italy, who had very old-fashioned ideas about relationships and marriage. Anita's parents had three daughters and one son, but as their marriage did not work out, they divorced when Anita was eight years old. Soon Gilda remarried Donny's cousin Henry, who came to England after having spent many years in America. Littlehampton was full of holiday-makers in the summer and Henry and Gilda ran the Clifton Café, an American-style café near the sea front.¹³ It served hamburgers, Coca-Cola and other American fare, which were unfamiliar in Britain at that time.

Gilda's second marriage was happy and her family very close. However, tragedy struck when Henry died from tuberculosis only 18 months after their wedding.¹⁴ Now a single mother with four young children to bring up, Gilda had to run the café, which had long hours, opening for breakfast at 5 a.m., all on her own. Anita was only 10 years old then. As soon as Gilda's children were old enough to help, they

8 Roddick, *Body and Soul*, pp. 187-213.

9 Rajeev Syal & Carl Mortished, 'Body Shop founders sell up in £652 million', *The Times* (18 March 2006), p. 15.

10 Hugo Rifkind, 'In the last few months of her life Anita Roddick', *The Times* (13 September 2007), p. 11; Ingrid E. Newkirk, 'Dame Anita Roddick Obituary', *The Times* (14 September 2007), p. 71; Mark Goyder, 'Dame Anita Roddick Obituary', *The Times* (17 September 2007), p. 59.

11 Alcraft, *Anita Roddick*, p. 6.

12 Roddick, *Body and Soul*, p. 29.

13 Alcraft, *Anita Roddick*, p. 6.

14 *Ibid.*, p. 9.

took orders, cleared tables, and washed dishes. Having experienced this, Anita learnt from a young age the meaning of hard work, the importance of earning her own living, and the hardship of being a single mother.

When not working, Anita attended St. Catherine's Convent where she was taught by many Catholic nuns. There, Anita was so inspired by one nun, that she gave her new school uniform to a girl from a very poor family.¹⁵ Anita speculated some years later that it was this act of giving at school that later led her to be involved in social activism.

Moreover at around the same age, she read a book about the Holocaust, which also made her realize that there was so much injustice in the world, and transformed her way of thinking.¹⁶ Having come from an Italian-Jewish background, this discovery made her determined to do something positive to prevent unfairness in society by taking positive steps to help vulnerable people and to improve the situation of people in poverty.

After leaving St. Catherine's Convent, she attended the Maude Allen Secondary Modern School for Girls where she enjoyed studying drama and reading poems. From her secondary school days in the 1960s she started to get involved with social movements such as Shelter and Freedom from Hunger. She marched with the CND (Campaign for Nuclear Disarmament), a British organisation whose aim is to persuade countries to get rid of their nuclear weapons.¹⁷

With her mother recommending her to find a stable job, she decided to study at the Newton Park College of Education in Bath, hoping to pursue a teaching career.¹⁸ There she studied art and design, and the skills she acquired later became extremely useful when she opened The Body Shop. It was also during her college days that she discovered the joy of travelling. At the Newton College she won a scholarship to study on a kibbutz in Israel for three months.¹⁹ The result of her research there had to be submitted as a thesis, one of the requirements of her degree.

Because of her Jewish heritage, she was extremely keen to learn about Israel and Judaism. She tried very hard to get to know local people, working in the fields and going out on fishing boats. This trip had a great impact on her life and changed her lifestyle. The experience also made her more independent and confident, becoming

15 Roddick, *Body and Soul*, p. 37.

16 Ibid., p. 39.

17 Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur*, p. 19.

18 Roddick, *Body and Soul*, p. 43.

19 Ibid., p. 48.

convinced that she was perfectly capable of travelling alone anywhere in the world. Starting with her trip to Israel, she began to love adventures and travelling, which turned out to be an advantage when she later ran a global business.

After she completed her degree, she applied for teaching jobs, and was given a position at a nearby junior school. However, she resigned the job before even starting it. A few weeks before she was due to begin her teaching career, she accepted an invitation from a friend living in Paris to spend a weekend there.²⁰ She liked the city so much that she decided to stay. As she was the sort of person who was constantly looking for excitement, a new challenge and impetus, a teaching job did not appeal to her, even though it would have given her a steady income. In order to support herself in Paris, she found a menial job working for the *International Herald Tribune*, but she made effective use of her spare time, meeting a number of interesting people ranging from artists to musicians.²¹

Nearly a year later she returned to Littlehampton to start part-time teaching at her old school, the Maude Allen Secondary Modern School for Girls. However, her teaching career lasted only one year. During a holiday visit to Geneva, Anita Roddick landed herself an administrative post working for the International Labour Organisation (ILO) at the United Nations.²² Although she lacked the precise qualifications for the job, her enthusiasm, persuasive manner and effective way of communicating helped her to secure the position. Her job at the ILO gave her the ideal opportunity to familiarise herself with the hardships and problems of the third world and to become more aware of women's causes. However, it did not take long for her to get bored with the prestigious ILO post and she was ready to move on. Nevertheless, the valuable experience she had gained inspired her to support producers in developing countries when she, later on, founded The Body Shop.

At this point she wanted to explore the world, and boarded a boat heading towards Tahiti, which at that time was one of the most exotic places in the world to western people.²³ There she was introduced to cocoa butter which Tahiti women rubbed on their bodies to keep their skin smooth. It was a traditional skin care remedy that had been handed down for many generations. Anita, being an adventurous woman with a curious mind, could not resist trying cocoa butter on her skin. Her knowledge about natural skin products, used by local women in different countries which she

20 Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, p. 14.

21 Phillip Elmer-Dewitt & Elizabeth Lea, 'Anita the Agitator', *Time* (25 January 1993).

22 Roddick, *Body and Soul*, p. 52.

23 *Ibid.*, p. 53.

visited, later became extremely useful when she wanted to produce her own skin care products for The Body Shop. As Sherry Beck Paprocki states, Anita's early travels around the world led her to create some surprise formulas for lotions later sold by The Body Shop.²⁴ Indeed many of her early products were made with cocoa butter, which Anita had initially discovered in Tahiti.

After Tahiti she visited several cities in Australia, where she found herself a job selling wooden siding (boards used on the outside of houses) in order to finance her further travels.²⁵ This lowly work provided her with a chance to develop the skill to sell goods to people effectively. She also recalled that she discovered the pleasure of serving customers. Her exposure to the sales and marketing at that time later became important when she set up her first cosmetic shop.

After she left Australia, she went via Madagascar to South Africa where apartheid was still maintained by the white government. In this system black people and white people were segregated and only white people had full political rights. People were arrested if they broke these segregation laws. Anita, an egalitarian, who held the belief that everyone is equal and should have the same rights, disapproved of the ways in which people in South Africa were kept apart because the colour of their skin.

Anita wanted to challenge the political system, and deliberately violated a segregation law by going to a jazz club on a night when only black people were admitted to enter the club.²⁶ She was picked up almost immediately by the police and given twenty-four hours to leave the country. This incident ended her so-called 'Hippie Trail' life, which was a movement of young people who wanted to explore the world in the 1960s and early 1970s. She decided to return to her hometown of Littlehampton.

On her first night back at home, her mother introduced her to Gordon Roddick, a tall and handsome Scotsman who had travelled to various countries and worked in tin mines in Australia and on large farms in Latin America and Africa.²⁷ They had much in common, having both been adventurous worldwide travellers. They also discovered that they had lived on the same street in Sydney, Australia and knew many of the same people there. They were instantly attracted to each other, became inseparable and soon began to live together.

24 Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur*, p. 10.

25 Ibid., p. 26.

26 Roddick, *Body and Soul*, p. 53.

27 Ibid., pp. 53-55.

Gordon, who wanted to be a writer, worked on a local farm, while Anita returned to her teaching for a while until she became pregnant. They started to talk about opening their own business, but they did not know what kind would be suitable for them. Their first business venture was to run a bed and breakfast. They bought a run-down Victorian hotel with eight bedrooms in the middle of Littlehampton and turned it into an attractive lodging.²⁸

As Littlehampton, a seaside town, is crowded with many tourists in the summer, their business did well during the summer season. However, they hardly made any money after the season ended, so they faced the prospect of going bankrupt. In desperation they came up with the idea of renting many of its rooms to tenants for long-term stay. They succeeded in finding elderly residents on this basis. After the hotel began to make a small profit, they started their second business venture, which was running a restaurant called Paddington.²⁹ Anita initially thought that she and her husband could impose their good intentions on their customers by featuring healthy dishes such as quiches and soups. Anita, who had much experience in assisting her mother's café, was confident that her restaurant was going to be a success. Nowadays there are many vegetarian and vegan restaurants throughout Britain serving quiches, soups and salads, which are widely popular, but back in the 1970s, the local residents and tourists in Littlehampton did not want 'healthy' food. Later Anita recalled the time and stated in her autobiography that 'It was a disaster...No one seemed to share our enthusiasm for the menu.'³⁰

For weeks Anita and Gordon stared at empty tables, and finally realized that in an egg-and-chips town such as Littlehampton, their initial healthy menu would hardly attract many customers. Instead, they turned the restaurant into a burger-and-fry place with loud rock-and-roll music, and changed the menu to steak, burgers and chips.³¹ Paddington quickly filled up with customers and became one of the most popular meeting places in Littlehampton.

This incident taught them two valuable business lessons, which they later made the best use of when Anita founded The Body Shop. The first was that any business must provide a service that customers want. The second was that, it is the businessman/businesswoman who is at fault if the enterprise is unsuccessful, in which case, he/she should have the ability to move swiftly to a new improved idea.

28 Alcraft, *Anita Roddick*, pp. 14-15.

29 Roddick, *Body and Soul*, p. 62.

30 Ibid., p. 63.

31 Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, p. 15.

Anita and Gordon became extremely busy serving and cooking in their restaurant, and the husband-and-wife team proved very productive because of the differences in their personalities. Anita, a lively, friendly and attractive personality with excellent communication skills, was extremely good at customer services. On the other hand, Gordon was more reserved, reliable, level-headed and well-organised. He gained the trust of the staff, which helped the restaurant to run smoothly, and he became a successful manager.

In spite of their success, they quickly learned that owning a restaurant was a difficult business. They were exhausted and had little time for themselves and their two small daughters. In her book *Body and Soul* Anita described their routine life at that time.

We were rarely home before one o'clock in the morning and were often so tired we could hardly drag ourselves up the stairs to bed. Sometimes we would wake up the next day with our muscles aching so much that we could hardly get up.³²

For the sake of earning money, they persevered for three years running the popular restaurant, but they finally reached the point when they desperately needed a better quality of life with their children. Gordon suggested that they should sell their restaurant business and make a fresh start. He also wanted to fulfil a long-cherished dream of riding a horse across Latin America for two years.³³

Anita accepted his suggestion and did not even resent his idea of leaving her and their small children to pursue his horseback adventure alone. However, somehow she had to come up with a solution which would enable her to pay the mortgage and earn a living for her and the two young children while he was away. As she was reluctant to return to teaching, she decided to run a small cosmetics shop. It is important to know what gave her this idea.

During a holiday in America, Anita and Gordon visited San Francisco and Berkeley in 1971, and came across two small and broad-ranging shops called The Body Shop, that promoted bio-degradable shampoos and lotions made with natural ingredients such as cocoa butter and avocado.³⁴ Anita had never seen such shops before. She was fascinated and thought about founding a similar shop in England. A reporter working for a London newspaper claimed that Anita had copied the shops' concept and used the same name.

32 Roddick, *Body and Soul*, pp. 63-64.

33 Ibid., p. 67.

34 Ibid., pp. 58-59.

The foundation of The Body Shop

After she reached the decision to establish a cosmetics shop, she needed to raise £4,000 to start her venture. She went to see a local bank manager, and explained her new idea of making and selling skin creams and shampoos. He immediately refused to lend her money.³⁵ Nowadays many single women can take out a housing mortgage readily, but back in the 1970s it was hard for a woman in Britain to get a bank loan despite the fact that the Equal Employment Opportunities Act was enacted in 1975. For her next visit to the bank, she dressed smartly and carried a business plan with pages of figures and projections. In these preparations, she was helped by her husband and his friends who had more know-how about how to take out a bank loan and running a business. Most importantly, she took her husband with her to the bank. This time the bank manager gave a loan of £4,000 to her husband.³⁶ The incident demonstrates one important reason why there were few businesswomen in the 1970s.

Anita opened the first Body Shop in Brighton on 27th March 1976.³⁷ Her choice of location was ideal since Brighton on the south coast of England was a fashionable, original and thriving town full of residents, some of them London commuters because of the fast train link to London. Brighton hosted the nearby Sussex University, and was an enlightened middle-class town, liberal to left-leaning in politics. Indeed, it now has a Green Party MP, which is very rare in England. Brighton had good connections with continental Europe and was sexually liberal-minded. The place attracted many tourists as a seaside resort town as well. Anita needed to make £300 a week from her new business, to pay her own wage and mortgage.³⁸ Her expectations were low when she first started; she never intended to develop the shop into a flourishing wider business.

Indeed The Body Shop had a very humble beginning, selling just 15 products.³⁹ Although the packaging used by other cosmetics companies was fancy and attractive, which contributed to selling more products, by contrast the first bottles Anita used were cheap specimen bottles meant for hospitals.⁴⁰ The Body Shop's packaging was extremely simple, and its products had handwritten labels. The Body Shop logo was

35 Ibid., pp. 71-72.

36 Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, pp. 17-18.

37 Roddick, *Body and Soul*, pp. 74-77.

38 Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur*, p. 38.

39 Alcraft, *Anita Roddick*, p. 16.

40 Roddick, *Business as Unusual*, p. 38.

designed by an art student for only £25.⁴¹

Contrary to her negative expectations, her shop attracted many customers even on the opening day. She recalled that she made £130 at the end of the day and needed Gordon's assistance to serve customers.⁴² Within the next month Gordon left for his horseback ride through Latin America, so Anita was on her own looking after two small children and running a shop. As she needed an extra hand, she employed a 16-year-old girl as her assistant. Her shop continued to do well, and she easily made her target of £300 a week. She explained that her good luck was assisted by the hot weather in 1976, the summer turning out to be the hottest for years.⁴³ As a result, Brighton was full of people on holiday, and many of them purchased skin creams and shampoo from her shop. As the long hot summer blistered on, The Body Shop did better and better.

Apart from the hot weather there were many other reasons for the success of her shop. One of these was that her products were very different from those produced by other cosmetics companies. She concocted cosmetics from natural ingredients such as aloe vera, cocoa butter, elderflower, tea tree and cucumber.⁴⁴ Although such ingredients are fairly well-known now, they were uncommon at that time. She used Bedouin recipes, and collected recipes in countries such as Tahiti, to make moisturisers. Her products were all homemade, so there were seeds in the elderflower cream and bits of cucumber in the cleansing cream. They did not contain any preservatives or added chemicals, so they were suitable for people with sensitive skin. They also smelt nice, which made her customers feel pampered. While other companies' products were often tested on animals, she was against such testing. This conveyed the message that The Body Shop cared about animals and people. Her customers felt good about themselves if they shopped with her. Other cosmetics companies claimed their products would make their customers look less wrinkled, and appear younger, but Anita avoided this kind of dubious assertion.

Although Anita had never been to a business school and had hardly read books on business, she had a positive business attitude and approach, and was willing to use many kinds of tactics.⁴⁵ For example, while she started with only 15 products, she packaged them in five sizes, which made her shop look as if it was selling more than

41 Alcraft, *Anita Roddick*, p. 17.

42 *Ibid.*, p. 17.

43 Roddick, *Body and Soul*, p. 84.

44 Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur*, pp. 37-38.

45 Elaine Sunderland, 'Emancipation goes to work in the boardroom, challenging for the prizes in the former male club', *The Times* (12 November 1987), p. 35.

75 items.⁴⁶

Moreover she tried to evaluate her products from a customer's viewpoint rather than that of a producer. Her way of choosing the size of container for her products was an excellent example. In the mid-1970s, other cosmetics companies normally used a big container, sold in only one size. As they contained preservatives, they lasted a long time. On the other hand, Anita's products were free from preservatives, so it was sensible to have much smaller containers and items to be consumed over a short period of time. Her customers were able to buy as little or as much as they wanted.

Her products also had affordable prices, and she offered refilling services, which are coming back into fashion today. When a customer's cosmetics bottle became empty, it could be brought back to The Body Shop, to be filled up.⁴⁷ The customer did not have to pay for the cost of the container, which was both economical and ecologically friendly.

At her shop, sample bottles were available, so customers could try cream and lotion on their skin or smell them. Anita made all the products herself, so she could explain ingredients directly to customers, answer their queries and give advice about their purchasing.

Anita Roddick's first shop began trading in only basic products, such as shampoo, conditioner, shower gel, soaps, hand cream, scrubs, face cleansers and face moisturisers. However, Anita's enthusiasm, innovative ideas and unconventional tactics in running a business with customers' needs in mind all helped her to succeed.

The development of The Body Shop

As Anita's new venture had extremely positive feedback from her clients, she was eager to expand her business. It might have been more sensible for her to run the first store for a few years, and then open the second one. However, Anita, who was impatient and impetuous, wanted to see how far she could go as soon as possible. She recollected the time of her decision as follows:

Entrepreneurs are doers as well as dreamers – they want to find the best way of pushing an idea along and use money to oil the wheels.⁴⁸

46 Ibid., p. 35.

47 Vanora Leigh, 'More than just a cosmetic job', *The Times* (26 July 1978), p. 12.

48 'Dame Anita Roddick Interview 2006 (Founder of The Body Shop)', *YouTube*, uploaded by Yasminne Cheng, 19 January 2015.

She had faith in her idea, so she put it into action immediately. As she needed another £4,000, she returned to the bank to ask the manager for a further loan. However, he turned down her request, advising her to wait for another year. Her friend Aidre, who worked for her shop and wanted to open the second shop with her, came up with a solution. Aidre persuaded her boyfriend, a local garage owner with some spare cash, to invest his money into Anita's enterprise. He agreed to give Anita £4,000 for half of her business. This deal was the best investment that he ever made.⁴⁹ Only six months after the opening of her first shop, Anita opened the second one in Chichester in September 1976, and Aidre took charge of it.

When Anita's husband Gordon returned from his travels in 1977, he took an active part with her, doing the accounts, paying the wages and delivering supplies to the two shops. Clearly his involvement gave fresh impetus to her business. Although Gordon was eager to further expand the shops, he was opposed to the idea of borrowing more money from the bank or finding a financial sponsor. One day, he came up with the ideal solution: he could create a franchise system.⁵⁰ Some people, who had seen the favourable outcome of her two stores, had started to make enquiries about the possibility of their opening a branch of The Body Shop since they were keen to participate in her venture. Under a franchise system, these people would be given formal permission to open a branch of The Body Shop and sell its products. They would own or rent the retail premises themselves and furnish them. The only thing that the Roddicks needed to do was to provide products, so in 1978 they decided to sell franchises, by which The Body Shop continued to grow. Both the Roddicks and the owners of their franchised stores benefitted from the franchise system and increased their profits. The main reason for their increased profit was that the prices of The Body Shop's products were reduced because the Roddicks began to make products in large amounts and supply them to many franchised shops.⁵¹

The Roddicks offered their experience and expertise in helping to start up the branches which were independently owned. They advised the franchised owners how to run their businesses, provided them with staff training, and gave direction in the principles and images of The Body Shop. The Body Shop's philosophy was that anybody working for it should know more about the products than any of the customers. The owners of the branches and their staff were well-trained, and fully

49 Jason Nisse, 'Body Shop £12 million stake sale', *The Times* (28 June 1996), p. 25.

50 Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick*, *Entrepreneur*, pp. 42-43.

51 Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, pp. 20-22.

understood and shared the Roddicks' basic principles, wanting to make the world 'a better, cleaner, and safer place'.⁵² They also felt that they were part of an extended family business run by the Roddicks.⁵³ These considerations made it possible for The Body Shop to maintain the same image for all branches, and also helped it to conduct successful campaigns. For example, The Body Shop's recycling campaign was launched in 1992, and every shop put up posters to encourage customers to recycle or refill their bottles.⁵⁴

However, the franchise system didn't always work well. The Roddicks had many costly disputes with franchisees that sometimes ended in court.⁵⁵ These focused on predictable franchise matters of control over shops and products, financial independence, and the maintenance of brand image. There were also issues of supply-side security and of the allocation of profit.

As the Roddicks' first two shops turned out to be very profitable, they were determined to expand their business themselves. By then they had gained the bank's confidence, which enabled them to borrow enough money to open their third shop. This was followed by the opening of even more outlets, which they owned. Significantly, the Roddicks used their own shops to try out new merchandise and to see how well each item sold. If a new product was selling well, they would distribute it to their franchisees.

The Body Shop was extremely successful in expanding the business, initially in Britain. Then in 1978, it went international with the opening of the first franchise outside Britain, which was in a kiosk in Brussels. In the following year the first Swedish branch in Stockholm and the first one in Greece were opened. In 1982, The Body Shop outlets opened in Iceland, Denmark, Finland, Holland and Ireland, and in 1988 the first American store appeared in New York.⁵⁶ By 1995 it had 1,300 outlets in 46 countries, trading in 23 languages, selling more than 400 products. Ultimately, every country with The Body Shop branches was commercially organised by one head franchise holder, and the products were modified for the different national markets. By 2004, The Body Shop had 1,980 stores, serving more than 77 million

52 Martin Shepherd, 'Striking a blow for The Body Shop's ethical credentials', *The Times* (13 September 1994), p. 29.

53 Ibid., p. 20; Philip Bassell, 'CBI wants work practice to be "family-friendly"', *The Times* (13 April 1994).

54 Roddick, *Body and Soul*, p. 11.

55 Jon Entine, 'Report on Business: "body flop"', special to *The Globe and Mail*, *Rob Magazine* (31 May 2002), updated 17 April 2018. See theglobeandmail.com/report-on-business/rob-magazine/body-flop/article-1023718/.

56 Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, pp. 22-24.

customers globally. By then it had fully established its reputation, being voted the second most-trusted brand in the U.K., and was ranked as the 28th top brand in the world. In April 1984 The Body Shop shares went onto the market in the U.K. Stock Exchange and reached an immediate value of £8 million.⁵⁷ Anita and Gordon were each worth £1.5 million at this point, and hence became millionaires. The value of the stock of The Body Shop peaked in 1992. From that high level it has tended to fall thereafter as more rivals entered the market with comparable products, jumping onto the commercial bandwagon that had been inaugurated by the Roddicks.

The Body Shop grew over the next 20 years and the company's products became much more wide-ranging, including newer items for the body, face and hair care as well as fragrances for both men and women.⁵⁸ Anita also put social and environmental causes at the heart of her business long before other companies really cared. For example, she supported renewable energy and promoted the use of wind and water instead of nuclear power and gas. In 1993 her company took a stake in a wind farm project in Wales.⁵⁹ The Body Shop headquarters in Littlehampton installed solar panels on a roof that could light and create energy from the sun to produce hot water and electricity. Her success as an entrepreneur gave her great prominence, enabling her to lend her voice to ethical and environmental causes.

Furthermore, Anita pioneered the concept of fair trade in the U.K. and travelled around the world, searching for new ingredients and products.⁶⁰ She explained her company's policy towards fair trade stating that her business would support producers in developing countries, respecting them and their cultures, and paying fair prices to make sure that they would not be exploited. She succeeded in gaining their trust and set up direct relations with local traders in such countries. The Body Shop still has solid links with many producer groups worldwide. As David Wheeler rightly said, care for people, care for the environment and concern for animal rights were Anita Roddick's essential priorities in the business strategy of The Body Shop.⁶¹

57 Roddick, *Body and Soul*, pp. 105-107; 'Body Shop listing', *The Times* (28 January 1986), p. 13; Elmer-Dewitt & Lea, 'Anita the Agitator'; Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, pp. 29-30.

58 See the Body Shop's official website which is <https://www.thebodyshop.com/en-us/>.

59 Nick Nuttall, 'Wind of change at Body Shop', *The Times* (28 May 1992), p. 9; Ray Hatley, 'Cat to claw back for Body Shop', *The Times* (12 June 1996), p. 7.

60 Roddick, *Take It Personally: How to Make Conscious Choices to Change the World*, pp. 98-102; Alcraft, *Anita Roddick*, pp. 34-35.

61 David Wheeler & Maria Sillanpaa, *The Stakeholder Corporation* (London: Pitman, 1997), p. 189.

Involvement in social campaigns and charities

As previously mentioned, Anita Roddick campaigned against animal testing for cosmetics.⁶² She supported Greenpeace's Save the Whale mission.⁶³ She also joined Amazonian Indians in campaigning against a hydro-electric dam, and backed the Ogoni people's battle for reparations for damage to their local environment in Nigeria caused by oil multinationals.⁶⁴

After she visited Romanian orphanages, in 1990 she founded Children on the Edge, a charity for children in Eastern Europe and Asia affected by conflicts, disabilities and HIV/Aids.⁶⁵ In the same year she and her husband helped the publication of *The Big Issue* magazine sold by the homeless.⁶⁶ John Bird, its founder, who was extremely grateful to them for their financial help, made the following statement:

There is absolutely no way *The Big Issue* would have happened if Anita and her husband Gordon hadn't started a business that created a social engine that drove people like us to get creative.⁶⁷

Another of her effective social projects happened in Littlehampton Community School. It succeeded in becoming a business and enterprise specialist school thanks to a substantial donation made by Anita Roddick, who grew up in the area.⁶⁸ As a result, the new building built with her money was named The Roddick Enterprise Centre. The Littlehampton College also hosts 'Roddick Days', organising events such as an action day to allow the students an opportunity to give something back to their local community.

Anita wrote and published several books related to her business and ethics. She appeared on TV and radio programmes and also gave many lectures, talking about her very successful career and beliefs as the top executive of The Body Shop, which made an impact on young people who were planning to set up their own

62 Roddick, *Body and Soul*, pp. 126-128.

63 Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick*, *Entrepreneur*, pp. 59-61.

64 Anita Roddick, Vivian Bendall et al., 'Ogoni oppression', *The Times* (13 June 1994), p. 21; Michael Dynes, 'Ogoni activists in plea to West over Nigeria "frame-up"', *The Times* (15 May 1996), p. 15.

65 Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, pp. 42-43.

66 On *the Big Issue*, see Roddick, *Business as Unusual*, p. 96; Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick*, *Entrepreneur*, p. 13.

67 'Tributes pour in for Dame Anita', *BBC News* (11 September 2007).

68 'Support for "Roddick Academy" at Littlehampton grows', *Littlehampton Gazette* (4 October 2007).

businesses.⁶⁹

Awards and honours which she received

Because of her contributions as a woman in promoting global business and her campaigns to make the world a better place, she has received many awards and honours. For her business achievements she was elected Veuve Clicquot Business Woman of the Year in 1984.⁷⁰ She also won the Botwinick Prize in Business Ethics in 1994. As she had business operations across America, her entrepreneurial talent and skills have been highly regarded there. As a result, she won American prizes and awards, including the University of Michigan's Annual Business Leadership Award in 1994, the Women's Business Development Centre's First Annual Woman Power Award in 1995, the Women's Centre's Leadership Award in 1996, and the Gleitsman Foundation's Award of Achievement in 1996. These are some of the most prestigious awards in the business world and are only given to an extremely successful businesswoman.

She was also awarded an OBE (Officer of the Order of the British Empire) in 1988 and a DBE (Dame Commander of the Order of the British Empire) in 2003 for her services to the business world and communities in Britain.⁷¹ Moreover she received an honorary doctorate from the University of Sussex in 1988, and an honorary doctor of laws from the University of Bath in 1999.⁷² As her environmental campaigns have been highly evaluated worldwide, she also received many environmental awards in several countries. She won a Banksia Foundation's Australia Environmental Award in 1993, a Mexican Environmental Achiever Award in 1993, a British Environmental and Media Award in 1999 and Rainforest Action Network's Spirit of the Rainforest Award in 2006. She was also an honouree of the United Nation's Environment Programme entitled Eyes on the Environment.

For her involvement with the peace and human rights movements, she was elected a Chief Wiper-Away of Ogoni Tears by the Movement for the Survival of the Ogoni

69 'Dame Anita Roddick: Kindness as a Key to Humanity's Future', *YouTube*, uploaded by University of California Television, 25 April 2008; 'Dame Anita Roddick at FCCT Facilitated by the International Peace Foundation', *YouTube*, uploaded by International Peace Foundation, 23 December 2013; 'Anita Roddick, parts 1, 2, 3, 4 and 5 (Inspiring Entrepreneurs-Commerce with a Conscience)', *YouTube*, uploaded by BIPC (Business & IP Centre, London) TV, 11 July 2009.

70 Jack Quarter, *Beyond the Bottom Line: Socially Innovative Business Owners* (Westport, Connecticut: Praeger, 2000), p. 133.

71 'The Body Shop founder honoured', *The Times* (16 March 1988), p. 3; 'The Body Shop founder honoured', *BBC News* (13 June 2003).

72 'Honorary Graduates 1989 to present', bath.ac.uk. University of Bath.

People in Nigeria in 1999.⁷³ She was chosen to be International Peace Prayer Day Organisation's Woman of Peace in 2001. She came third in the Shell Live Wire survey of inspirational role models in 2005.

The sale of The Body Shop to L'Oréal and Anita Roddick's death

On 17th March 2006 The Body Shop was sold to L'Oréal, an international cosmetics firm, for £652 million.⁷⁴ L'Oréal had been condemned for using animals to test their products and was also part-owned by Nestlé who had been criticised for its treatment of third-world countries. This deal provoked criticism from the general public, especially customers of The Body Shop, who feared that the new owner L'Oréal would change the way The Body Shop was run. Anita Roddick assured the public that, 'The Body Shop's own principles were protected under the terms of the takeover, and insisted that she could be "the Trojan horse" who would be able to influence the new parent into adopting some of her ethical ideas'.⁷⁵ In spite of her words, many customers of The Body Shop were not convinced. Clearly L'Oréal's takeover undermined The Body Shop's ethical image.

It is important to know what made Anita sell her most profitable and fully established global business, which she had devoted herself to expanding over thirty years. No one knows for sure why she made this decision, but it may have been related to her declining health. In 2004 she was diagnosed with liver cirrhosis caused by long-standing hepatitis C, with which she became infected in 1971 when she had a blood transfusion after the birth of her second child.

As she was a positive person making every effort to keep herself active and continuing to improve society, she began to promote the work of The Hepatitis C Trust, helping to increase awareness of the disease to the general public.⁷⁶ Less than two weeks before her death, she appeared on Channel 5's television programme *Doctor, Doctor* in Britain as a special guest, and discussed hepatitis C with the presenter Mark Porter, a GP (general practitioner) in a most persuasive way. In one of her last interviews, she made light of the idea of retiring and stated 'I don't even

73 Brown, *Anita Roddick and The Body Shop*, pp. 58-60.

74 Cheryl D. Rickman, *The Small Business Start-Up Workbook* (2005, London: Robinson, 2015 edn), p. 155.

75 Claudia Cahalane, 'I believe they are honourable and the work they do is honourable', *The Guardian* (3 November 2006).

76 Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur*, p. 91; Helen Nugent, 'Anita Roddick: I've had hepatitis C for more than 30 years', *The Times* (15 February 2007), p. 25.

understand the word, retirement. Campaigning is in my DNA.’⁷⁷ Four days before her death she wrote the last entry on her personal website in support of Amnesty International, a London-based non-governmental organisation focused on human rights, whose objective is ‘to conduct research and generate action to prevent and end abuses of human rights, and to demand justice for those whose rights have been violated’.⁷⁸ People who listened to the interview or read her last entry, never predicted her premature death. On 10th September 2007 she suddenly died of a brain haemorrhage at the age of 64.⁷⁹

On her death Gordon Brown, the Prime Minister at that time, paid tribute to her, calling her ‘one of the country’s true pioneers and an inspiration to women throughout the country striving to set up and grow their own companies’.⁸⁰ He continued:

She campaigned for green issues for many years before it became fashionable to do so, and inspired millions to the cause by bringing sustainable products to a mass market...She will be remembered not only as a great campaigner but also as a great entrepreneur.⁸¹

Richard Branson, a renowned British entrepreneur, who was her long-time friend, made the following comments:

Anita showed the world that success in business can go hand in hand with making the world a better place. She was an incredible human being and will be greatly missed!⁸²

Indeed she left her estate to charities rather than her family and friends. When details of her will were published, it was disclosed that she had donated all of her £51 million fortune upon her death.⁸³

77 Rifkind, ‘In the last few months of her life Anita Roddick’, p. 11.

78 On Amnesty International, see Dan Jones & Anita Roddick, *Banners and Giants/Dragons: The Complete Guide to Creative Campaigning* (London: Amnesty International UK, 2003); Roddick, *Take It Personally: How to Make Conscious Choices to Change the World*, p. 92.

79 Newkirk, ‘Dame Anita Roddick Obituary’, p. 71; Robert Pagnamenta & Suzy Jagger, ‘Green queen who inspired millions’, *The Times* (11 September 2007), p. 3; ‘Dame Anita Roddick dies aged 64’, *BBC News* (10 September 2007).

80 ‘Brown hails “inspirational” Roddick’, *Metro* (11 September 2007).

81 Ibid.

82 ‘Tributes pour in for Dame Anita’, *BBC News* (11 September 2007).

83 Matthew Moore, ‘Anita Roddick’s will reveals she donated entire £51 million fortune to charity’, *The Telegraph* (16 April 2008); Jack Malvern, ‘The Body Shop founder left daughters with nothing’, *The Times* (17 April 2008).

Conclusion

Anita Roddick began her first humble business in 1976 when there were few female entrepreneurs in Britain. At that time the business world was almost entirely dominated by men.⁸⁴ This was partly because they had more opportunities to study at business school and to have better knowledge of running such enterprises. It was also because they had extensive networks of many kinds. Further, banks were reluctant to lend money to women. These factors made men much better placed to set up businesses than women.

In spite of very constrained business opportunities for women in the 1970s, Anita turned her small venture into a highly profitable global enterprise. She had many remarkable achievements as a businesswoman and the founder and head of The Body Shop, as an active campaigner for many causes, for example against animal testing, in favour of human rights and the environment, and as a philanthropist and a charity patroness.

The keys to her success were her energy, her mother's teaching of diligence and self-help, and perhaps above all, her egalitarian spirit. Her strong marital ties with her husband Gordon, who shared the same business ethics and values, played a strong part. They both had close working collaboration with other employees of The Body Shop. She was a challenger, who wanted her company to serve the public good. Moreover she succeeded in showing that business and ethics could go hand-in-hand.

The most distinguished role that Anita Roddick rendered as a female entrepreneur was as an initiator. In 1976 she started to use natural ingredients such as aloe and coconut butter, which were unknown to customers at that time, to make her brand-new products. She also provided her customers with accurate information about the ingredients of each product, which was uncommon then. Her products contained no artificial preservatives and chemicals and were never tested on animals, while other cosmetics companies' products were often tested on animals, contained many chemicals, and relied on presentational gimmicks such as 'factor X'. Although other companies' goods were sold in one size, hers came in different sizes to meet each customer's requirements.

Anita challenged the ways in which her competitors, big cosmetics houses such as Estée Lauder and Revlon, promoted their merchandise. In order to get public

84 Derek Harris, 'Men still rule the self-made world of enterprise', *The Times* (27 December 1988), p. 17; Jon Ashworth, 'Women struggle up corporate ladder', *The Times* (18 January 1993), p. 36; Philip Bassell, 'Top management jobs still seen as a male preserve', *The Times* (10 November 1990), p. 4.

attention for their products, they used expensive fancy bottles, and spent up to £5 million on launching single items. Their costly advertisements, especially on TV, made their goods high-priced and exaggerated their qualities, giving potential customers a false impression that the use of them would turn any woman into a gorgeous-looking model or an actress.

By contrast, The Body Shop's products were affordable since Anita didn't spend money on advertising and found alternative methods to promote her products. For example, free bottles of her product peppermint foot lotion were handed out to the London Marathon runners as they went past in the early 1980s. Many newspapers reported this, which gave her free publicity.⁸⁵ Consequently, the foot lotion became one of The Body Shop's best-sellers.

Anita built several core ethical principles into The Body Shop. She was opposed to animal testing, campaigned for that cause, and also fought for saving the whales. She spent money on posters for these causes, and put them up in all the stores of The Body Shop to advance the movements.⁸⁶ The posters caught the eyes of her customers, who were often unaware of the campaigns, and many of them began to support her actions. Her new tactic of elevating campaigns through posters in her stores also had unexpected positive outcomes. Many journalists started to turn their attention to such causes, which enabled Anita to get free publicity for The Body Shop to increase the sale of her products. In addition, The Body Shop conducted large petition drives, and thanks to increasing media attention, in 1996 it collected four million signatures for the Against Animal Testing Campaign, which resulted in a total ban on such animal testing in the U.K. in 2003.⁸⁷

Nowadays the media and the general public frequently discuss topics such as recycling, global warming and measures to protect the environment. However, in the 1970s, these issues were hardly considered. Again, Anita was ahead of her times, and started to turn her attention to investigate ways to improve the environment by cutting waste and reducing energy consumption. In 1992 she commenced recycling campaigns at The Body Shop, which had never been done by other cosmetics companies before.⁸⁸ Every shop put up posters to recommend the customers to

85 Roddick, *Body & Soul*, pp. 91-92.

86 Roddick, *Business as Unusual*, p. 81; Paprocki, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur*, p. 66.

87 Ibid., p. 75; 'Roddick to lobby over animal experiments', *The Times* (28 February 1990), p. 24; Michael Hornby 'Firms to stop testing cosmetics on animals', *The Times* (7 November 1997), p. 10; 'EU to ban animal-tested cosmetics', *CNN.com./WORLD*, 15 January 2003.

88 'Body Shop turns greener', *The Times* (28 May 1992), p. 19.

recycle or refill their bottles.

Perhaps her greatest failing, in retrospect, was the sale of her company to L'Oréal one year before her death. She had urged that L'Oréal abide by her principles and policies with regard to the social and environmental issues that The Body Shop had pioneered, but many of her established customers did not trust L'Oréal to do that. Their loyalty in these circumstances tended to fade. Within a decade, L'Oréal sold The Body Shop to a Brazilian company called Natura, a company that believed in the same principles that Anita Roddick and her husband had espoused.⁸⁹ So it could be argued that this was a commercial outcome that she would have agreed with.

Some of the limitations of The Body Shop were aired by Jon Entine in an article for *The Globe and Mail*:

The financial problems that began for Body Shop in the 1990s were compounded by its cosmetic line. When it came to phasing out synthetic colourings and artificial fragrances, the onetime innovator now appeared no better than premium competitors such as Aveda, Lush and Origins. That Body Shop had lost its edge became clear when even women's magazines, which had long lavished unqualified praise on the company, began taking potshots. In a 1995 article, *Women's Wear Daily* quoted a consultant who sniffed that Body Shop products are "low-end...at a premium price."⁹⁰

There was some truth in such comment. Even so, Anita felt that women had distinct advantages over men in taking more care to ascertain what customers wanted, and to listen to their needs. This affected her selection of products. She was finely attuned to the needs and aspirations of women, and alive to environmental and gender concerns that appealed to many of them. She did not feel that attendance at the male-dominated business schools was especially advantageous, and she had no regrets at not attending one herself.⁹¹

When she started, there were relatively few salient female entrepreneurs. Yet now, this has clearly changed radically, with a plethora of conspicuous examples obvious to everybody. Jacqueline Gold, CEO of Ann Summers, Dessislava Bell, the founder of Zaggora Hotpants, and Maria Hatzistefanis, the founder of the skincare group Rodial, are among the top fifty British female entrepreneurs. The Cherie Blair Foundation for Women, founded in 2003 by Cherie, the wife of former prime minister Tony Blair,

89 'Body Shop bought by Brazil's Natura', *BBC News* (27 June 2017). On Natura, see Natura's official website which is <https://www.naturabrazil.fr/en-us/about-us/cosmetics-leader-in-brazil>.

90 Jon Entine, 'Report on Business: "body flop"', special to *The Globe and Mail*, (31 May 2002).

91 'Anita Roddick Interview', *YouTube*, uploaded by Philip Crowshaw, 23 September 2006.

has been providing training and mentoring for women who want to start and develop successful businesses.⁹² The foundation also ‘opens doors to finance, markets and networks’, and presses for changes that break down the barriers that female entrepreneurs face. Moreover it helps more women discover the power of being an entrepreneur.

Anita Roddick’s example has played a leading role in helping to bring feminism into the commercial sector, giving feminism a much more entrepreneurial nature, defining business ethics for women, demonstrating significant ways in which women can succeed in capitalism and providing a global example of a successful British entrepreneurial woman that has inspired many others in countries worldwide. These contributions have been her greatest and most lasting achievement and legacy. Although her name has not been well known in Japan, unfortunately, Anita Roddick is certainly an extremely important figure worthy of study for Japanese women who are determined to go into business. They need to learn valuable lessons from her achievements and to follow in her footsteps, challenging a male-dominated business world and ushering in a new era, which will enable more women to fulfil their business potential. Anita Roddick’s vision and originality can be an inspiration for us all.

Acknowledgement

The author is very grateful to Professor K.D.M. Snell of the University of Leicester for his helpful and constructive comments. I would also like to thank Professor Masumi Kindaichi for providing me with a grant, which enabled me to go to England to research for this project.

Bibliography

- Alcraft, Rob, *Anita Roddick* (Oxford: Heinemann Library, 1998).
- Ashworth, Jon, ‘Women struggle up corporate ladder’, *The Times* (18 January 1993).
- Bank, John, *Women with Attitude* (London: Routledge, 2015).
- Bassell, Philip, ‘CBI wants work practice to be “family-friendly”’, *The Times* (13 April 1994).

92 On the Cherie Blair Foundation for Women, see its official website which is <https://cherieblairfoundation.org/>; ‘Cherie Blair: Founder of the Cherie Blair Foundation for Women’, *YouTube*, uploaded by European Investment Bank, 28 January 2015. On Cherie Blair, see Cherie Blair, *Speaking for Myself: The Autobiography* (London: Little, Brown and Company, 2008); ‘First 100 Years: Cherie Booth QC Biography’, *YouTube*, uploaded by First 100 Years, 14 January 2019.

- Bassell, Philip, 'Top management jobs still seen as a male preserve', *The Times* (10 November 1990).
- Blair, Cherie, *Speaking for Myself: The Autobiography* (London: Little, Brown and Company, 2008).
- Brown, Paul, *Anita Roddick and The Body Shop* (Watford, Herts.: Exley Publications, 1996).
- Cahalane, Claudia, 'I believe they are honourable and the work they do is honourable', *The Guardian* (3 November 2006).
- Connolly, Sean, *Heinemann Profiles: Anita Roddick Paperback* (London: Raintree, 1999).
- Dynes, Michael, 'Ogoni activists in plea to West over Nigeria "frame-up"', *The Times* (15 May 1996).
- Elmer-Dewitt, Phillip, & Lea, Elizabeth, 'Anita the Agitator', *Time* (25 January 1993).
- Entine, Jon, 'Report on Business: "body flop", special to *The Globe and Mail*', *Rob Magazine* (31 May 2002), updated 17 April 2018.
- Goyder, Mark, 'Dame Anita Roddick Obituary', *The Times* (17 September 2007).
- Harris, Derek, 'Men still rule the self-made world of enterprise', *The Times* (27 December 1988).
- Hatley, Ray, 'Cat to claw back for Body Shop', *The Times* (12 June 1996).
- Hornby, Michael, 'Firms to stop testing cosmetics on animals', *The Times* (7 November 1997).
- Jones, Dan, & Roddick, *Anita, Banners and Giants/Dragons: The Complete Guide to Creative Campaigning* (London: Amnesty International UK, 2003).
- Leigh, Vanora, 'More than just a cosmetic job', *The Times* (26 July 1978).
- Malvern, Jack, 'The Body Shop founder left daughters with nothing', *The Times* (17 April 2008).
- Maute, Katharina, & Borchers, Jennifer, *What Makes a Brand Authentic? The Example of The Body Shop* (München: Grin Verlag, 2013).
- Moore, Matthew, 'Anita Roddick's will reveals she donated entire £51 million fortune to charity', *The Telegraph* (16 April 2008).
- Newkirk, Ingrid E., 'Dame Anita Roddick Obituary', *The Times* (14 September 2007).
- Nisse, Jason, 'Body Shop £12 million stake sale', *The Times* (28 June 1996).
- Nugent, Helen, 'Anita Roddick: I've had hepatitis C for more than 30 years', *The Times* (15 February 2007).
- Nuttall, Nick, 'Wind of change at Body Shop', *The Times* (28 May 1992).
- Pagnamenta, Robert, & Jagger, Suzy, 'Green queen who inspired millions', *The Times*

- (11 September 2007).
- Paprocki, Sherry Beck, *Women of Achievement: Anita Roddick, Entrepreneur* (New York: Chelsea House, 2010).
- Quarter, Jack, *Beyond the Bottom Line: Socially Innovative Business Owners* (Westport, Connecticut: Praeger, 2000).
- Rickman, Cheryl D., *The Small Business Start-Up Workbook* (2005, London: Robinson, 2015 edn).
- Rifkind, Hugo, 'In the last few months of her life Anita Roddick', *The Times* (13 September 2007).
- Roddick, Anita, *A Revolution in Kindness* (Chichester, West Sussex: Anita Roddick Books, 2003).
- Roddick, Anita, *Body and Soul* (London: Ebury Press, 1991).
- Roddick, Anita, *Business As Unusual: The Triumph of Anita Roddick* (London: Thorsons, 2000).
- Roddick, Anita, *Take It Personally: How Globalisation Affects You and Powerful Ways to Challenge It* (London: Element Books, 2011).
- Roddick, Anita, *Take It Personally: How to Make Conscious Choices to Change the World* (New York: Harper Collins, 2001).
- Roddick, Anita, *The Body Shop Book* (London: Little, Brown Book Group, 1987).
- Roddick, Anita, Bendal, Vivian, et al., 'Ogoni oppression', *The Times* (13 June 1994).
- Roddick, Anita, Biggs, Brooke Shelby, et al., *Troubled Water: Saints, Sinners, Truth and Lies about The Global Water Crisis* (Chichester, West Sussex: Anita Roddick Books, 2004).
- Russell, Jesse, & Cohn, Ronald, *Anita Roddick* (Norderstedt, Deutschland: Book on Demand, 2012).
- Shepherd, Martin, 'Striking a blow for The Body Shop's ethical credentials', *The Times* (13 September 1994).
- Sunderland, Elaine, 'Emancipation goes to work in the boardroom, challenging for the prizes in the former male club', *The Times* (12 November 1987).
- Syal, Rajeev, & Mortished, Carl, 'Body Shop founders sell up in £652 million', *The Times* (18 March 2006).

【レビュー】

戦略経営の父、イゴール・アンソフ

—乱気流の体験が、環境の変化の予測にもとづく システム思考の企業戦略論を生み出した—

森本 博行

1. はじめに

H・イゴール・アンソフ (H. Igor Ansoff) は、企業が将来的に直面する事業環境の複雑で多様な変化のもたらす不確実性を「乱気流 (turbulence)」と呼び、乱気流がもたらす経営課題に対する体系的な戦略計画の必要性を唱えた。

ヘンリー・ミンツバーグは、ハーバード・ビジネス・レビューでは“The Fall and Rise of Strategic Planning”HBR, January-February 1994 (邦訳「戦略プランニングと戦略思考は異なる」DHBR、2003年1月号)、さらに著書である“THE RISE AND FALL OF STRATEGIC PLANNING”1994 (邦訳『「戦略計画」創造的破壊の時代』産能大学出版部)では、非連続的な変化を予測することは事実上不可能であり、戦略計画を信奉しすぎているか、アンソフを批判したが、その一方「戦略経営論の父」と敬意を示した。

本稿の目的は、歴史に翻弄された人生を送りながらも、アンソフが世界的に「企業戦略論」研究の権威者となった経緯を紹介するとともに、研究者の生き方を示すことにある。

2. ロシア革命の乱気流に翻弄されたアンゾフ一家

アンゾフは、1918年12月にロシアのウラジオストクで生を受けたが、幼少年時代のアンゾフの体験は、乱気流そのものであった。アンソフの生まれた1918年は、その前年の1917年には第一世界大戦が終わり、またロシアでは10月革命によってボルシェヴィキ主導の政権が誕生し、同年7月には、ロマノフ王朝のニコライ2世とその家族が処刑された時であった。

ウラジオストクには、ロシア革命に対するアメリカ軍を主力とする干涉軍や、いわゆる「シベリア出兵」と知られる日本軍が集結していた。ウラジオストクの街は、革命から逃れてきた多くの人々で混乱していたが、1922年に干涉軍が撤収し、ボルシェヴィキ政権の管理下にはいった。

アメリカ生まれのロシア人である父は、サンクトペトロブルク (ペトログラード) のア

アメリカ大使館に勤務していた。アメリカ赤十字社の要請でウラジオストクに派遣されることになり、1924年まで滞在を余儀なくされて大使館に戻れなかった。その間、1919年には大使館は閉鎖された。革命後のロシアでは、食料難による飢餓とスターリンによる大粛清の嵐が吹き荒れていた。1933年にモスクワにアメリカ大使館が再開されたが、父が再び大使館の勤務に戻れるまでアンソフ一家は、母の実家が工場を所有する資産家ということで反革命派とみなされて、清貧な生活を強いられた。

アンソフは、学校でも所属するピオネール少年団でも新たな体制の優等生として振る舞った。大使館に勤務している父は密かにアメリカへの移住計画を立て、アメリカの市民権の手続きをとるとともに、アンソフに英語の習得のためにイギリス人の家庭教師をつけた。

1936年9月、アンソフ一家は、北海に面したレニングラード（ペトログラード）の港から小型輸送船でアメリカにむけて旅だった。大西洋の荒波を受けてニューヨークの港に着いたのはその2週間後であった。その時、アンソフは16歳であったが、17歳になった時、ロシア正教の司祭の紹介で地元の高校に通うことになった。自伝的エッセイによると、高校に通い出した時、ロシアで英語を勉強していたので、理解できるはずと確信して登校したものの、当初、高校では教師や同級生の話していることをまったく理解できないまま、いろいろな教室をうろうろするばかりだった、と述べている¹。

3. ロッキード社で発想した多角化戦略を論文にする

アンソフは、高校を1年で終えて、スティーブン工科大学に入学した。同大学では修士課程まで進み、1941年に数学と物理学の修士号を修得した。

戦時中の5年間は海軍に勤務した後、アンソフは1946年ブラウン大学の博士課程に進み、応用数学のPh.D.を授与され、1948年にカリフォルニア州サンタモニカのランド研究所積算部に入所した。

ランド研究所には8年間所属したが、その間、空軍やNATO軍の脆弱性を研究するプロジェクト・リーダーを務めることがあった。アンソフが、ランド研究所で学んだことは、長期的なリスクに対して鋭敏であるべき軍事組織が、不確実性に対する予見や創造力の欠如した「近視眼な組織（organizational myopia）」である現実であった。

Harvard Business Review (HBR) に掲載されたアンソフの最初の論文は、“Strategies for Diversification.” HBR, September-October 1957（邦訳「多角化戦略の本質」DHBR, 2008年8月号）であり、その後の企業経営論や戦略経営論の原点ともいえる論文である。

アンソフは、1956年ランド研究所を辞めて、カリフォルニア州バーバンクのロッキード・エアークラフト社に転職した。当時、多くの航空機製造企業は、戦時中に蓄積した技

1 “A Profile of Intellectual Growth” in A.G. Bedeian, Management Laureates: A Collection of Autobiographical Essays; Vol.I. Greenwich, CT: JAI Press, 1992

術を活用した多角化戦略を模索していた（図1）。

1950年に関連する産業内での水平的、垂直的企業合併を規制したセラー・キーフォース法（クレイトン法第7条修正）が成立し、企業は内部資源を活用した内部成長（organic growth）が求められていた。ロッキード社には、多角化を検討する部門があり、アンゾフは、そのスペシャリストとしての入社であった。ロッキード・エアークラフト社は、事業の水平方向への多角化を進めるために、子会社として地上整備機器や航空管制用コンピュータを開発し、事業化を推進する「ロッキード・エレクトロニクス」社を設立し、アンゾフはその計画担当VP（Vice President）となった。

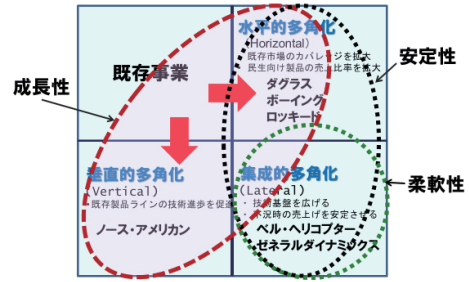


図1
航空機産業の多角化戦略（1950年代）

4. 企業が成長するためには、世の中の倍の速さで走ること

同論文では、多角化戦略を定義するために、「事業成長のための製品－市場戦略」（図2）が描かれていたが、それは「アンゾフ・マトリックス」、さらに「成長ベクトル」として名を残すことになった。

同論文は、社内向けに書かれた“An Action Program for Diversification”（1956）が基になっていた。さらにアンゾフは、同論文を学会誌に投稿する目的で、“The purpose of this paper is”で始まる“A Model for Diversification”を執筆し、1957年5月にMANAGEMENT SCIENCE誌に投稿した。

実は、同論文とHBRに掲載された論文とはほとんど同じ内容であったが、唯一違ったのは、冒頭の「赤の女王」の引用であった。赤の女王は、主人公のキャロルに「ここではね、同じ場所にとどまるだけでも、全力で走らなくちゃいけないのさ。どこかよそへいくつもりなら、せめてその倍の速さで走らないといけないんだよ」と話す²。

アンゾフが「赤の女王」を引用してまず主張したかったことは、企業にとって、現在に地位を永続させるためには絶えざる成長が求められ、その地位を上げるためには倍の努力とスピードが求められるが、既存の製品－市場戦略によって市場で地位を上げた企業はひとつもないということであった。



図2
アンゾフ・マトリックス
（成長ベクトル）

2 「赤の女王」は、ルイス・キャロルの小説『鏡の国のアリス』をもとにしており、生物学の世界では、1970年代になって「赤の女王仮説」として、種や遺伝子が生き残るためには、周囲の生物が進化して生ずる環境の変化に対応して進化し続けなければならない、という意味で使われるようになるが、アンゾフはそれよりも20年近く前に唱えたことになる。

同論文で、アンソフは、経済用語として使われていなかった軍事用語である「ミッション」という用語を使って、企業のミッションとして製品に託した便益を「製品－市場」として定義して、製品－市場戦略を、市場浸透戦略、市場開拓戦略、製品開発戦略、多角化戦略に分類し、多角化戦略が企業の成長にとって欠くことのできない戦略であることを訴えたかったのである。

アンソフは、成長戦略の選択には、売上の不確実な長期トレンドをいくつかのタイプ（図3）に分類し、それに合わせて製品－市場戦略の方向性を決めることが重要であるとした。その方向性については、たとえば航空会社であれば、さまざま方法で旅客と貨物を輸送する事業に拡大させる場合「先端技術を通じて、よりよい生活のためによりよい輸送を」といったように設定すべきとしている。この例示は、セオドア・レビットの「鉄道会社が衰退したのは、旅客と貨物の需要が減ったのではない。自社の事業を輸送事業と捉えていなかったからだ。」“Marketing Myopia” HBR, July-August 2004（邦訳「マーケティング近視眼」DHBR 2001年11月号）を想起させる。

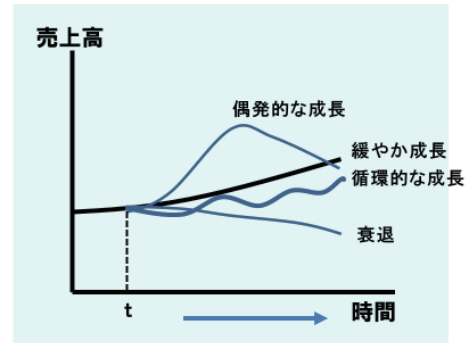


図3
多様な長期トレンド予測のタイプ

さらにこの論文で注目すべきことは、最初の経営の実践書と言われるピーター・F・ドラッカーの“*The Practice of Management*” Harper & Row, 1954（邦訳『現代の経営』ダイヤモンド社）を参考文献として挙げていることである。ドラッカーは、第一に市場の潜在的な趨勢、第二に経済の発展、流行や好みの変化、競争の変動による市場の変化など、経営者は長期的な市場や技術の変化を注視すべきとしている。

5. 新たな人生への転換を求めて教員をめざす

アンソフは、1965年に“*Corporate Strategy*” McGraw-Hill, 1965（邦訳『企業戦略論』産能大学出版部、1969）を上梓しているが、同書では、企業は、技術、市場、社会などの環境の変化に支配されるので、環境の変化に対する戦略的意思決定の必要性を唱えている。

“*The Firm of the Future*” HBR, September 1965（邦訳「企業の未来」2007年2月号）は、同時期にHBR誌に掲載されたが、その骨子であり、同論文は1965年度のマッキンゼー賞を受賞している。同論文が書かれた時、アンソフは既にロッキード・エレクトロニクス社を辞めて、ピッツバーグのカーネギ工科大学（1965年にカーネギ・メロン大学になる）産業管理大学院（現テッパー・スクール・オブ・ビジネス）の所属になっていた。アンソフは、大学へ異動した経緯を以下のように語っている。

「1962年の夏、長期休暇をとってマサチューセッツ州の保養地ケープコッドに滞在中のことであった。ある朝、ひげを剃っていた時にふと思った。残された人生、長期的に見て

このままでいいのだろうか。企業は早期に退職すべきであり、どこかのビジネススクールの教員になろう。直ぐにでも職を探そう」と。

大学の教員になる、というアンソフの意思は、ロッキード・エレクトロニクス社での計画担当VP（Vice President）として進めていた戦略計画の考え方を広く薦めたいという意識と、計画管理の日常的な業務から解放されて、アンソフ個人の人生にとって新たな「戦略的な業務」に注力したい、という思いでもあった。その年にカーネギ工科大学のビジネススクールに応募し、職を得ることができたが、1年間は講義をもたずに、すべての時間を『企業戦略論』の著作の執筆にあてることができた。

同時期に、アルフレッド・D・チャンドラーが“Strategy and Structure: Chapters in the History of the Industrial Enterprise”, MIT Press, 1962（邦訳『組織は戦略に従う』ダイヤモンド社）が出版された。

アンソフにとって、戦略は、意思決定をするマネジメントの資質、組織の経営資源や組織文化によって決まるのであるから、チャンドラーの唱えた「組織は、戦略に従う」のではなく、むしろ「戦略は、組織に従う」のであり、しかも戦略の実効性を高めるためにはプランニング・システムとしての「戦略プログラミング」が必要と考えた。

その後、アンソフは、“Strategic Management” 1979（邦訳『戦略経営論』産能大学出版部、1980）、“Implanting Strategic Management” 1984（邦訳『戦略経営の実践原理』ダイヤモンド社、1994）、さらに“The New Corporate Strategy” 1988（邦訳『最新・戦略経営』産能大学出版部、1990）を上梓した。

6. 戦略経営の父と呼ばれて

経営戦略論は、実際に企業の重要な経営課題を体現していた実務家に創始されたが、その端緒を開いたのが、1965年に上梓したアンソフの“Corporate Strategy”であった。企業が将来的に直面する事業環境の複雑で多様な変化のもたらす不確実性を「乱気流（turbulence）」と呼び、乱気流がもたらす経営課題に対する戦略的意思決定を示す体系的な戦略計画の必要性を唱えており、企業を取り巻く外的環境と企業の経営資源の時間的な適合パターンないしプロセスを経営戦略とした。

ハーバード・ビジネススクールをはじめとして“Corporate Policy”が経営戦略を表す用語としてきたが、大学の研究者が経営戦略を企業の有形無形の経営資源である強みと弱みを外的環境との関係における機会と脅威への対応を戦略としてとらえるようになるには、1971年にアンドリュースが著した“The Concept of Corporate Strategy”まで待たねばならなかった。

経営戦略論は、1960年代に創始された戦略計画論に加えて1970年代以降、創発戦略論、ポジショニング・ビュー、リソース・ベースト・ビュー、ゲーム論的アプローチ、ダイナミック・ケイパビリティ戦略論へと理論的に多様な発展を示してきた。その過程で、アンソフの提起した経営戦略の手法は、情報過多な分析に陥る場合もあり、「分析麻痺症候群」

として批判されることもあった。

今日、多くの企業が中長期の事業計画を策定するが、実務の領域で採用されている策定プロセスは、依然としてアンソフの提示した戦略計画策定プロセスに従う場合が少なくない。それは、アンソフが、不確実性の高い事業環境に対する経営戦略を分析的かつ体系的に、戦略的な経営（strategic management）の在り方を理論化したことによる。

アンソフは、戦略経営の伝道師として、いろいろな大学で教鞭をとった。カーネギ・メロン大学の後、テネシー州ナッシュビルのバンダービルト大学（1968-1973）、ベルギーのEIAS（1973-1975、1976-1983）、スウェーデン・スクール・オブ・エコノミクス（1973-1977）、カリフォルニア州サンジエゴのUS国際大学（現アライアント国際大学）（1983-2001）と、決してひとところにとどまることのない人生を選択しなかった。

アンソフの人生を見る時、ロシアで幼少年時代、そしてアメリカでの新たな環境に挑戦しようとした青年時代の実体験から、アンソフは、異質な環境の変化に対して、自分の戦略的意思決定を楽しむかのような人生をあえて選択したように思える。

執筆者紹介

二本松 泰 子	長野県立大学グローバルマネジメント学部	准教授
Jean-Pierre Joseph Richard		
	長野県立大学グローバルマネジメント学部	講師
宮 森 征 司	長野県立大学グローバルマネジメント学部	助教
真 野 毅	長野県立大学グローバルマネジメント学部	教授
高 梨 良 夫	長野県立大学	特命教授
金 賢 仙	長野県立大学グローバルマネジメント学部	准教授
富 田 裕 子	長野県立大学グローバルマネジメント学部	教授
森 本 博 行	長野県立大学グローバルマネジメント学部	教授

グローバルマネジメント 第3号

印刷 2020年8月28日

発行 2020年8月28日

編集代表者 森本 博行

発行所 長野県立大学

〒380-0803 長野県長野市三輪8丁目49番7号

TEL 026-217-2241 (代表)

FAX 026-235-0026

E-mail daigaku@u-nagano.ac.jp

印刷所 カシヨ株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田1-27-9



2020.8
VOL.3

The Global Management of Nagano

[Articles]

Hawking Schools and Texts Relating to the Yoshida Style of Hawking: Examining the Kishu Clan	NIHONMATSU Yasuko	1
CEFR-J Can Do Self-Assessment and TOEIC Listening and Reading Scores	Jean-Pierre Joseph RICHARD	21
Public Private Partnership in the field of Local Electricity Business	MIYAMORI Seiji	33
Effects of Short-term International Study Program required 100% participation: ~A Study based on Modified Grounded Theory Approach~	MANO Tsuyoshi	45
Jacob Böhme’s Influence on R. W. Emerson through S. T. Coleridge	TAKANASHI Yoshio	64
Institutional Architecture of Enforcement on Corporate Reporting in UK—Recommendations of Kingman Report—	KIM Hyonson	81
The life and remarkable achievements of Anita Roddick, a dreamer, a doer and a female entrepreneur	TOMIDA Hiroko	100

[Review]

H. Igor Ansoff and Strategic Management	MORIMOTO Hiroyuki	124
--	-------------------	-----

